第３章　調査の記録

第１節　調査地点と層序

１．調査地点

本調査地点は岡山大学鹿田地区の北東部に位置しており、鹿田地区構内座標ではAV～BB・04～07区に位置する（図５）。発掘調査直前には駐車場として利用されていた。

本調査地点は鹿田キャンパスの東端にあたり、北側に立体駐車場、北西に歯学部棟が位置する。前者の建設時には鹿田遺跡第16次調査（調査年度：2004年度）(1)を実施しているのみで、本地点周辺は既調査が比較的少ない。しかし、西に100m程で第１次調査地点、南西に70m程で第２次調査地点が存在し、両地点では弥生時代中期～古墳時代初頭の遺構・遺物が密度高く確認されている(2)。本調査地点では、集落の東への広がりや地形の状況の確認が期待された。また調査前に実施した試掘・確認調査(3)の結果をうけて、本調査地点には弥生時代～近世の遺構・遺物の存在が想定された。

註　(1)　高田貫太2004「鹿田遺跡第16次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2004』
(2)　吉留秀敏・山本悦世1988『鹿田遺跡１』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第３冊
(3)　野﨑貴博2012「岡山県地域医療総合支援センター予定地」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2010』

２．層序

本調査地点は駐車場として利用される以前に、管理棟が建設されておりその建立は1930（昭和５）年である。

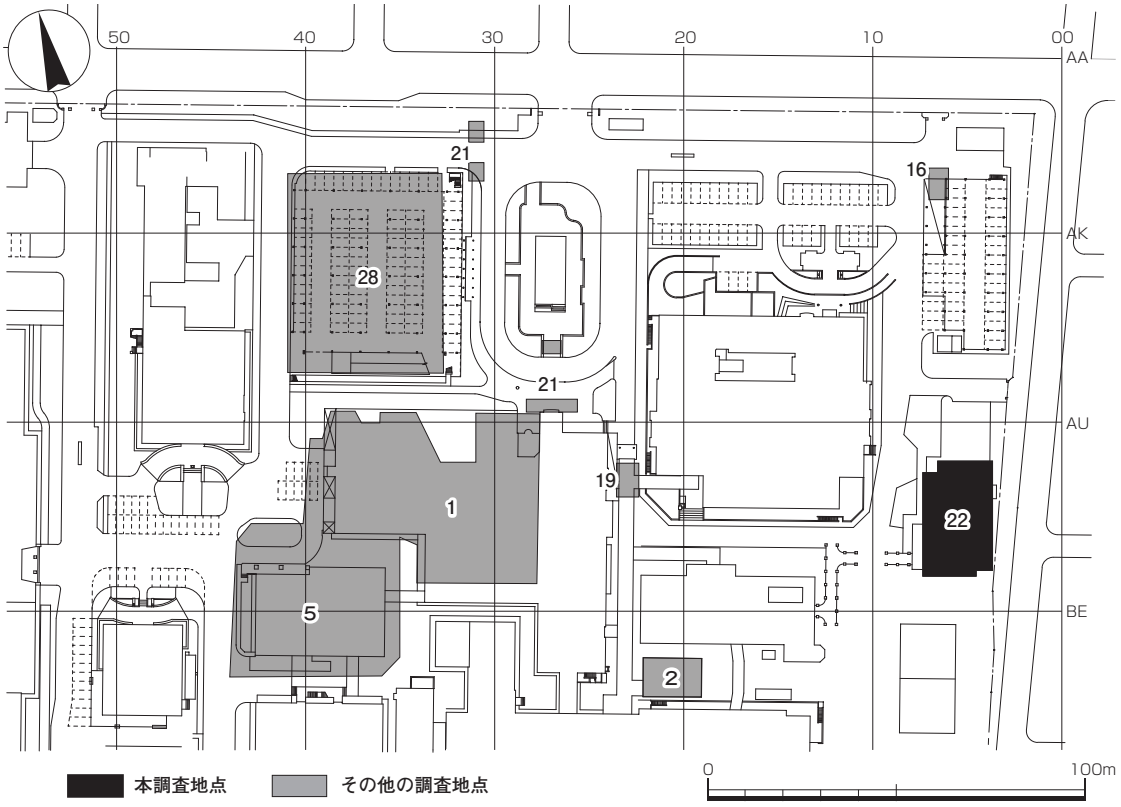


図５　本調査地点と周辺の既調査地点（縮尺1/2000）

３階建コンクリート製の建物であり、本調査地点の大部分は基礎工事により大きく破壊を受けていた。前述したように、本調査は遺跡の破壊を最小限に留めるためにコンクリート基礎を残したまま、前期調査を実施した。前期調査の終了後、コンクリート基礎を破砕・撤去し、残りの部分の調査を後期調査として実施した。図６に土層断面柱状図を示し、基本土層を以下に記述する。

＜１層＞1922（大正11）年に現在の岡山大学キャンパスに移転した岡山医科大学の建設工事に伴う造成土およびそれ以後、現代に至るまでの堆積土である。黄褐色を呈する真砂土を基調に大小の礫を含む。本地点南半は1925（大正14）年に文部省の所有となったことが判明し、また本調査地点北半は、岡山医科大学の移転後も1928（昭和３）年まで民有地が残されていたことが明らかであった地点である。その後、1930（昭和５）年に本調査地点全体が上述したコンクリート建物基礎工事の範囲に含まれることとなった。

＜１層＞上面の標高は2.8～2.9mを測る。＜１層＞には弥生時代後期以降近現代までの遺物が含まれ、コンテナ（28㍑）12箱の遺物が出土した。

＜２層＞～＜５層＞は近代の遺構（SG1・SG2）による破壊を免れた一部の箇所で確認された土層である。図６－⑥に代表される、調査区中央部で堆積が確認された。

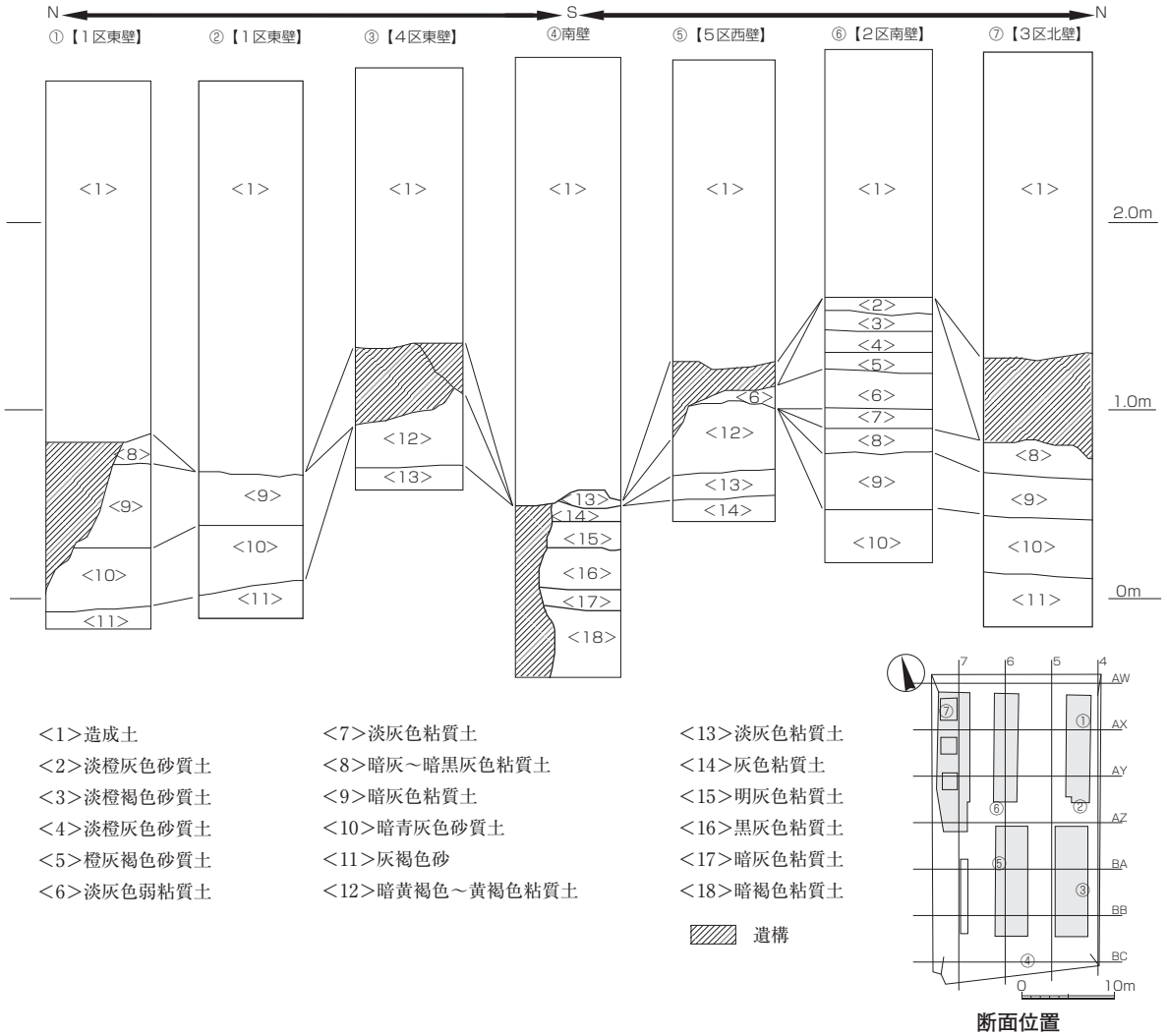


図６　土層断面柱状図（縮尺1/40）

＜２層＞淡橙褐色砂質土層である。上面のレベルは標高1.6mを測る。層厚は0.05mを測る。近代層である。庭園遺構および井戸は本層上面の遺構である。＜２層＞からはコンテナ（28ℓ）１／４箱の遺物が出土した。弥生時代後期～中世、近世、近代の遺物が含まれる。

＜３層＞淡橙褐色砂質土層である。上面のレベルは標高1.55m、層厚は0.1mを測る。近世～近代の層である。

＜４層＞淡橙灰色砂質土層で、上面の標高1.42m、層厚0.12mを測る。近世層である。＜３層＞・＜４層＞から併せてコンテナ（28ℓ）１／４箱の遺物が出土した。近世陶磁器・瓦を含む。

＜５層＞淡灰褐色砂質土層である。上面の標高1.3m、層厚0.1mを測る。近世層である。＜５層＞出土遺物はコンテナ（28ℓ）１／４箱が出土し、近世陶磁器・瓦のほか、弥生土器・須恵器が含まれる。

＜６層＞淡灰色弱粘質土層である。上面の標高は1.2m、層厚0.2mを測る。中世層である。コンテナ（28ℓ）１／４箱の遺物が出土し、須恵器・弥生土器が含まれる。図６－⑤に認められるように、＜12層＞直上で＜６層＞の堆積が見られ、本層の堆積段階に本地点一帯は削平を受けていることが窺える。本層は土色・土質の点から、耕作土の可能性が考えられる。

＜７層＞淡灰色粘質土層である。上面の標高は1.0m、層厚は0.1mを測る。土色・土質の点から＜６層＞と類似し、中世層と考えられる。出土遺物は少なく、古墳時代初頭の土器が含まれる。

＜８層＞～＜11層＞は調査区北半で確認された土層である。

＜８層＞暗灰～暗黒灰色を呈する粘質土層である。上面の標高は調査区中央部で0.9m、調査区北端で0.8mを測る。層厚は0.12～0.2mで、北にやや傾斜をもち、層厚を増す。＜８層＞出土遺物には、弥生時代後期～古墳時代初頭の土器が含まれ、後者は少ない。時期としては古墳時代初頭とする。

＜９層＞暗灰色粘質土層である。有機質を多く含む。上面の標高は調査区中央部で0.75m、調査区北端で0.65mを測る。層厚は0.25～0.3mで、北にやや傾斜をもつ。＜９層＞出土遺物はコンテナ（28ℓ）５箱があり、弥生時代後期の遺物で占められ、後期後半が主体である。

＜10層＞暗青灰色砂質土層である。上面の標高は調査区中央部で0.48m、調査区北端で0.4mを測る。層厚は0.3mを測る。出土遺物はコンテナ（28ℓ）14箱があり、時期としては弥生時代後期に比定される。

＜11層＞灰褐色砂層である。上面の標高は調査区中央部で0.1m、北端部で－0.05mを測る。－0.2mまでの堆積を確認した。本調査地点では遺物は確認されていない。

＜12層＞～＜18層＞は本調査地点南半でのみ確認した土層で、微高地を形成する土層である。

＜12層＞暗黄褐色～黄褐色を呈する粘質土層である。最も高いところで標高1.1mを測るが、大半の箇所で後の削平を受け、本来の標高は明らかでない。本調査地点で弥生時代後期の基盤層となる層である。層厚は0.3～0.4mを測る。

＜13層＞淡灰色を呈する砂質土層である。上面の標高は0.7m、層厚は0.1～0.15mを測る。

＜14層＞灰色粘質土層である。上面の標高は0.55m、層厚は0.1mを測る。

＜15層＞明灰色粘質土層である。上面の標高は0.4m、層厚は0.1mを測る。

＜16層＞黒灰色粘質土層である。上面の標高は0.25m、層厚は0.2mを測る。

＜17層＞暗灰色粘質土層である。上面の標高0.05m、層厚は0.1mを測る。

以上の＜14層＞～＜15層＞、＜16層＞と＜17層＞は漸移的な差異をもって分層している。

＜18層＞暗褐色粘質土層である。上面の標高は－0.1m、最深部で標高－0.4mまで堆積を確認した。

本調査地点では＜11層＞以下の各土層から遺物の出土は確認されておらず、時期としては弥生時代後期以前とする。

本調査地点の地形を時期を追って記述する。弥生時代後期段階には、本調査地点南半、概ね東端のAYから西端のAZを結ぶライン以南が微高地をなし、北半が北へ傾斜をもつ低位部をなしている。微高地では＜13層＞以下

が粘土～粘質土の互層をなし、層厚10～15㎝で堆積するのに対し、＜12層＞は砂質土が40㎝以上の厚さを有することから、環境の変化が窺われる。微高地の形成は弥生時代後期までに進んだものである。繰り返しになるが、本調査地点の大半は後世の遺構等により大きく攪乱を受けており、＜12層＞は少なくとも標高1.1ｍ以上に本来のレベルが想定される。

一方、低位部については＜11層＞上面の標高は0.1ｍ以下を測り、微高地との比高差は１ｍ以上である。この比高差は、低位部に＜10層＞～＜８層＞が古墳時代初頭までに堆積し、次第に縮まったことが窺える。堆積状況からは＜10層＞以下で砂の堆積が特徴的であり流水を伴う状況を示すのに対し、＜９層＞には有機質を多く含むことから湿地環境への変化が看取される。低位部と微高地との比高差が解消されるのは＜７層＞段階であり、さらに＜６層＞堆積時には、微高地部の削平も伴う改変が認められ、本調査地点はほぼ平坦化したことがわかる。その時期は中世に求められる。これにより、古墳時代～古代の土層は本地点では欠落することとなる。

土地利用の点では、遺構の分布から、弥生時代後期には南半の微高地上に居住域が展開し、低位部との境界に溝、土器集中、そして低位部に土坑が位置する。この時期北半の遺構は希薄であり、活動には適さない環境と推定される。中世前半の居住域も、井戸の分布から調査地点南に想定され、この時期、鹿田キャンパス全域に広がる屋敷地の範囲に、本地点は含まれない。中世前半の本地点北半は耕作地として利用された可能性がある。中世後半になると１基ではあるが、調査地点北部に井戸が検出されており、これを皮切りにその後近世にはいると本地点全域が居住域へと変化したことが認められる。その利用は庭園遺構が確認された近代においても認められ、岡山医科大学移設に際する工事まで継続する。

第２節　弥生時代～古墳時代の遺構・遺物

本時期に属する遺構には井戸３基、土坑６基、溝５条および土器集中が挙げられる（図７）。地形としては構内座標AZライン付近を境にして北側は低位部、南側は微高地にあたっており、微高地で井戸・土坑・溝２条を、ま

土器集中１（西から）

土器集中２（東から）

土器集中３（北から）

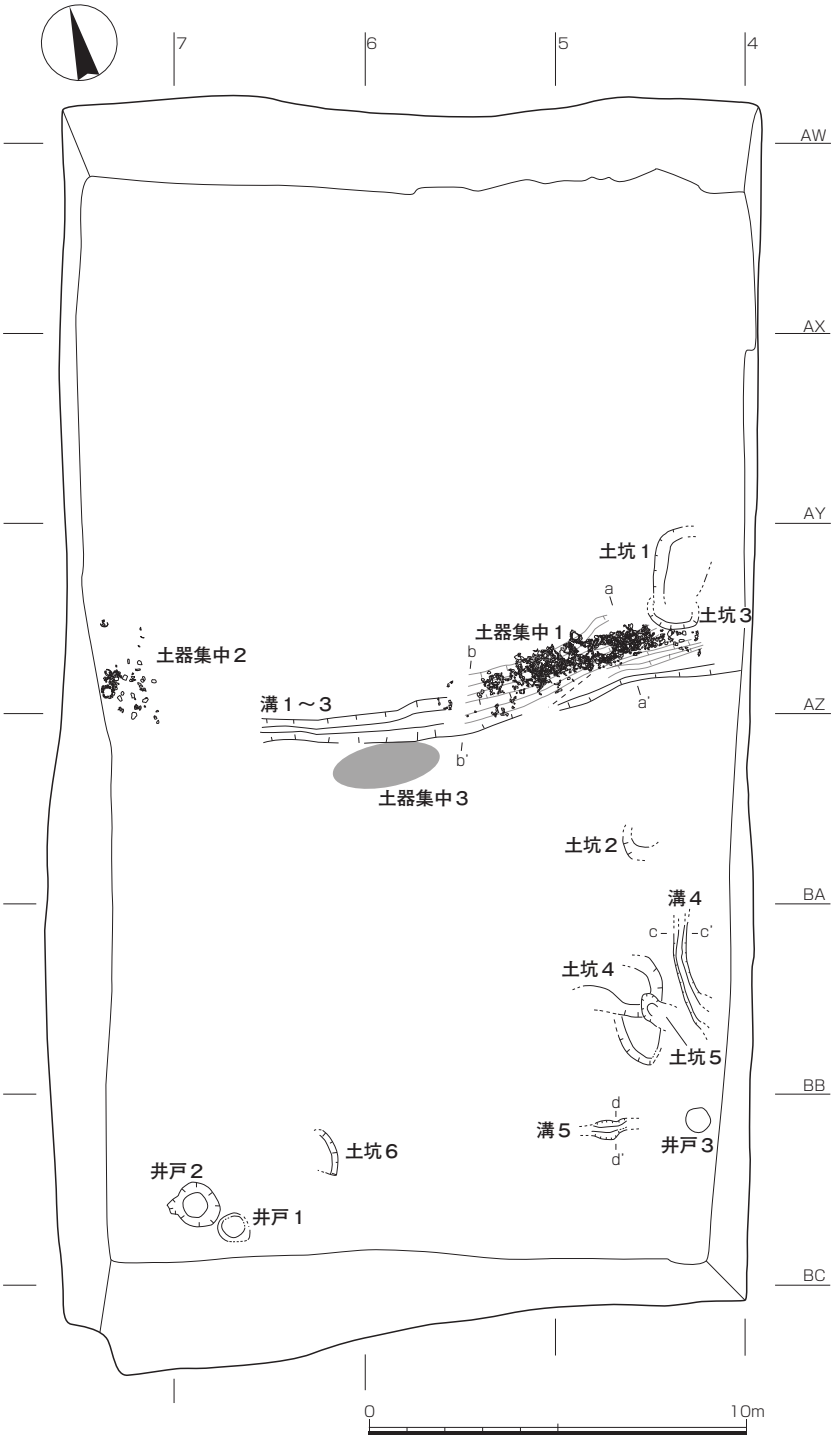


図７　弥生時代～古墳時代遺構全体図（縮尺1/200）

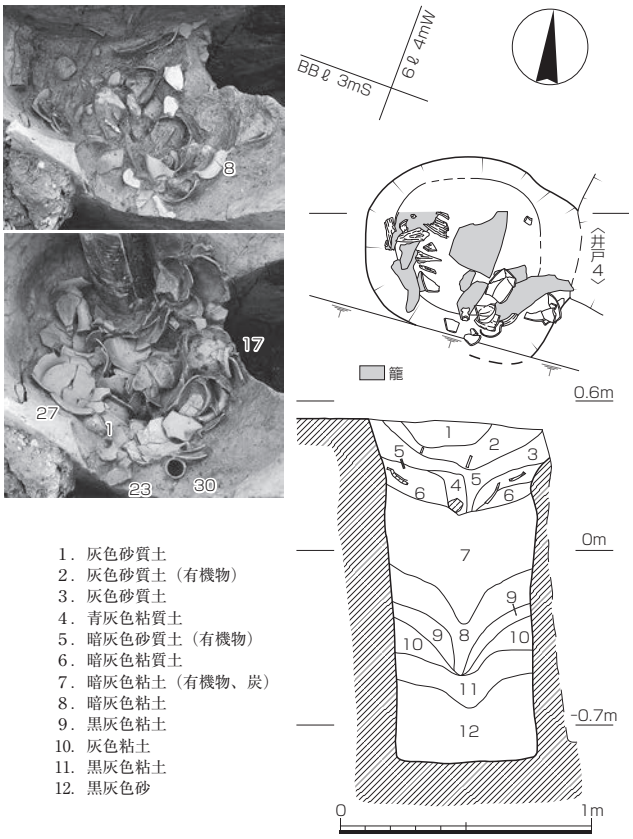


図８　井戸１（縮尺1/30）

た地形の境界付近で溝３条と土器集中を、さらに低位部で土坑２基を検出した。

１．井戸

井戸１（図８～11　図版２）

調査区南端、BB06区に位置する。上面では径0.8ｍの円形、底面では径0.58ｍの円形を呈する。検出面の標高0.52ｍを測り、検出面からの深さは1.3ｍを測る。東側を井戸４に切られ、２カ所にマツ杭が打ち込まれており、埋土にその影響が認められた。

埋土は12層に分けた。１～３層は灰色を主とする砂質土、４層は青灰色粘質土である。５層は暗灰色砂質土、６層は同色で粘質である。７層は有機質・炭化物を含む暗灰色粘土層、８～11層は暗灰色を主体とする粘土、最下層の12層は黒灰色砂層である。11・12層は使用時の堆積層、８～10層はブロックを多く含む粘土で埋め土と考えられる。７層以上も埋め土であるが、７層上面および６層上面に籠状に編まれた有機物が確認され、その上下である５・６層から多量の土器が出土している。７層まで埋め戻した段階での祭祀行為が窺われる。本遺構の上位は削

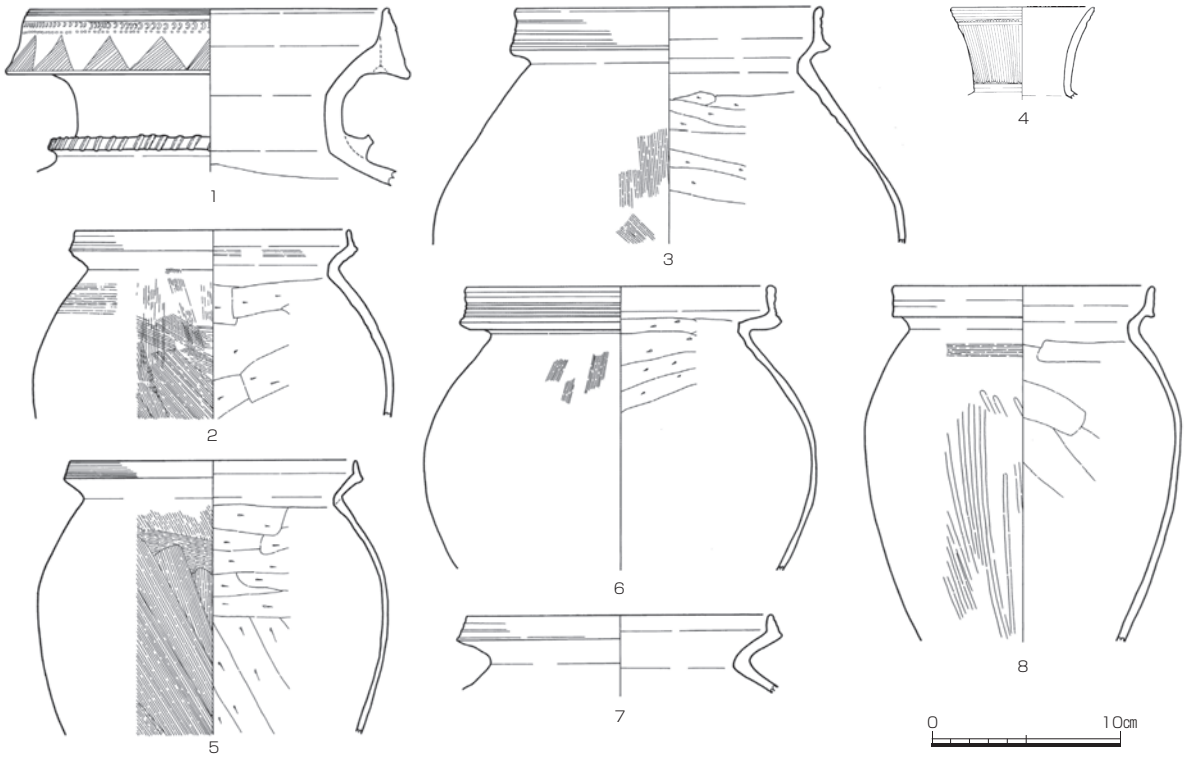
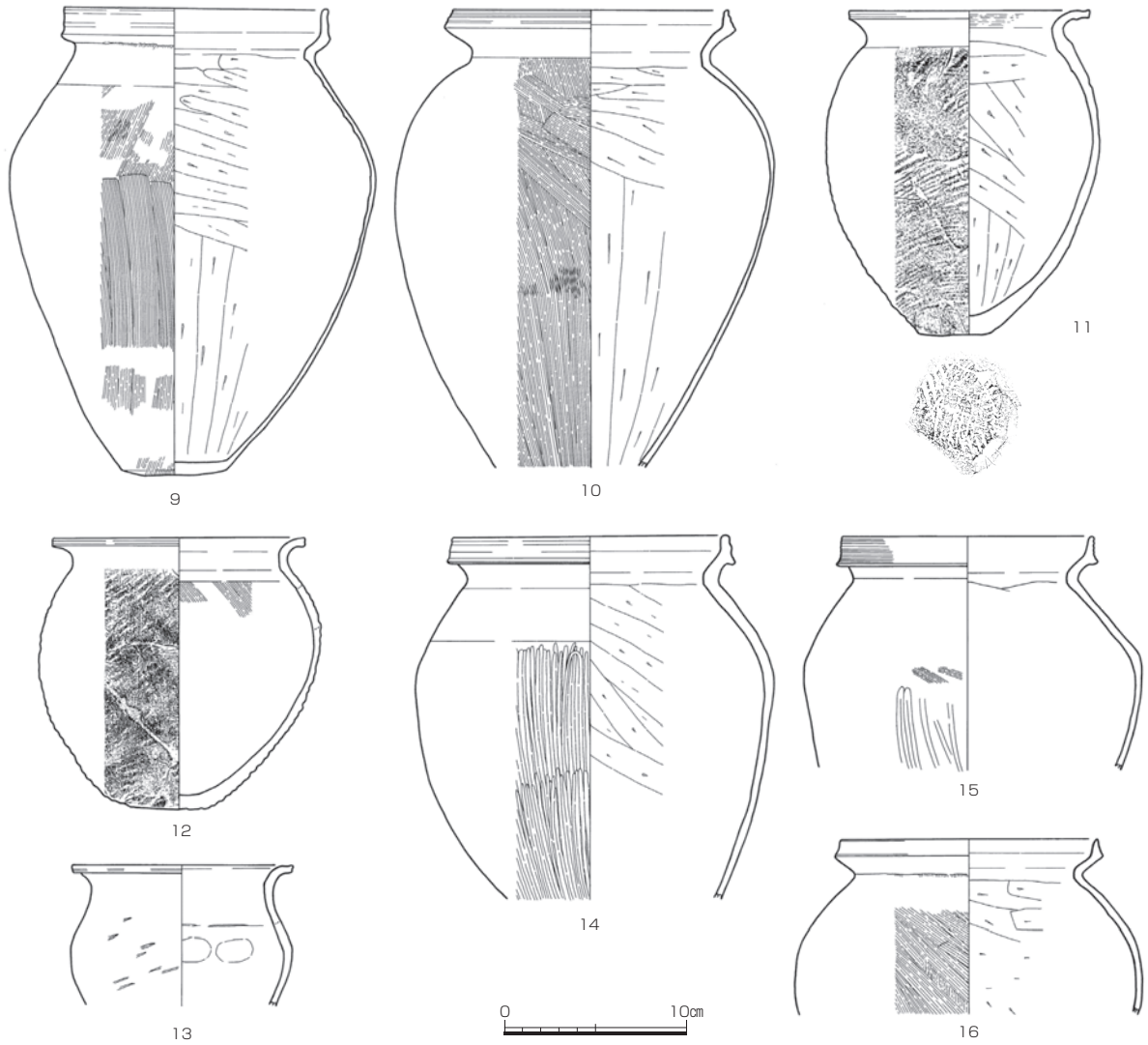
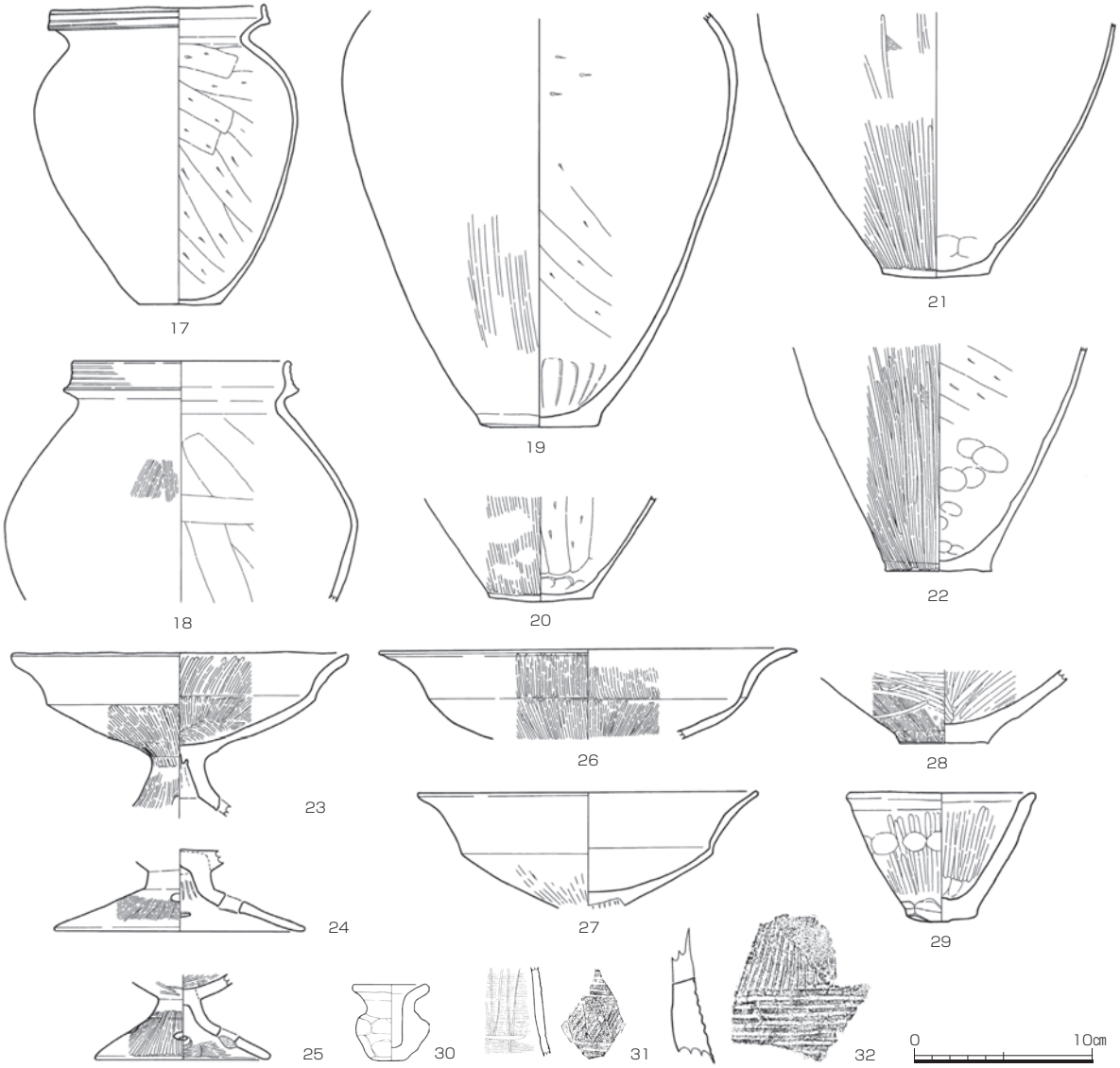


図９　井戸１出土遺物１（縮尺1/4）



番号	器　種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残　存	特　徴	色　調	胎　土
1	弥生土器　壺	19.0	－	－	1/1	内：ナデ・篦ケズリ、外：ナデ、口縁部：3条の沈線・半載竹管文・刺突文・鋸歯文、頸部に貼付突帯文に刻み目	淡橙	微砂　2～5㎜大の礫を含む
2	弥生土器　壺	14.3	－	－	1/5	内：ナデ・篦ケズリ、外：ハケ目、口縁部2条の凹線、煤、内外面磨滅	内：淡橙白　外：橙	微砂
3	弥生土器　壺	16.0	－	－	3/4	内：ナデ・篦ケズリ、外：ナデ・縦ハケ目・斜めハケ目、口縁部：3条の凹線、黒斑	内：淡橙・淡橙灰 外：淡橙	微砂
4	弥生土器　壺	7.0	－	－	1/1	内：ナデ、外：ミガキ、口縁部：3条の凹線	明橙	微砂
5	弥生土器　甕	15.0	－	－	1/3	内：篦ケズリ・ナデ、外：ナデ・横ハケ目・斜めハケ目、口縁部：5条の沈線	内：淡橙 外：淡黄灰・淡橙	微砂
6	弥生土器　甕	16.2	－	－	1/1	内：ナデ・篦ケズリ、外：縦ハケ目、口縁部1条の凹線・4条の沈線、煤、内外面磨滅	淡橙	微砂
7	弥生土器　甕	16.1	－	－	3/4	内：ナデ、口縁部2・3条の凹線、内外面磨滅、剥落	淡橙	微砂　白色粒　黒色粒
8	弥生土器　甕	13.7	－	－	1/4	内：ナデ・篦ケズリ、外：ナデ・ミガキ・横ハケ目、煤、内外面磨滅	明橙	微砂
9	弥生土器　甕	14.4	5.5	25.5	1/1	内：ナデ・篦ケズリ、外：ナデ・ハケ目、煤、内外面磨滅	内：橙　外：淡黄橙	微砂
10	弥生土器　甕	15.0	－	－	1/1	内：ナデ・篦ケズリ、外：ミガキ・ナデ、口縁部：2条の凹線、煤、内外面磨滅	淡橙	微砂
11	弥生土器　甕	13.1	3.9	17.7	1/1	内：ナデ・篦ケズリ、外：ナデ・平行タタキ、外底：格子目タタキ	淡橙・淡黄灰	微砂
12	弥生土器　甕	13.8	5.3	14.8	口3/4 底1/1	内：ナデ・斜めハケ目、外：ナデ・平行タタキ、外底：格子目タタキ	淡黄橙	微砂
13	弥生土器　甕	12.0	－	－	1/4	内：ナデ・オサエ、外：ナデ・平行タタキ、口縁部：1条の沈線、煤	淡橙	微砂
14	弥生土器　甕	15.0	－	－	1/1	内：ナデ・篦ケズリ、外：縦ハケ目・斜めハケ目・ナデ、口縁部：3条の凹線、外面煤、圧痕	淡橙	微砂
15	弥生土器　甕	13.6	－	－	1/2	内：ナデ、篦ケズリ外：ナデ・斜めハケ目・ミガキ、口縁部：6条沈線、煤、圧痕、内外面磨滅	淡橙	微砂
16	弥生土器　甕	14.0	－	－	1/4	内：篦ケズリ・ナデ、外：ナデ・斜めハケ目、内外面煤	淡橙	微砂

図10　井戸１出土遺物２（縮尺1/4）



番号	器　種	口径（cm）	底径(cm)	器高(cm)	残　存	特　徴	色　調	胎　土
17	弥生土器　甕	12.0	4.3	16.7	3/4	内：ナデ・篦ケズリ、外：ナデ、口縁部：3条沈線、圧痕	淡黄灰	微砂
18	弥生土器　甕	12.0	−	−	4/5	内：ナデ・篦ケズリ、外：縦ハケ目・ナデ、煤、内外面磨滅	橙	微砂
19	弥生土器　甕	−	6.6	−	1/1	内：篦ケズリ、内底：ナデ、外：ミガキ、黒斑、内外面磨滅、煤付着	内：黒(煤)　外：淡黄～淡橙	微砂　白色粒　2㎜大の砂礫
20	弥生土器　甕	−	5.8	−	1/1	内：篦ケズリ、内底：オサエ、外・外底：篦ミガキ、内外面煤	内：鈍い赤褐 外：淡橙	微砂
21	弥生土器　甕	−	5.9	−	1/1	内：篦ケズリ・オサエ、内底：オサエ、外：ハケ目・ミガキ、内外面煤、外面磨滅	内：暗灰褐　外：暗褐	微砂
22	弥生土器　甕	−	5.9	−	3/4	内底：オサエ、外：ハケ目・ミガキ、煤、内外面磨滅	内：淡灰褐 外：淡橙	微砂
23	弥生土器　高杯	18.6	−	−	1/2	内外：ミガキ、透かし孔2カ所残存、外面磨滅	内：明橙　外：橙	微砂
24	弥生土器　高杯	−	13.9	−		内：ナデ、外：ハケ目、脚内部：絞り痕、円孔4カ所（径1.1cm）、外面磨滅	淡橙	微砂
25	弥生土器　高杯	−	9.9	−	1/1	杯内外：ミガキ、脚内：ハケ目・ナデ、脚外：ミガキ、円形透かし孔4カ所（径1.1cm）	浅黄橙	微砂
26	弥生土器　高杯	23.0	−	−	1/4	内外：ミガキ・ナデ	淡橙	水濾粘土
27	弥生土器　高杯	18.9×18.8	−	−	1/1	外：篦ミガキ、内外面磨滅	明橙	微砂
28	弥生土器　鉢	−	4.8	−	1/3	内：篦ミガキ、外：オサエ、斜めハケ目・篦ミガキ、一部磨滅	明橙	細かい　水濾粘土
29	弥生土器　小型鉢	10.2	3.7	7.2	口1/4 底1/2	内：ミガキ・ナデ、内外底：オサエ、外：ミガキ・オサエ・ナデ、外底に篦の痕跡	淡橙灰	微砂
30	弥生土器　手づくね土器	4.0	2.2×2.5	4.2	口1/2 底1/1	内：ナデ、外：ナデ・オサエ	内：暗灰褐　外：暗灰	微砂
31	弥生土器　不明	−	−	−		内：横ハケ後ミガキ、外：5条の沈線・3本の沈線、数条の沈線を施した菱形文が連続して施文	内：淡黄橙　外：淡橙	微砂
32	弥生土器　器台	−	−	−		内：ナデ、外：ナデ、7条の篦描き文、長方形の透かし孔1カ所	黄褐	微砂　白色粒

図11　井戸１出土遺物３（縮尺1/4）

平をうけており、本来の上面は標高1.0m付近に想定される。５層より上位においても、井戸を埋めていく途中で複数回の祭祀行為が予想される。

遺物はコンテナ（28ﾘｯﾄﾙ／箱）３箱が出土した。壺４点、甕18点、高杯５点のほか、鉢、手づくね土器、器台が挙げられる。完形の甕は３点、完形に近く復元できたものも含めると８点に上り、量の多さが目立つ。これらの多くは５層と６層に含まれており、６層上面と７層上面にそれぞれ籠状の有機物が確認された。状況を復元すると、７層まで埋め戻した時点で中央に籠が置かれた後６層の堆積をはさみ、多量の土器を並べ置かれる。写真で状況がわかる限り、高杯（図11－23）・手づくね土器（同－30）、甕（同－17）等はほぼ正位置である。その後別の籠が置かれ、その上にも土器が重ねられている。籠はいずれも大変細かい茎状あるいは葉により構成されていたが、形を留めたまま取り上げることはできなかった。調査時の所見では編み方に少なくとも２種が観察された。籠であれば底面と側縁といった差異によるものと考えられる。そのほか甕（図９－６）内土壌より小型種子３科３種を描出している（第４章２参照）。また本井戸からモモ６点が出土した。

本遺構の時期は弥生時代後期である。

井戸２（図12・13　図版３）

調査区南端、BB07区に位置する。井戸１の西に隣接する。上面では1.35×1.18mのいびつな楕円形、下面では径0.65mの円形を呈する。検出面は標高0.55m、底面は標高－0.8mを測り、検出面からの深さは1.25mである。底面から0.5mはまっすぐ立ち上がり、それより上位はＹ字形に広がる。平面形で西側が歪に広がる点、断面形状においても西側の傾斜が緩やかな点、さらに18層以下と以上での埋土の特徴を考え、18層の堆積後に掘り直されている可能性がある。

埋土は22層に分けた。１～17層と18層以下に大別される。後者のうち最下層22層は使用時の堆積、18～21層は埋め土と考えられる。出土遺物は少なく、21層から壺の頸部（図13－１）とミニチュア土器（同－７）が出土した。前述したように１～17層は掘り直し後の堆積と考えられる。17層の堆積状況から井戸枠材が粘土化した可能性を考えている。16層は使用時、15層より上位は埋め戻しによる堆積層であろう。図12右上に示したように、13層中に木材が多く含まれており、一部に加工痕が認められ、これらは枠材の一部と考えられる。

遺物はコンテナ（28ﾘｯﾄﾙ）１／

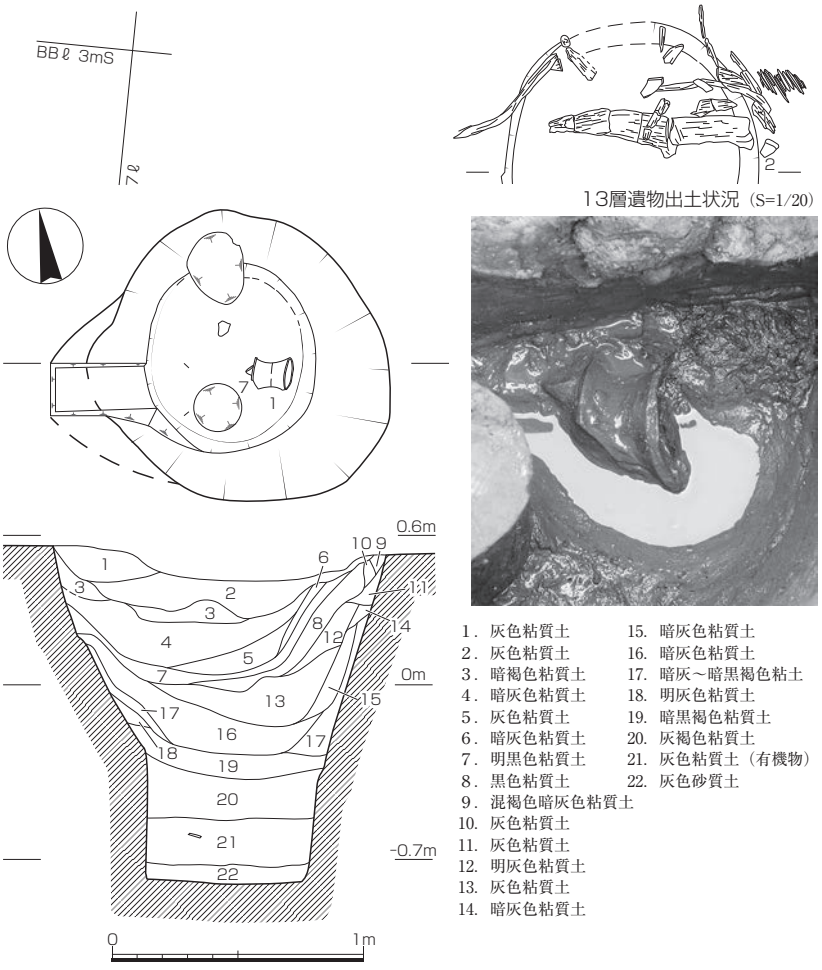
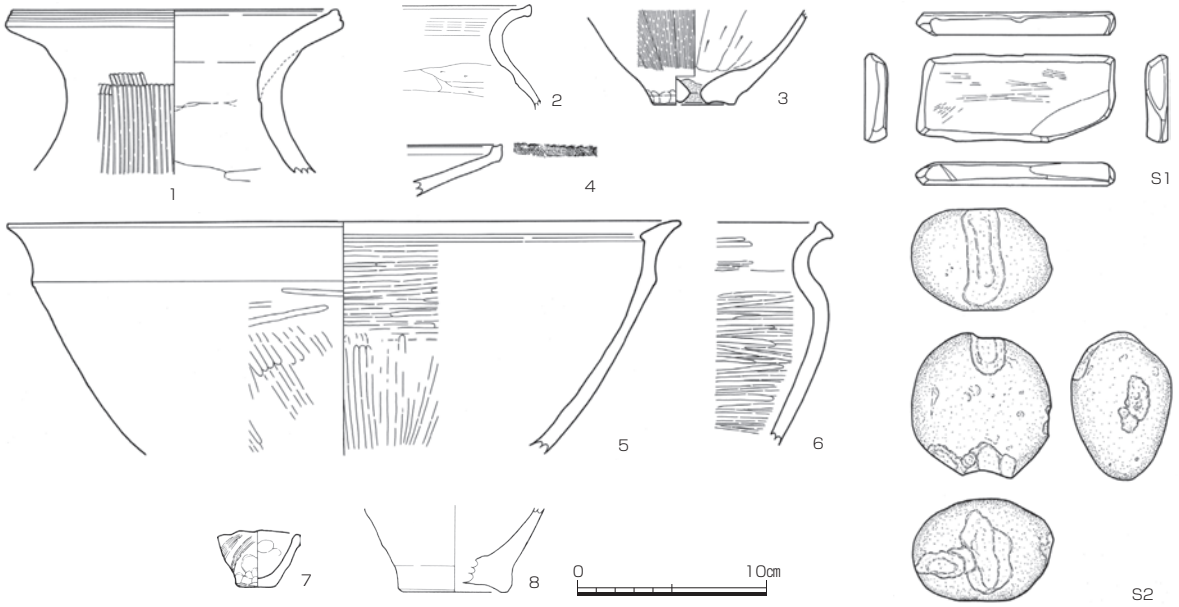


図12　井戸２（縮尺1/30）



番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存	特　徴	色　調	胎　土
1	弥生土器　壺	17.1	－	－	1/4	内：ナデ・篦ケズリ､外：ナデ・縦ハケ目､口縁部：2条の凹線	内：淡黄橙　外：淡黄白	微砂
3	弥生土器　甕	－	4.3×4.2	－	1/1	内：篦ケズリ、外：ナデ・オサエ・縦ハケ目、内外面煤、底部6mmの穿孔	内：淡橙灰　外：暗黄灰	微砂　白色粒
2	弥生土器　甕	－	－	－		内：ナデ・工具ナデ・篦ケズリ、外：ナデ・縦ハケ目、外面煤、内外面磨滅	淡黄灰	微砂　白色粒
4	弥生土器　高杯	－	－	－		内：ナデ、外：ナデ・ミガキ　口縁部：鋸歯文	内：淡橙　外：明橙	微砂
5	弥生土器　鉢	34.4	－	－	1/4	内：ナデ・ミガキ、外：ナデ・ミガキ、外面磨滅	内：淡黄橙　外：淡橙・淡黄橙	微砂　白色礫　白色粒
6	弥生土器　鉢	－	－	－		内：ナデ・ミガキ、外：ナデ・ハケ目・ミガキ	内：黄灰　外：淡黄灰	細砂　白色粒
7	弥生土器　手づくね土器	3.9	2×1.9	1.7	口（－） 底1/1	内外：ナデ・オサエ、外底：オサエ	淡黄灰	微砂　白色粒　黒色粒
8	弥生土器？不明底部		5.6		1/3	外：ナデ、自然釉？内外面の調整不明	暗黒褐	微砂

番号	器種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量（g）	石材	特徴
S1	砥石	10.3	4.6	1.2	109.8	粘板岩ホルンフェルス	完存、砥面2面
S2	石錘	7.4	7.4	5.3	377.6	安山岩	完存、擦痕5カ所

図13　井戸２出土遺物（縮尺1/4）

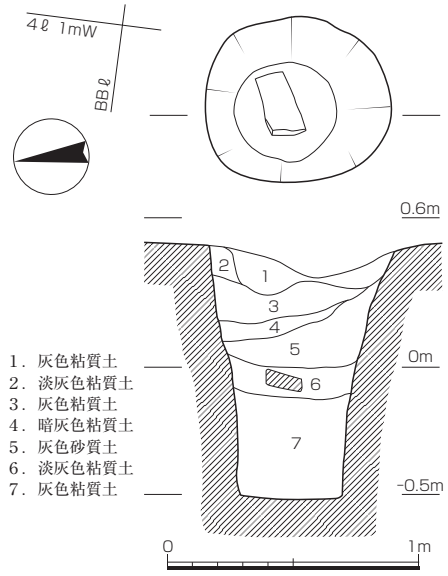


図14　井戸３（縮尺1/30）

３箱が出土した。壺・甕・高杯等がみられるがそれほど多くない。本遺構の時期は弥生時代後期である。

井戸３（図14　図版４）

調査区北東、BB04区に位置する。上面では南北0.75×東西0.65ｍの楕円形、底面では径0.4ｍの円形を呈する。検出面の標高0.5ｍ、底面の標高－0.5ｍで、検出面からの深さ1.0ｍを測る。＜12層＞上面の遺構であるが、後世に50㎝程度の削平を受ける。底面から上面へ緩やかに広がる断面形を呈する。

埋土は７層に分けた。灰色を主体とする粘質土層が中心で、３層・５層は砂質である。最下層７層は使用時の堆積層であろう。６層以上は埋め戻しと考えられ、６層中で礫１点が出土した。

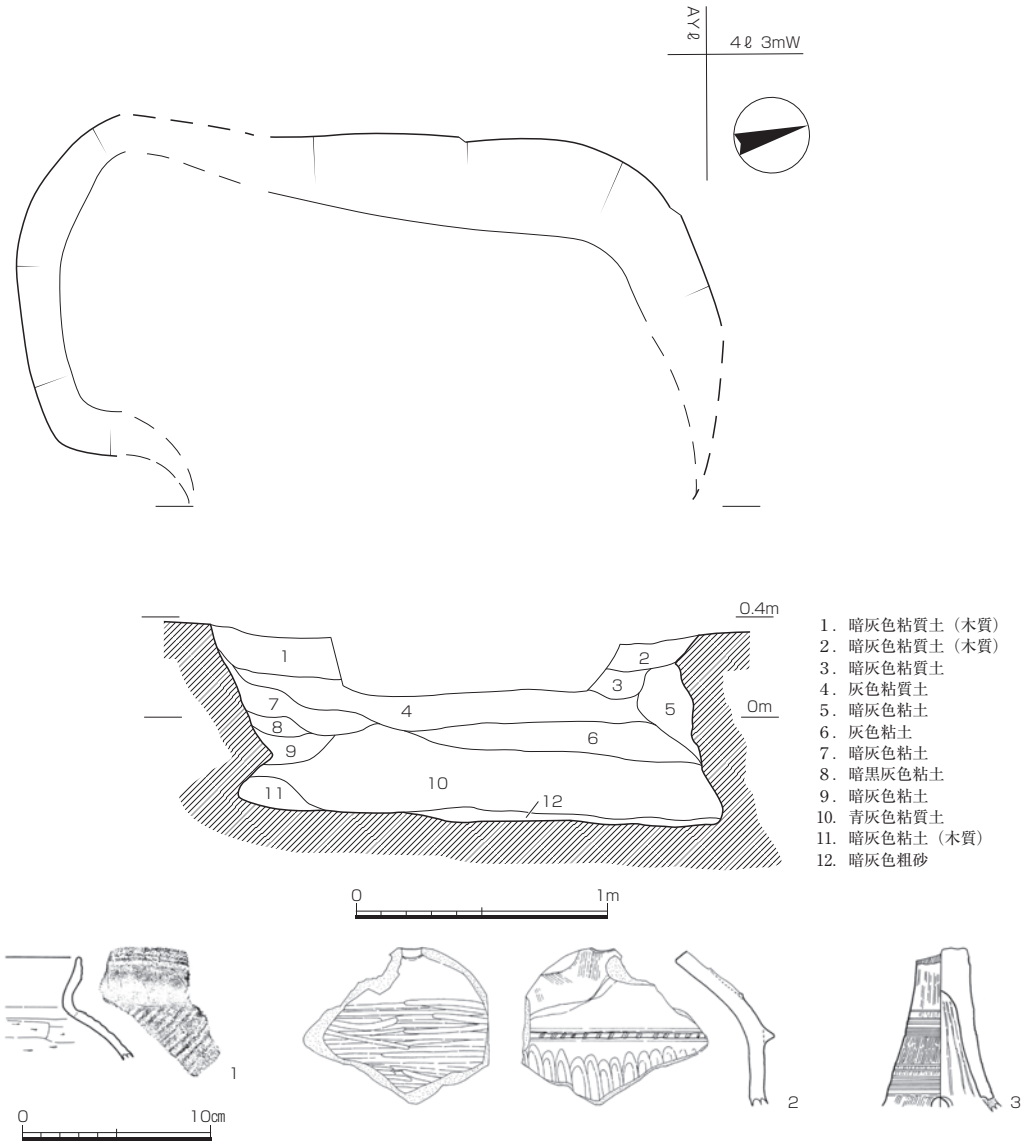
遺物の出土は12号ポリ袋５袋と少ない。甕、壺、高杯の小片が見られる。本遺構の時期は弥生時代後期後半である。

2．土坑

土坑は６基を確認した。北側の低位部で１基（土坑１）、南側の微高地部で５基（土坑２～６）を検出した。後世の遺構が重複しているため、全形が判明するものは少ない。前述の井戸が本調査区の南端に位置することから、本調査区南半から南に向けて微高地が広がり、そこに居住域が展開するものと想定される。土坑１と３は重複しており、低位部にかかる。その他の土坑はいずれも微高地部に位置するもので、土坑２・４・５は破壊の程度が大きく全形が不明であるものの、廃棄土坑といった性格が考えられる。

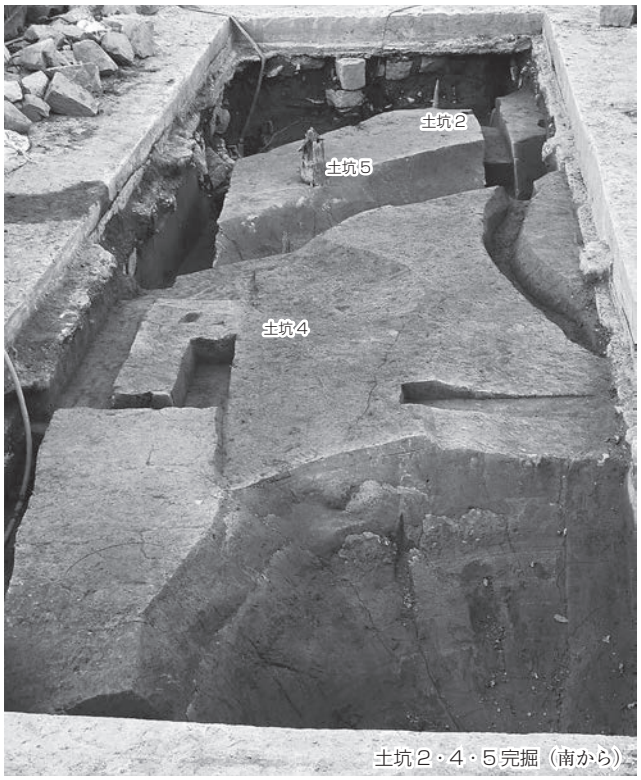
土坑１（図15　図版５ａ）

調査区中央東端、AY04区に位置する。上面では南北2.6m×東西1.6mの隅丸長方形を呈する。検出面の標高0.36



番号	器　種	特　徴	色　調	胎　土
1	弥生土器　甕	内：ナデ・篦ケズリ、外：ナデ・平行タタキ、口縁部：3条の凹線	淡橙	微砂
2	弥生土器　壺	内：ナデ・ミガキ、外：ナデ・ミガキ、刻み目突帯、粘土帯が剥離している可能性(剥離部分はハケ目)、円孔の一部残存1カ所	内：淡黄褐　外：淡橙白	微砂
3	弥生土器　高杯	内：絞り痕、外：縦ハケ目・ミガキ、上側に6条の凹線、下側に7条の凹線、円形透かし孔3カ所残存(推計4カ所)、外面磨滅	内：淡橙褐　外：淡橙白	微砂　白色粒

図15　土坑１・出土遺物（縮尺1/30・1/4）



土坑２・４・５完掘（南から）

m、底面の標高は－0.45mを測り、検出面からの深さ0.8mである。上面南端に土坑７・井戸13が重複する。検出面は＜10層＞中にあたる。

断面形は底面から標高０m付近まですぼまり、そこから上位へ広がるいびつな台形を呈する。上面が削平されているため、本来の形状は不明であるが、底面は平坦で袋状に底部が張り出す形状が想定される。

埋土は12層に分けた。最下層12層は暗灰色粗砂で使用時の堆積と考えられる。１～11層は暗灰色粘土を主体とする。３・５・９層等ブロック状に堆積するものもあり、埋め戻しの単位と考えられる。

遺物は12号ポリ袋10袋が出土した。壺・甕・鉢を含む弥生時代中期～後期の土器片がみられる。図15－１は甕、同－２は刻目突帯を巡らせる装飾ある壺である。

本土坑の時期は弥生時代後期である。

土坑２（図16・17　図版５ｂ）

調査区中央西寄り、AZ04区に位置する。土坑の北側・西側は攪乱および側溝掘削により失われ、全形は不明であるが、残存部分から長径１m程度の楕円形状が想定される。検出面の標高1.17m、底面の標高0.67mで、最深部で深さ0.4mを測る。断面形では緩やかな傾斜面を呈しており、底面も緩斜面をなす。埋土は９層に分けた。１・２層は灰色を基調とする砂質土、３・４層は粘質土、５・６層が砂質土、７層が粘質土と、砂質と粘質土層が互層となって堆積する。このうち４～６層中に土器片および10～15㎝大の礫が多数含まれる。

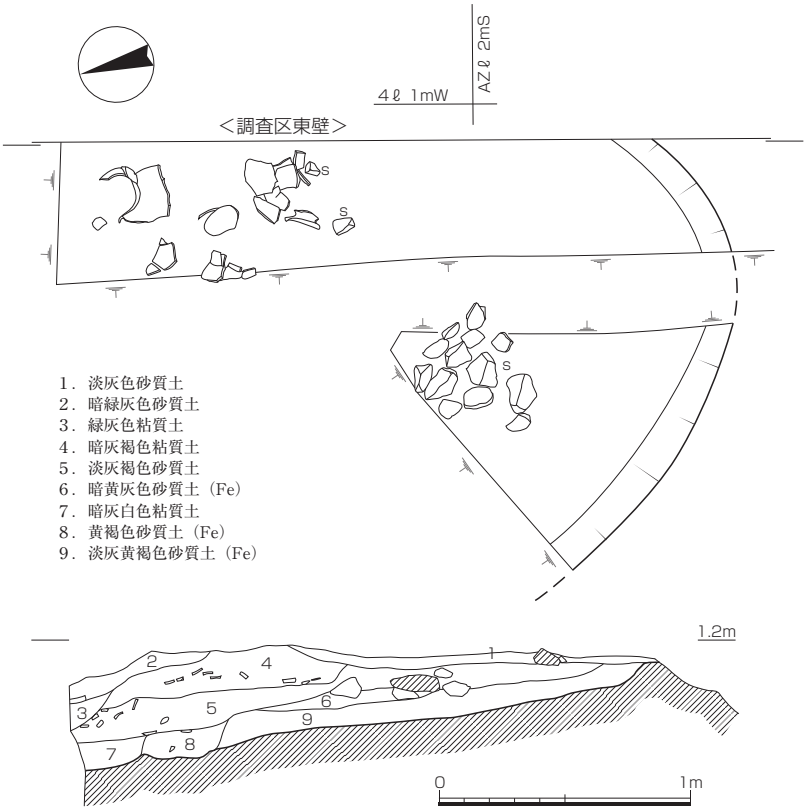
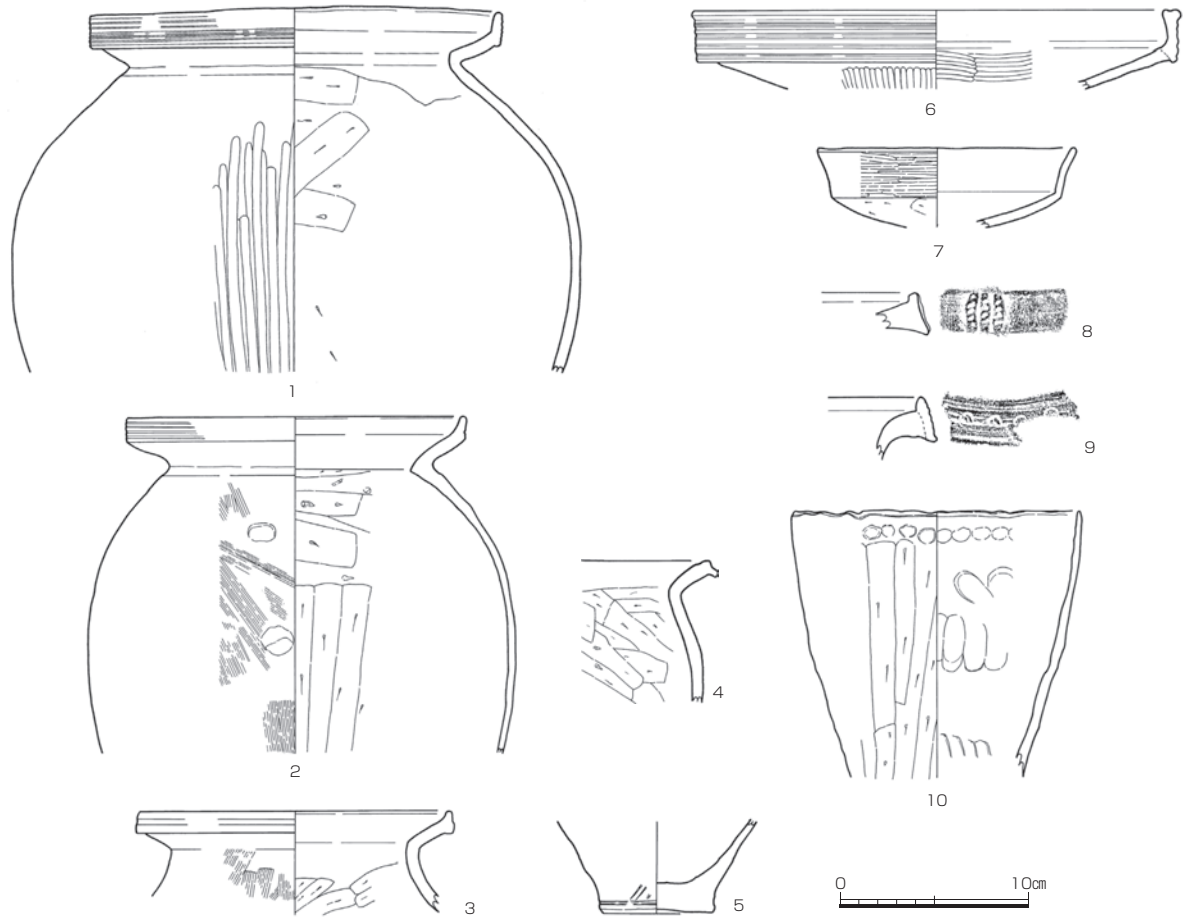


図16　土坑２（縮尺1/30）



番号	器　種	口径：cm	底径：cm	器高：cm	残　存	特　徴	色　調
1	弥生土器　甕	20.5	－	－	1/2	内：ナデ・オサエ・篦ケズリ、外：ナデ・ミガキ、口縁部：7条の沈線、内外面磨滅	淡橙
2	弥生土器　甕	17.7	－	－	1/2	内：ナデ・篦ケズリ、外：ナデ・ハケ目・オサエ、口縁部：4条の沈線、外面磨滅	内：淡黄白・淡橙　外：淡黄白
3	弥生土器　甕	16.4	－	－	1/4	内：ナデ・篦ケズリ、外：ナデ・縦ハケ目、内外面磨滅、口縁部：1条の凹線	淡橙
4	弥生土器　甕	－	－	－		内：ナデ・篦ケズリ、外：ナデ・ハケ目・ミガキ、種子圧痕	内：褐・淡橙褐　外：暗黄褐
5	弥生土器　甕	－	5.8	－	1/1	内：オサエ、外：オサエ・タタキ、内外面磨滅	内：暗橙　外：淡灰褐
6	弥生土器　高杯	24.0	－	－	1/6	内・外：ナデ・ミガキ、口縁部：5条の凹線	内：淡橙白　外：淡橙・淡橙白
7	弥生土器　高杯	13.4	－	－	1/6	外：ミガキ・篦ミガキ、内外面磨滅、黒斑	内：明橙　外：明橙・淡橙
8	弥生土器　器台形土器	－	－	－		内外：ナデ、口縁帯：鋸歯文・棒状浮文3本1単位	内：橙　外：淡橙白
9	弥生土器　器台形土器	－	－	－		内外：ナデ、口縁部：7条の凹線・竹管文	淡橙白
10	弥生土器　製塩土器	－	－	－	1/7	内：オサエ・ナデ、外：オサエ・篦ケズリ	内：灰褐・暗灰褐　外：暗灰褐

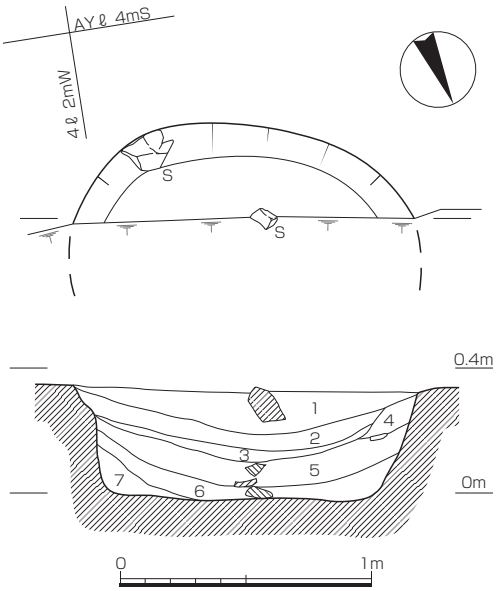
図17　土坑２出土遺物（縮尺1/4）

遺物はコンテナ（28ﾘｯﾄﾙ）１／２箱が出土した。弥生時代中期の土器が僅かに含まれ、大半が弥生時代後期前半～中頃のものである。本遺構を切って上位に位置する近代の池状遺構水路等の埋土には、同時期の土器が大量に含まれており、それらは本来、本遺構に属する可能性が高いと考えられる。図17に10点を図化した。甕・高杯は弥生時代後期前半～後半のものがあり、製塩土器（図17－10）は後期前半のものである。

本遺構の時期は弥生時代後期後半と考えられる。

土坑３（図18　図版５ｃ）

調査区中央西側、AY04区に位置する。土坑１の南端部に重複する。長径1.4mの楕円形状と想定され、北半は

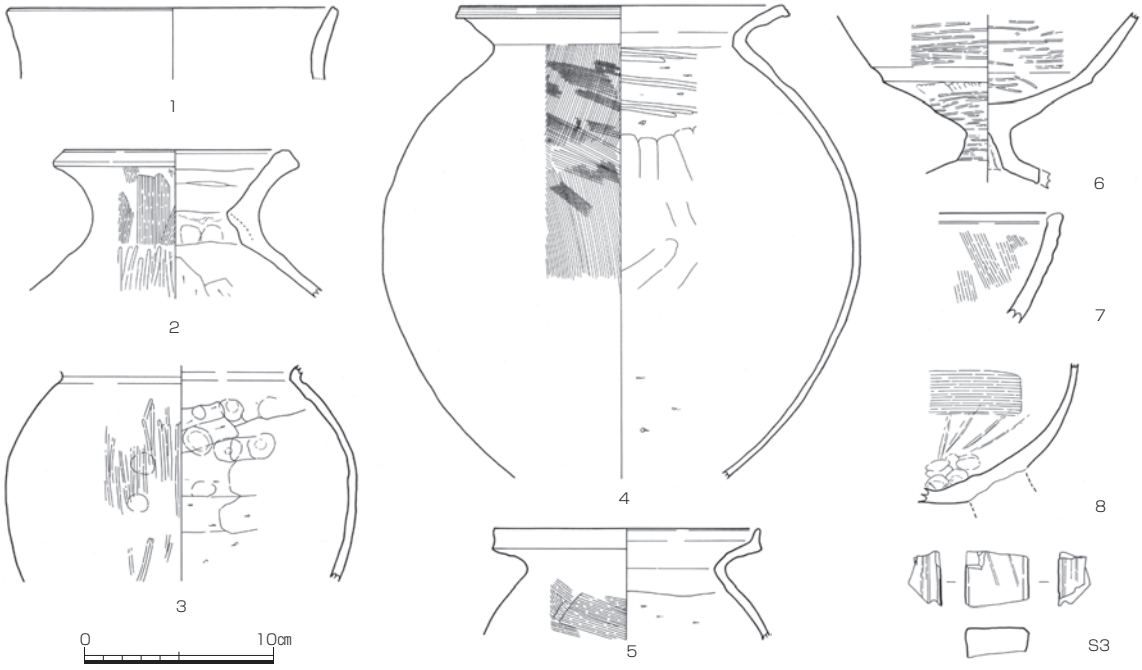


1．暗灰色粘質土（有機質）
2．暗灰色粘質土（有機質）
3．灰色粘土
4．灰色粘土
5．黒灰色粘質土（有機質）
6．黒灰色砂質土
7．暗灰色砂質土

側溝掘削により削平され、南半が確認された。断面形は逆台形を呈し、検出面の標高0.35m、底面の標高０mで、検出面からの深さ0.35mを測る。埋土は７層に分けた。１～５層は暗灰色～灰色を呈する粘質土であり、有機質や粘土ブロックを含み、いずれも埋め戻し土と考えられる。６・７層は砂質を呈する。

遺物はコンテナ（28㌾）１／２箱が出土した。弥生土器壺・甕・高杯・鉢および粘板岩製の砥石１点・モモ１点が含まれる。土器は弥生時代後期のものが主体である。

本遺構の時期は弥生時代後期後半と考えられる。



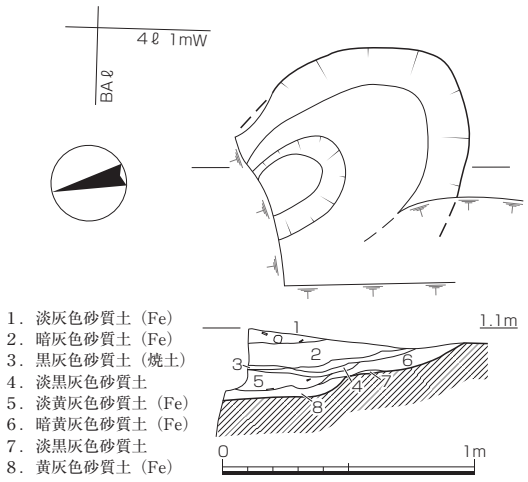
番号	器　種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残　存	特　徴	色　調	胎　土
1	弥生土器　壺	16.9	－	－	1/2	内外：ナデ	内：淡黄白 外：淡橙・淡黄白	細砂　5㎜大の白色礫を含む
2	弥生土器　壺	11.8	－	－	1/3	内：ナデ・オサエ・篦ケズリ、外：ナデ・ハケ目・ミガキ	内：淡橙　外：にぶい黄橙	微砂　白色粒　2・3㎜大の白色礫
3	弥生土器　甕	－	－	－		内：篦ケズリ・オサエ、外：ミガキ・オサエ、煤	内：暗褐　外：明橙・淡黄灰	細砂
4	弥生土器　甕	17.0		－	1/1	内：ナデ・篦ケズリ・ミガキ、外：横ナデ・斜めハケ目(格子状)、煤	黄灰	微砂
5	弥生土器　甕	－	－	－		内：ナデ・篦ケズリ、外：ナデ、ハケ目	淡黄橙	微砂
6	弥生土器　高杯	－	－	－		口内：ミガキ、脚内：絞り痕、外：ミガキ、円形透かし孔1カ所、内外面磨滅	淡橙	微砂
7	弥生土器　鉢	－	－	－		内外：ハケ目・ナデ、5条の凹線	淡黄	微砂　白色粒
8	弥生土器　台付鉢	－	－	－		内：ハケ目・オサエ、外：篦ケズリ、脚(台)部剥離	浅黄	微砂

番号	器種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量（g）	石材	特徴
S3	砥石	3.0	3.3	1.6	24.5	粘板岩	砥面3面

図18　土坑３・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

土坑４（図19・20　図版６）

調査区南東、BA04区に位置する。上面で平面長楕円形の南東半が残る。残存部の長径1.0m、短径0.8mである。検出面の標高1.1m、底面の標高0.8mで検出面からの深さ0.3mを測る。北半部は近代の溝に切られている。断面形は標高0.9m付近で段を有する。埋土は８層に分けた。いずれも砂質土層であり、そのうち黒灰色を呈する３層には焼土を含む。遺物は非常に多く、コンテナ（28㌾）１箱が出土した。弥生土器壺・甕・高杯・鉢があり、甕は完形に近く復元できるものが３個体（図19－５～７）あり、口縁部片の大半は弥生時代後期後半のものである。ミニチュア土器（図20－22・23）、製塩土器（同－24）のほか、突帯文土器深鉢口縁部片１点が含まれる。同－Ｔ１～Ｔ３は粘土紐を緩やか



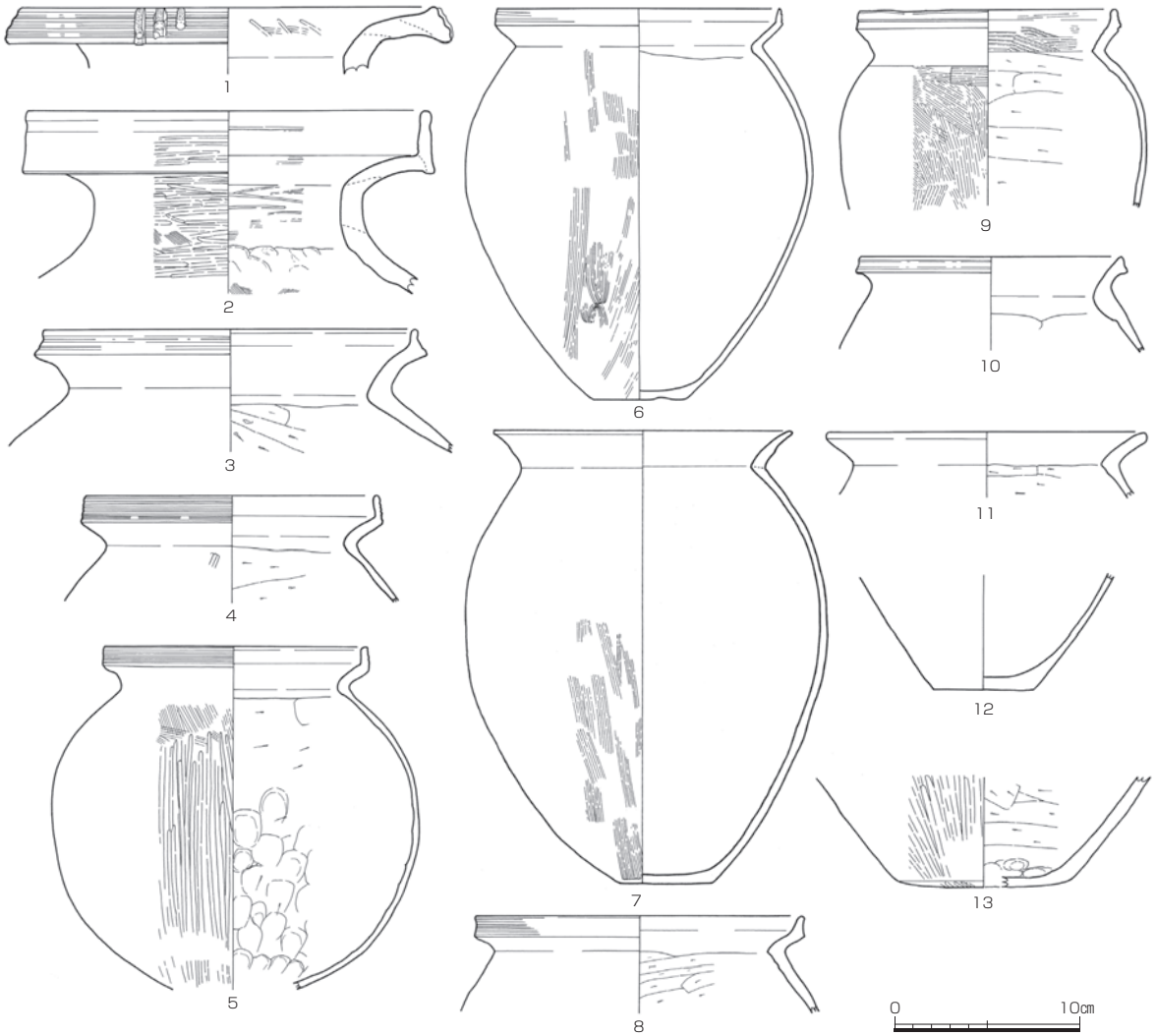
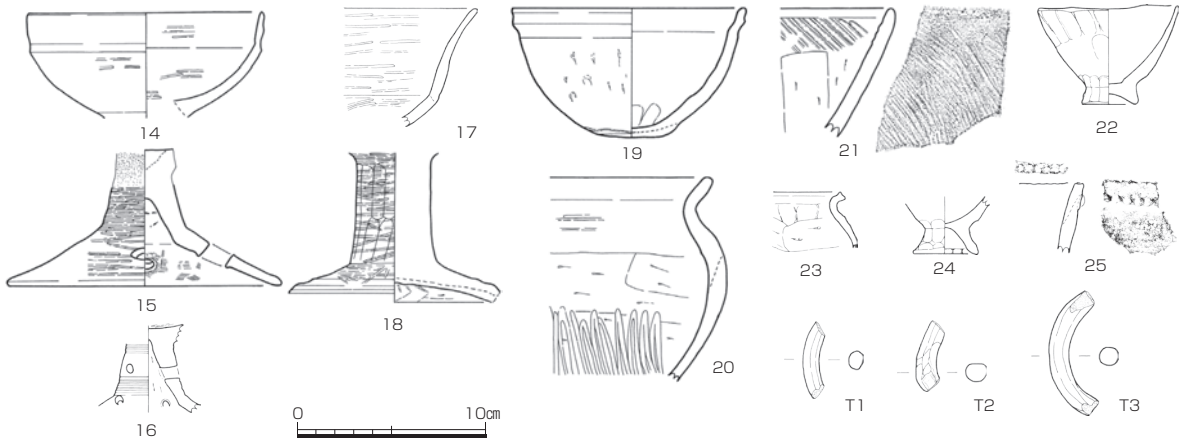


図19　土坑４・出土遺物１（縮尺1/30・1/4）



番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存	特　徴	色　調	胎　土
1	弥生土器　壺	22.4	−	−	1/3	内：ナデ・ミガキ、外：ナデ、口縁帯：3条の凹線・棒状浮文3カ所残存	淡橙	微砂
2	弥生土器　壺	−	−	−		内：ミガキ・ハケ目・オサエ、外：ナデ・ミガキ・ハケ目	内：明橙　外：黄橙	細砂　2〜6㎜大の白色礫
3	弥生土器　甕	20.0	−	−	1/6	内：ナデ・篦ケズリ、外：ナデ、口縁部：2条の凹線残存	淡橙	細砂　2〜4㎜大の礫を含む
4	弥生土器　甕	−	−	−		内：ナデ・篦ケズリ、外：ナデ・ハケ目、口縁部：6条の沈線	淡橙	微砂　白色粒
5	弥生土器　甕	13.9	−	−	3/4	内：ナデ・オサエ・篦ケズリ､外：ハケ目・ミガキ、口縁部：6条の沈線	淡橙	微砂　白色粒
6	弥生土器　甕	15.0	5.2	21	口・胴1/3 底1/1	外底：オサエ、外：ハケ目、口縁部：2条凹線（磨滅）内外面磨滅	明橙	微砂
7	弥生土器　甕	16.0	4.2	24.3	口1/4 底1/3	内：ナデ、外：ナデ・ハケ目、煤、黒斑、内外面磨滅	明橙	微砂
8	弥生土器　甕	17.5	−	−	1/3	内：ナデ・篦ケズリ、外：ナデ、口縁部：5条の沈線、外面磨滅	淡橙	微砂
9	弥生土器　甕	13.8	−	−	1/2	口内：横ナデ・ハケ目、体内：篦ケズリ、口外：4条の沈線、体外：ハケ目	浅黄橙	微砂
10	弥生土器　甕	14.0	−	−	1/3	内：篦ケズリ、内外面磨滅	明橙	細砂　白色粒
11	弥生土器　甕	16.9	−	−	1/4	内：ナデ・篦ケズリ、外：ナデ	淡橙	微砂
12	弥生土器　甕		5.4×5	−	1/1	内外面磨滅、煤付着	内：淡黄橙　外：淡黄橙・淡橙	細砂　2㎜大の礫
13	弥生土器　甕　か　壺	9.6	−	−	1/3	内：ナデ・篦ケズリ、内底：オサエ、外：ミガキ、外底：ミガキ、内外面磨滅	内：淡橙褐　外：淡黄褐	細砂　白色粒
14	弥生土器　高杯	12.2		−	1/3	内外：ミガキ、内外面磨滅、	明橙	微砂　水濾粘土
15	弥生土器　高杯	−	13.2	−	1/2	脚内：ナデ・ハケ目、脚外：ハケ目、円形の透かし孔4カ所、内外面磨滅、煤	内：淡橙　外：明橙	微砂　白色粒
16	弥生土器　高杯	−	−	−		脚内：しぼり、内：ミガキ、外：ナデ、1段目3方向円形透かし、2段目4方向円形透かし	内：淡橙　外：淡橙	細砂　白色粒
17	弥生土器　高杯	−	−	−		内：ミガキ、外：ハケ目	内：明橙　外：橙	微砂　赤色粒
18	弥生土器　高杯	−	−	−		脚内：篦ケズリ、脚外：ナデ・ミガキ・面取り、黒斑	内：灰白　外：淡黄橙	細砂　白色粒
19	弥生土器　鉢	12.2	−	6.9	1/4	内：ナデ・オサエ、外：ナデ、内外面磨滅	内：黒褐　外：淡黄橙	微砂　白色礫白色粒
20	弥生土器　鉢	−	−	−		口内：ナデ、内：篦ケズリ・ミガキ、黒斑、外面磨滅	内：淡橙　外：淡黄灰	細砂　白色粒
21	弥生土器　鉢	−	−	−		内：ナデ・ハケ目・篦ケズリ、外：ナデ・ハケ目	内：橙白　外：橙褐	細砂
22	弥生土器　ミニチュア土器	7.2	2.9×2.7	5.2	口3/4底1/1	内：ナデ、外：ナデ・オサエ、外底オサエ、黒斑、内外面磨滅	明橙	微砂　白色粒
23	弥生土器　ミニチュア土器	−	−	−		内：ナデ・オサエ・篦ケズリ、外：ナデ・オサエ	浅黄橙	細砂　白色粒
24	弥生土器　製塩土器	−	3.3×3.8	−	1/2	外：オサエ、外底：ナデ・オサエ、内外面磨滅	内：橙　外：明橙	微砂
25	突帯文土器　深鉢	−	−	−		波状口縁、刻み目突帯文、口縁：上部に刺突文	淡橙	細砂　白色粒

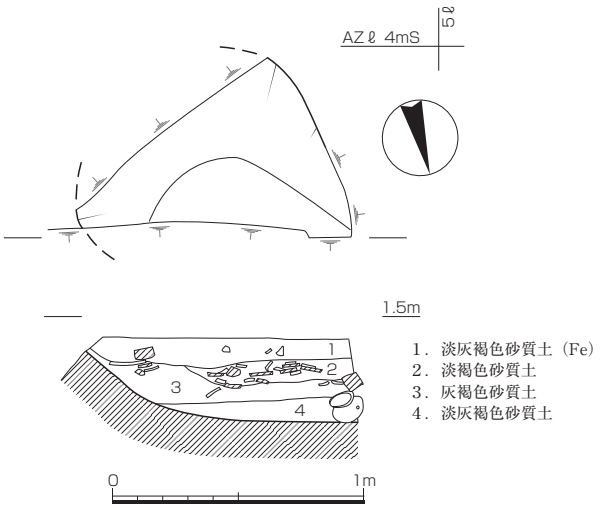
番号	器　種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	特　徴	色　調	胎　土
T1	弥生土器　把手か？	4.0	0.9	0.9	ナデ	明橙	微砂
T2	弥生土器　把手か？	3.7	1.1	1.0	ナデ	明橙	微砂
T3	弥生土器　把手か？	6.5	1.1	0.9	ナデ	明橙	微砂

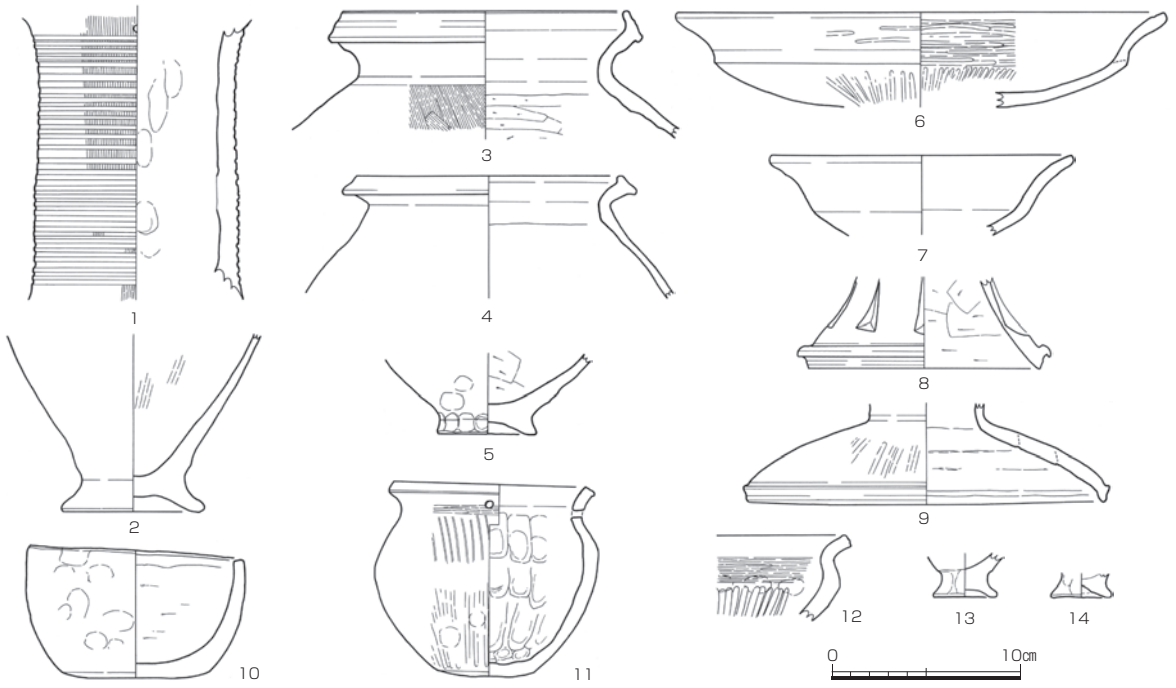
図20　土坑４出土遺物２（縮尺1/4）

にカーブさせ表面調整し、焼成したものであり、３点同一個体の可能性がある。細い把手状あるいは何らかの形象土製品と考えられるが全形が不明である。そのほかに古墳時代初頭の土器片が少数確認された。本遺構の時期は弥生時代後期後半～古墳時代初頭である。

土坑５（図21　図版７）

調査区南東、BA04区に位置する。本遺構は南端と北側を後世の溝によって削平されて一部が残るのみで全形は不明である。検出面の上面では長径1.0m、短径0.6mの不整形をなし、底面は平坦な傾





番号	器　種	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	残　存	特　徴	色　調	胎　土
1	弥生土器　壺	－	－	－		内：ナデ・オサエ、外：ハケ目・凹線、上部に竹管文	淡橙	微砂　白色粒
2	弥生土器　台付壺	7.1	－	－	1/3	内：ミガキ、内外面磨滅	明橙	
3	弥生土器　甕	14.9	－	－	3/4	内：ナデ・篦ケズリ、外：ナデ・ハケメ	橙	細砂
4	弥生土器　甕	14.0	－	－	1/3	内：篦ケズリ、内外面磨滅	橙	微砂　白色粒
5	弥生土器　甕	－	5.8	－	1/2	内：篦ケズリ、外：オサエ、外面磨滅	内：明橙、外：明橙・褐	微砂
6	弥生土器　高杯	26.0	－	－	1/6	内外：ナデ・ミガキ、黒斑	内：淡橙　外：淡橙・橙	微砂
7	弥生土器　高杯	15.4	－	－	1/3	内外面磨滅、黒斑	内：橙　外：淡橙・橙	微砂
8	弥生土器　高杯	12.2	－	－	1/6	内：篦ケズリ、外：ナデ、三角形の透かし孔（未貫通・3カ所残存）、外面磨滅	浅黄橙	微砂　白色粒　黒色粒
9	弥生土器　直口壺？	－	－	－	1/3	内：ナデ、外：ミガキ、黒斑、直口壺と考えると縁は接合部にあたる	橙	微砂　白色粒
10	弥生土器　鉢	11.2	7.7	7.0	1/3	内：オサエ・ナデかケズリ、外：オサエ・ナデ、外面磨滅	橙	細砂
11	弥生土器　鉢	10.0	5.0	10.3	口3/4 底1/1	内：ナデ・オサエ、外：ナデ・ミガキ、外面に筋状の痕跡、内外面磨滅、頸部に1対の円孔	橙	微砂　白色粒
12	弥生土器　鉢	－	－	－		内：ナデ・オサエ、ミガキ（太・細）、外：ナデ・篦ケズリ	橙	微砂
13	弥生土器　製塩土器	－	－	－	1/1	外：オサエ、磨滅	内：黄白　外：橙	微砂　6mm大の赤色粒
14	弥生土器　製塩土器	－	3.1	－	1/2	内外：オサエ	内：橙　外：淡橙	細砂　白色粒

図21　土坑５・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

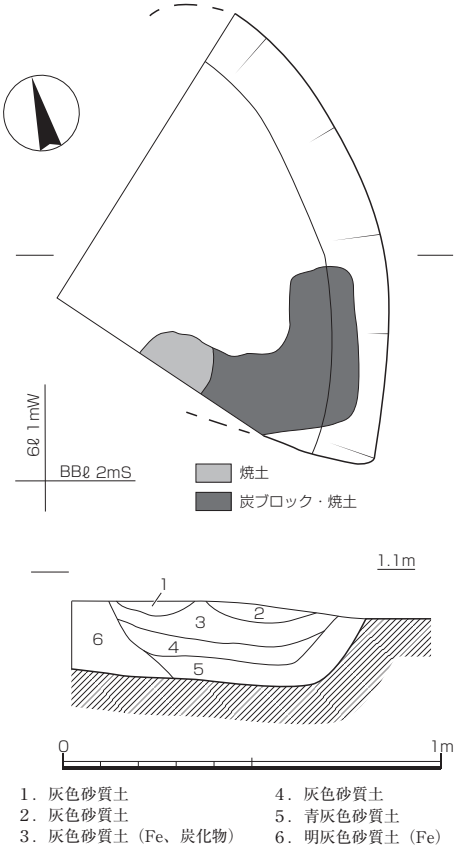


図22　土坑６（縮尺1/20）

向がみられる。検出面の標高1.4m、底面の標高1.1mで、検出面からの深さ0.3mである。埋土は４層に分けた。いずれも砂質であり、遺物を多量に含む。

遺物はコンテナ（28㍑）１箱が出土した。弥生時代中期末～後期中頃の土器が主体で、壺・甕・高杯・鉢、製塩土器が認められる。中心となるのは後期前半～中頃とみられる。本土坑の時期は弥生時代後期中頃と考えられる。

土坑６（図22　図版８）

調査区南部、BB06区に位置する。前半調査区の５区南西角で確認され、南・西側はコンクリート基礎下にあたり確認できなかった。検出面の上面で1.3m×1.3mの不整形をなし、本来は円形あるいは楕円形状の遺構の北東１／４部分とみられる。検出面の標高1.0m、底面の標高0.7m、検出面からの深さ0.3mを測る。埋土は６層に分けた。

検出時には５㎜～１㎝大の焼土ブロック、３㎜大の炭化物粒を含む0.1×0.3mの範囲を囲むように、焼土や炭化物が散布していた。堆積状況を確認したところ、上面の焼土・炭化物は浮いた状態であったため除去し、底面では0.1×0.1mの焼土塊とその周囲で炭化物・焼土ブロックの散布が確認された。確認された範囲の底面に被熱痕跡はなく、焼土塊・炭化物・焼土は別地点から遺棄されたものと考えられる。

出土遺物はみられなかった。本遺構の時期については、検出面から弥生時代後期と考えられる。

３．溝

溝１～３（図７・23・24　図版９ａ）

調査区中央、AZライン付近を東西に走行する３条の溝を検出した。溝１～３は北側の低位部と南側の微高地部との境界を走行するものである。検出面はいずれも＜12層＞にあたり、検出面の標高は0.6m、底面の標高は溝１西端で0.54m、東端で0.39m、溝２西端で0.45m、東端で0.23m、溝３の西端で0.48m、東端で0.3mを測る。溝は

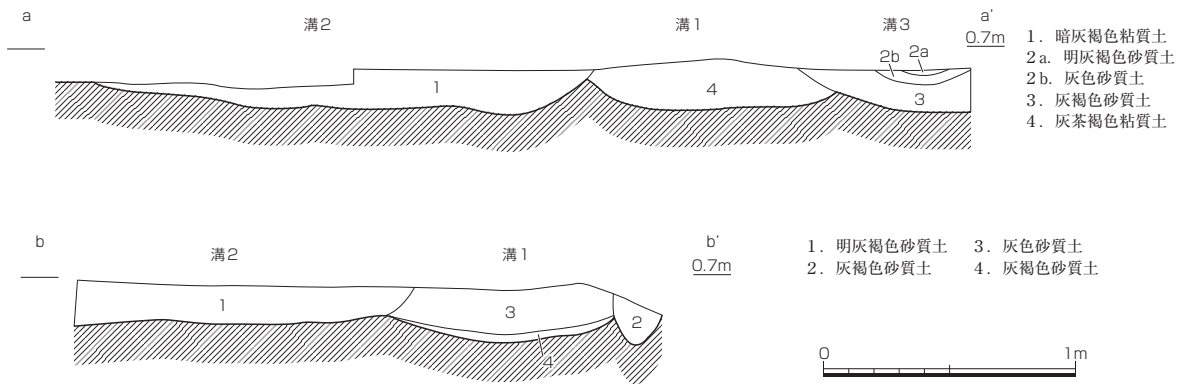
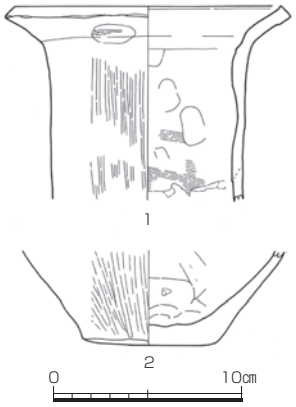


図23　溝１～３断面（縮尺1/30）

重複して走行しており、溝１は６ライン西３ｍ地点から調査区東壁までの長さ12ｍを確認し、溝１を切って走行する溝２・３は５ライン西２ｍ地点から調査区東壁までの間で長さ７ｍほどを確認した。溝１は幅0.6～1.0m、深さ0.15m、溝２は幅0.6m、深さ0.3m、溝３は幅0.7～0.9m、深さ0.3mを測る。溝はいずれも西から東へ傾斜を有しており、西側にいくほど上面の削平の程度は著しいと考えられる。

断面形はいずれも浅いＵ字形を呈しており、埋土は灰褐色を基調とした砂質土である。溝１～３の遺物は一括して取り上げ、出土量は少なく、12号ポリ袋１袋であった。弥生時代後期前半の壺・甕・高杯が含まれ、うち壺２点を図化した（図23）。

溝１～３は相次いで同位置を走行したもので、弥生時代後期と考えられる。



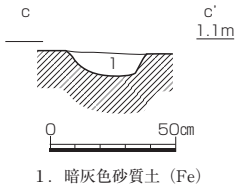
番号	器　種	口径：cm	底径：cm	器高：cm	残　存	特　徴	色　調	胎　土
1	壺	14.0	－	－	1/3	内：ナデ・オサエ・ハケ目、外：ナデ・オサエ・ミガキ、内外面磨滅	浅黄橙	微砂　白色粒
2	壺	－	7.2	－	1/1	内：オサエ・篦ケズリ、外：ミガキ、外底：磨滅	内：黒灰　外：灰黄	微砂　白色粒

図24　溝１～３出土遺物（縮尺1/4）

溝４（図25　図版９ｂ）

調査区南東、BA04区に位置する。４ライン西１ｍ付近を南北に走行する溝である。検出面は＜12層＞上面で、標高は1.05ｍを測る。本溝の北側は近代の遺構により削平され、BAライン以北の状況は不明である。南端は緩くカーブしてBBライン北２ｍ付近で調査区東壁へ抜ける。検出できた溝の長さは４ｍ、幅は0.5ｍを測る。底面の標高は北端で0.88m、南端で0.95ｍであり、南から北へ流れる。埋土は暗灰色砂質土の１層である。

出土遺物はわずかで12号ポリ袋１／３袋であった。弥生時代後期土器の小片が含まれる。本溝の時期は弥生時代後期と考えられる。

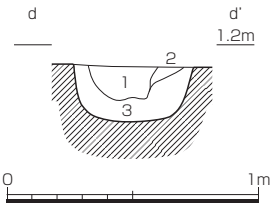


1．暗灰色砂質土（Fe）

図25　溝４断面（縮尺1/30）

溝５（図26　図版９ｃ・ｄ）

調査区南東BB04区に位置する。BBライン南にあたる東西方向の溝である。検出面の標高1.1m、底面の標高0.9ｍを測る。東西両側との後世の遺構により削平され、長さ1.5m、幅0.8m、深さ0.2ｍを検出した。検出部分はわずかであるが、形状、埋土から溝と判断した。出土遺物は見られなかったが、検出面から、本溝の時期は弥生時代後期と考えられる。



1．混灰色淡褐色土（炭）
2．混灰色褐色土（炭）
3．混橙色褐色粘質土

図26　溝５断面（縮尺1/30）

４．土器集中

本調査地点では＜12層＞上面で土器が集中的に散布するまとまりを確認した。調査区の中央部に東西に点在する形で３カ所のまとまりを検出し、これらを「土器集中」として以下に報告する。

土器集中１（図26・27　図版10）

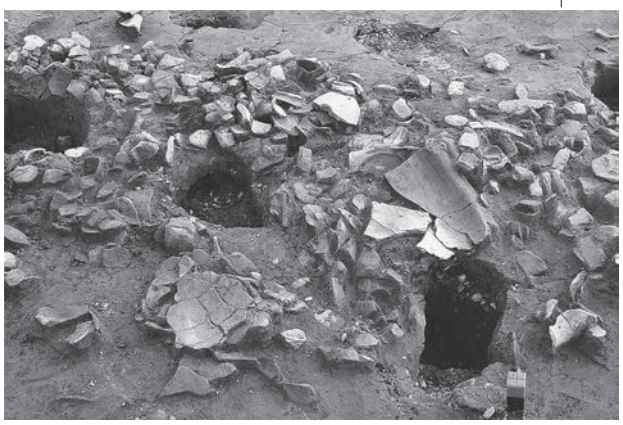
AY04～05区に位置する。東西９ｍ、南北２ｍの範囲からコンテナ（28ﾘｯﾄﾙ）10箱の遺物・礫が出土した。本調査地点で確認した３カ所の中で最も規模が大きい。前述の溝１～３の上方に重複しており、これらの溝が埋まりやや窪みになったところへ土器・礫を多量に含む灰褐色を主体とする砂質土が堆積した状況である。検出面の標高は西端で0.65m、東端で0.55ｍを測り、東へ傾斜する。これは地形の傾斜、および溝１～３の傾斜に沿っており５ラインの１ｍ西の地点から西へは遺物の密度が減少し、５ライン３ｍ西地点以西には認められない。以西では

上面が削平されたものと考えられる。遺物を多量に含む土層は明灰褐色～暗灰褐色砂質土であり、西方では１層、東端では２～３層に分層できる。これらは＜12層＞と類似する特徴を有する。

遺物の出土状況では、完形に復元できるものはなく、小破片が主体で、図28－９の鉢の破片が最も大きいものであった。上面の削平を考慮しても、本来、完形のものが集積して廃棄された状況とは考えにくく、周囲から、特に西方から流れ込んだ状況が窺える。

土器は弥生時代後期前半のものが大半を占め、少数の中期の土器も含まれる。壺・甕・鉢・

①北から



②北から

全景　北東から

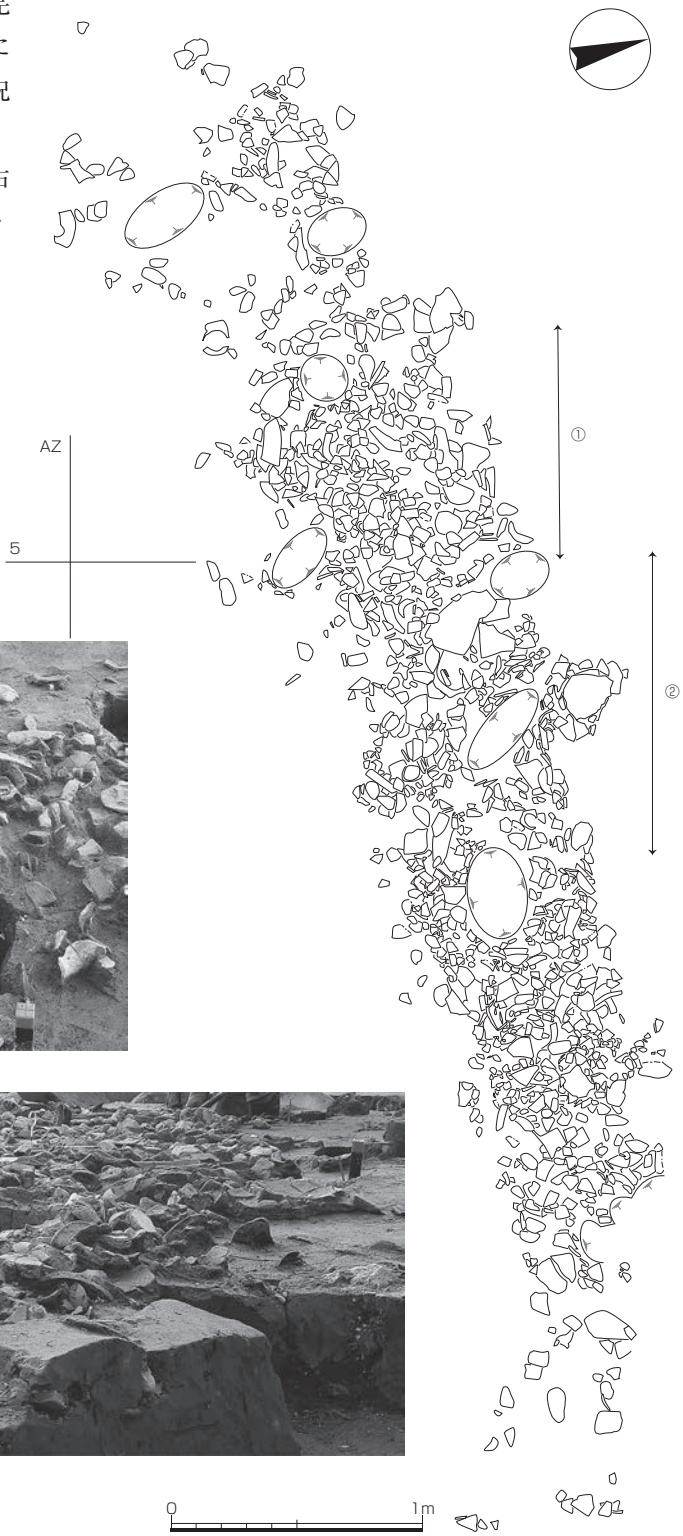
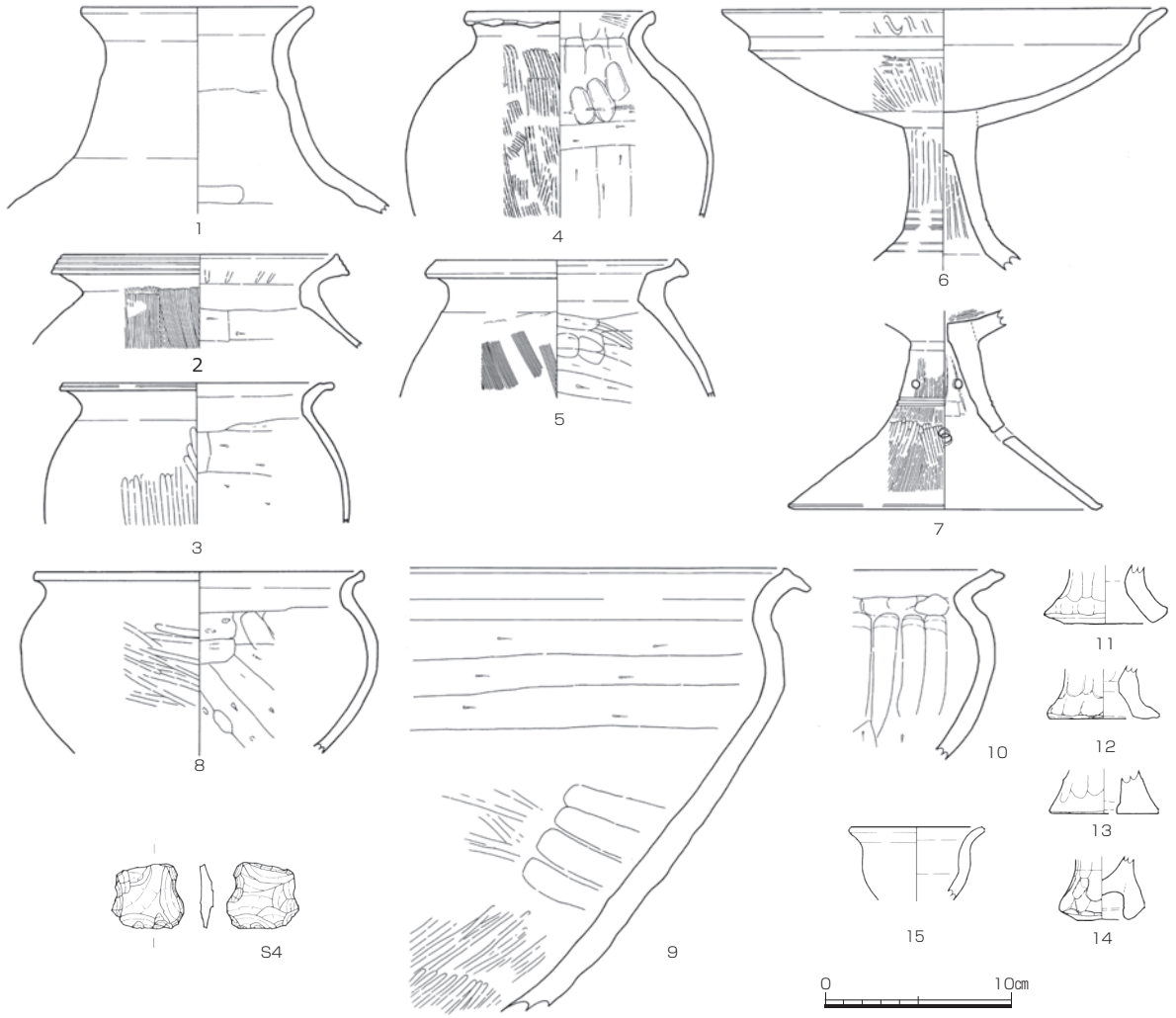


図27　土器集中１出土状況（縮尺1/30）



番号	器　種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	特　徴	色　調	胎　土
1	弥生土器　壺	12.2	－	－	1/6	内：篦ケズリ、外：ナデ、内外面磨滅	橙	微砂　赤色粒
2	弥生土器　甕	15×14.5	－	－	1/1	内：ナデ・篦ケズリ・工具痕、外：ナデ・ハケ目、口縁部3条の沈線	淡橙	微砂
3	弥生土器　甕	14.3	－	－	1/6	内：ナデ・篦ケズリ、外：ナデ・ミガキ、煤、内外面磨滅	内：淡橙　外：淡橙	微砂　白色粒
4	弥生土器　甕	12.8	－	－	1/2	内：ナデ・オサエ・篦ケズリ・工具ナデ？、外：ナデ・ハケ目、煤、内外面磨滅	内：暗灰～灰黄 外：灰黄	微砂
5	弥生土器　甕	8.9	－	－	1/2	内：ナデ・オサエ・ハケ目・篦ケズリ、外：ナデ・オサエ・ハケ目、外面磨滅	鈍い黄橙	細砂　2㎜大の礫
6	弥生土器　高杯	23.6	－	－	1/4	脚内：絞り痕､杯外：ナデ・ハケ目・ミガキ､脚外：ミガキ、脚部に5条の沈線、内外面磨滅		
7	弥生土器　高杯	16.1	－	－	1/4	杯内：ミガキ､脚内：オサエ・工具による切れ込み､脚外：ハケ目・ミガキ､脚部中央に2条の沈線、上下段円形透かし孔(各4カ所残存)、内外面磨滅	橙	微砂　白色粒 赤色粒
8	弥生土器　鉢	14.4	－	－	1/3	内：ナデ・オサエ・篦ケズリ、外：ナデミガキ、煤	内：灰白　外：鈍い黄橙	細砂
9	弥生土器　鉢	－	－	－		内：ナデ・オサエ・篦ケズリ、外：ナデ・ハケ目、口縁部1条の沈線、黒斑	灰白	細砂　白色粒
10	弥生土器　鉢	－	－	－		内：篦ケズリ、一部ミガキ、全体に磨滅、外：一部ミガキ残るがほぼ磨滅	内：淡橙　外：淡橙	細砂　赤色粒
11	弥生土器　製塩土器	－	5.7	－	1/1	内：ナデ、外：ナデ・オサエ、被熱	内：黒褐　外：暗赤褐	細砂　白色粒
12	弥生土器　製塩土器	－	5.5	－	3/4	内：ナデ・オサエ、外：オサエ、被熱	内：灰褐	細砂　白色粒
13	弥生土器　製塩土器	－	5.1	－	1/3	内：ナデ・オサエ、外：オサエ、被熱	内：暗褐　外：灰白	細砂　2㎜大の礫
14	弥生土器　製塩土器	－	4.3×4.1	－	1/1	杯内：ナデ、脚内・外：オサエ、被熱	黒褐	細砂　2・3㎜大の礫
15	弥生土器　ミニチュア土器	6.5	－	－	1/4	内：ナデ、外：ナデ・磨滅	淡橙	微砂　白色粒

番号	器種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量（g）	石材	特徴
S4	石包丁？	3.3	3.6	0.5	7.2	サヌカイト	縁辺部を細かく剥離

図28　土器集中１出土遺物（縮尺1/4）

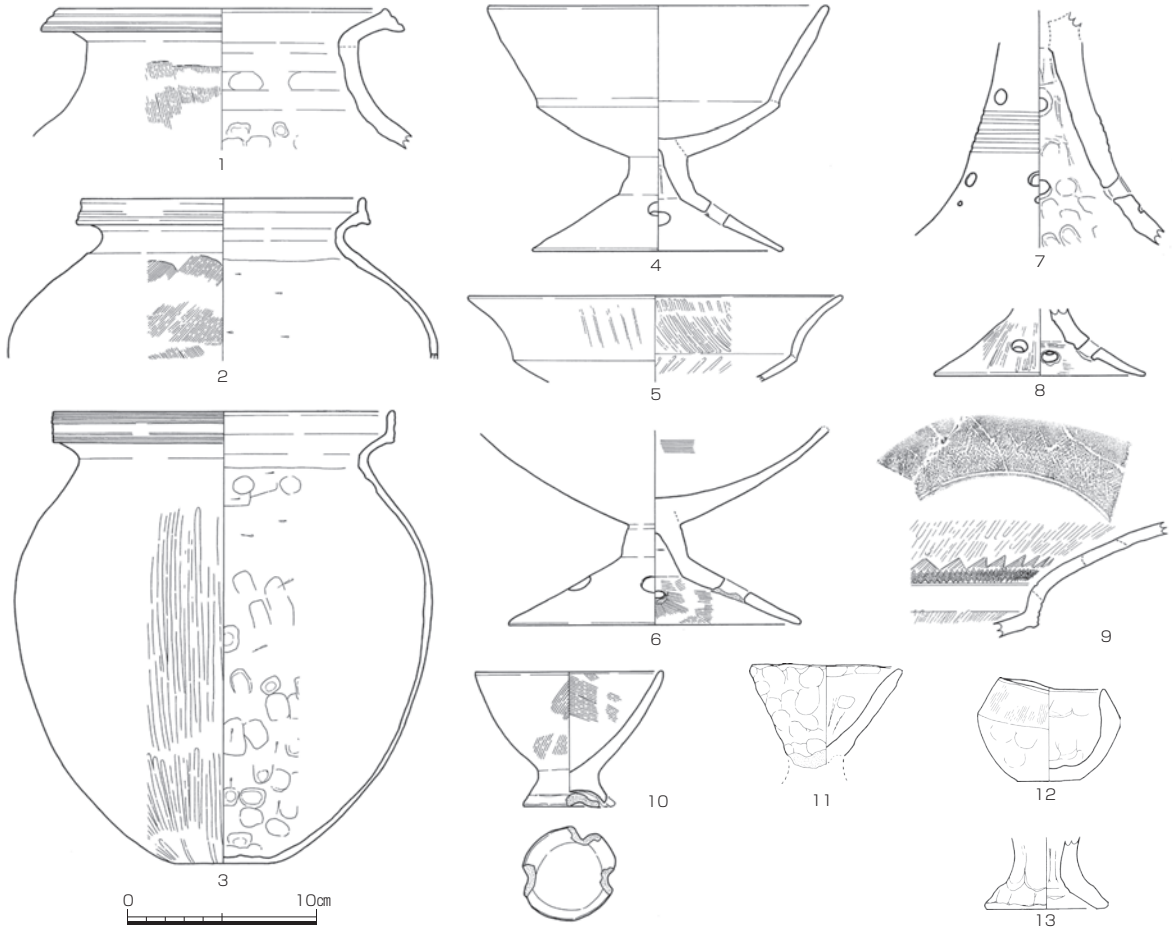
高杯のほか、ミニチュア土器鉢、製塩土器が出土している。土器以外には石器１点と、礫10点余、およびモモ２点が含まれる。礫には被熱痕は認められない。

本遺構の時期は弥生時代後期前半～中頃と考えられる。

土器集中２（図28）

AZ05区に位置する。東西４ｍ、南北1.5ｍの範囲から

土器集中２（北から）



番号	器　種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残　存	特　徴	色　調	胎　土
1	弥生土器　壺	17.2	－	－	口1/4	内：ナデ・オサエ、外：ハケ目、口縁部：3条の沈線	淡橙	細砂　２～4㎜大の白色礫
2	弥生土器　甕	14.9	－	－	1/3	内：ナデ・篦ケズリ、外：ナデ・ハケ目、口縁部：2条の凹線	橙	微砂
3	弥生土器　甕	－	4.85	23.9	1/2	内：ナデ・オサエ、外：ナデ・ミガキ、口縁部：7条の沈線	内：淡橙・灰褐 外：淡黄褐	微砂　白色粒
4	弥生土器　高杯	17.8	13.1	13.0	口1/3 底(－)	内外：磨滅、脚内：絞り痕、円形透かし孔(ほぼ完形2カ所、欠損1カ所・対角に2対)	淡橙	微砂
5	弥生土器　高杯	－	19.9	－	1/3	内外：ミガキ、内外面磨滅	内：橙 外：橙・浅黄橙	水濾粘土　微砂
6	弥生土器　高杯	－	15.3	－	1/3	杯内：ハケ目、脚内：ナデ・ハケ目、外面磨滅、円孔4カ所	橙	微砂　白色粒
7	弥生土器　高杯	－	－	－		脚内：オサエ・絞り痕、脚部中央に5条の凹線、円形透かし孔：上段3カ所残存、1カ所は未貫通、中段4カ所残存、下段4㎜大	内：灰白 外：淡橙	微砂　２～4㎜大の白色礫
8	弥生土器　高杯	－	11.0	－	1/1	内：ハケ目、外：ミガキ、円形透かし孔(4カ所)	淡橙・橙	水濾粘土　微砂
9	弥生土器　高杯？	－	－	－		内：ナデ・ミガキ・鋸歯文・波状文、外：ミガキ・4条の沈線、外面磨滅	淡橙	細砂　白色粒
10	弥生土器　台付鉢	9.8	5.8	7.1	口1/6 底1/1	内：ハケ目、底内：ナデ・オサエ、外：ハケ目・ナデ、脚端部3カ所の打ち欠き	淡橙	微砂　白色粒
11	弥生土器　脚付鉢	7.4	－	－	1/3	内・外：ナデ・オサエ	橙	微砂　白色粒
12	弥生土器　手づくね土器	5.2	3.1×4.1	5.0	口1/2 底1/1	内：オサエ、外：オサエ・ハケ目、黒斑、外面磨滅	内：淡橙 外：浅黄橙	微砂　赤色粒 白色粒
13	弥生土器　製塩土器	5.8	－	－	底1/4	内：ナデ・絞り痕、外：オサエ・ナデ	内：暗灰 外：灰白・黒灰	微砂
14	弥生土器　高杯	－	－	－		杯外：オサエ、脚内：絞り痕、脚外：ハケ目・ミガキ、脚部中央に8条の沈線、沈線下に円形透かし孔(上段2カ所・下段2カ所残存)、内外面磨滅	内：淡橙 外：明橙	微砂　２～4㎜大の礫

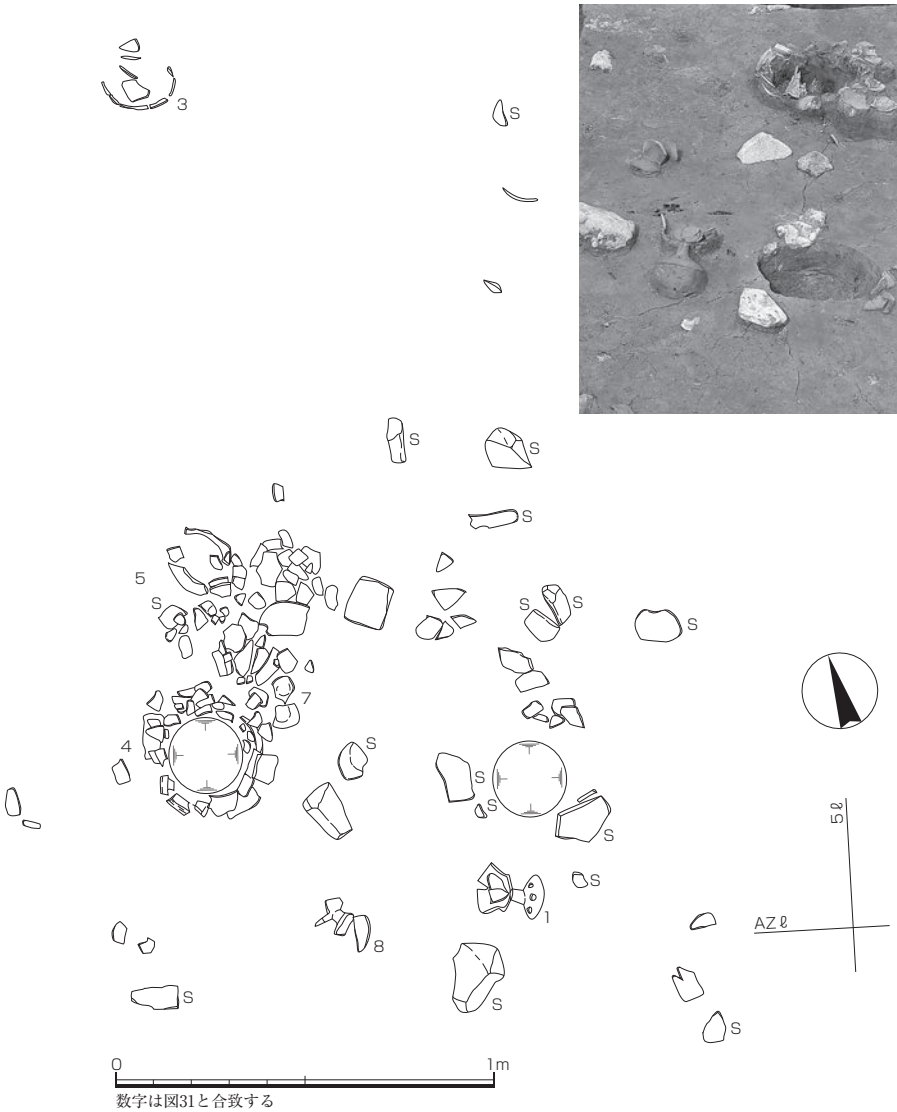
図29　土器集中２出土遺物（縮尺1/4）

コンテナ（28ﾘｯﾄﾙ）３箱の遺物が出土した。検出面の標高1.05m、底面の標高は0.7mを測る。土器集中１と同様に、溝１～３が埋まった後の窪み状の部分に土器を多量に含む明灰色砂質土が堆積した状況である。土器集中２は前期調査で検出し、土器集中１は後期調査で検出したもので双方の位置・レベルは異なる。しかし下位に位置する溝１～３、および本地点の地形が西から東へ傾斜していること、さらに南から北への傾斜を考慮すると、土器集中１と２が本来同一遺構である可能性は高いものと考えられる。

遺物は完形に近く復元できるものが３点と少なく、土器集中１に比しても散漫である。壺・甕・高杯・台付鉢のほか、ミニチュア土器鉢、製塩土器も見られる。弥生時代後期が主体である。

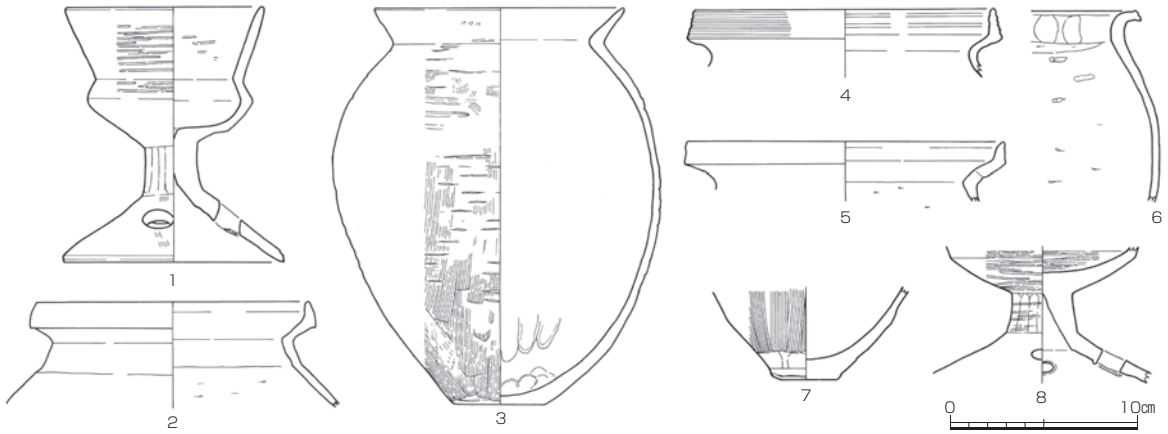
土器集中３（図30・31）

AY07区に位置する。1.5×1.5mの範囲にコンテナ（28ﾘｯﾄﾙ）１／２箱の土器がまとまって出土した。標高0.76～0.84mで検出した。土器集中３の検出面は平坦であり、窪みなどは認められない。遺物には多数の土器片と礫15点余が含まれ、土器は図示しているように完形あるいは大形の破片がその場で潰れている。出土状況は土器集中１・２と比べ少量かつ散漫である。土器集中３は土器集中２と同じく前期調査で検出したもので、本遺構の下位



出土状況（北から）

図30　土器集中３出土状況（縮尺1/20）



番号	器　種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残　存	特　徴	色　調	胎　土
1	弥生土器　脚付壺	10.3	11.7	13.5	口・底1/2	壺内外：ミガキ、脚外：面取り、脚裾：ハケ目、円形透かし孔(4カ所)、内外面磨滅	明橙	微砂
2	弥生土器　甕	14.5	－	－	1/3	内：ナデ・篦ケズリ、外：ナデ、煤、内外面磨滅	淡橙	微砂　白色粒　2～3㎜大の白色礫
3	弥生土器　甕	13.1	4.7	21.1	口1/2底1/1	内：ナデ・オサエ、外：ハケ目・平行タタキ、外底：ハケ目、内外面磨滅	橙	微砂　赤色粒
4	弥生土器　甕	15.9	－	－	1/2	内外：ナデ、口縁部内2条の凹線、口縁部：6条の沈線、煤、内外面磨滅	にぶい黄褐	微砂
5	弥生土器　甕	16.8	－	－		内：篦ケズリ、煤、内外面磨滅	淡橙	微砂　白色粒　2㎜大の礫
6	弥生土器　甕	－	－	－		内：ナデ・オサエ・篦ケズリ、内外面磨滅	浅黄橙	微砂　2～3㎜大の礫
7	弥生土器　甕	－	3.4×3.6	－	1/1	外：オサエ・ハケ目、内外面磨滅	明橙	微砂
8	弥生土器　高杯	－	－	－		杯内外：ミガキ、脚内：ナデ、脚外：ミガキ・面取り、円形透かし孔(3カ所残存)	内：淡橙　外：明橙	微砂

図31　土器集中３出土遺物

で溝１～３にあたるものは確認されていないため、溝との関係は不明である。位置的には、土器集中１の延長上にあたり、同一遺構の可能性も残す。

遺物は前述したように、完形の脚付壺（図31－１）、甕（同－３）のほか、甕・高杯、またモモ１点がみられる。弥生時代後期後半を主体とする。

第３節　中世・近世の遺構・遺物

中世に属する遺構は井戸３基である。近世に属する遺構は井戸８基・土坑４基・溝１条である。いずれの遺構も、近代以降の破壊を免れた箇所で確認されたものである。このほかに調査区中央で数基のピットを確認している。遺物の出土はなく、井戸との位置関係を考慮すると、ピットの時期は近世である可能性が高いものと考える。

中世の遺構は、調査区北東部に井戸１基、南端に井戸２基がある。詳細は後述するが、南端の井戸が古く中世前半、北東の１基は中世後半のものである。

一方、近世の遺構は、調査区全域に認められる。中世前半までの居住域は本地点より南にあり、中世後半から近世に、本地点が居住域として利用されたことが窺える。

以下中世・近世に分けて、概要を記す。

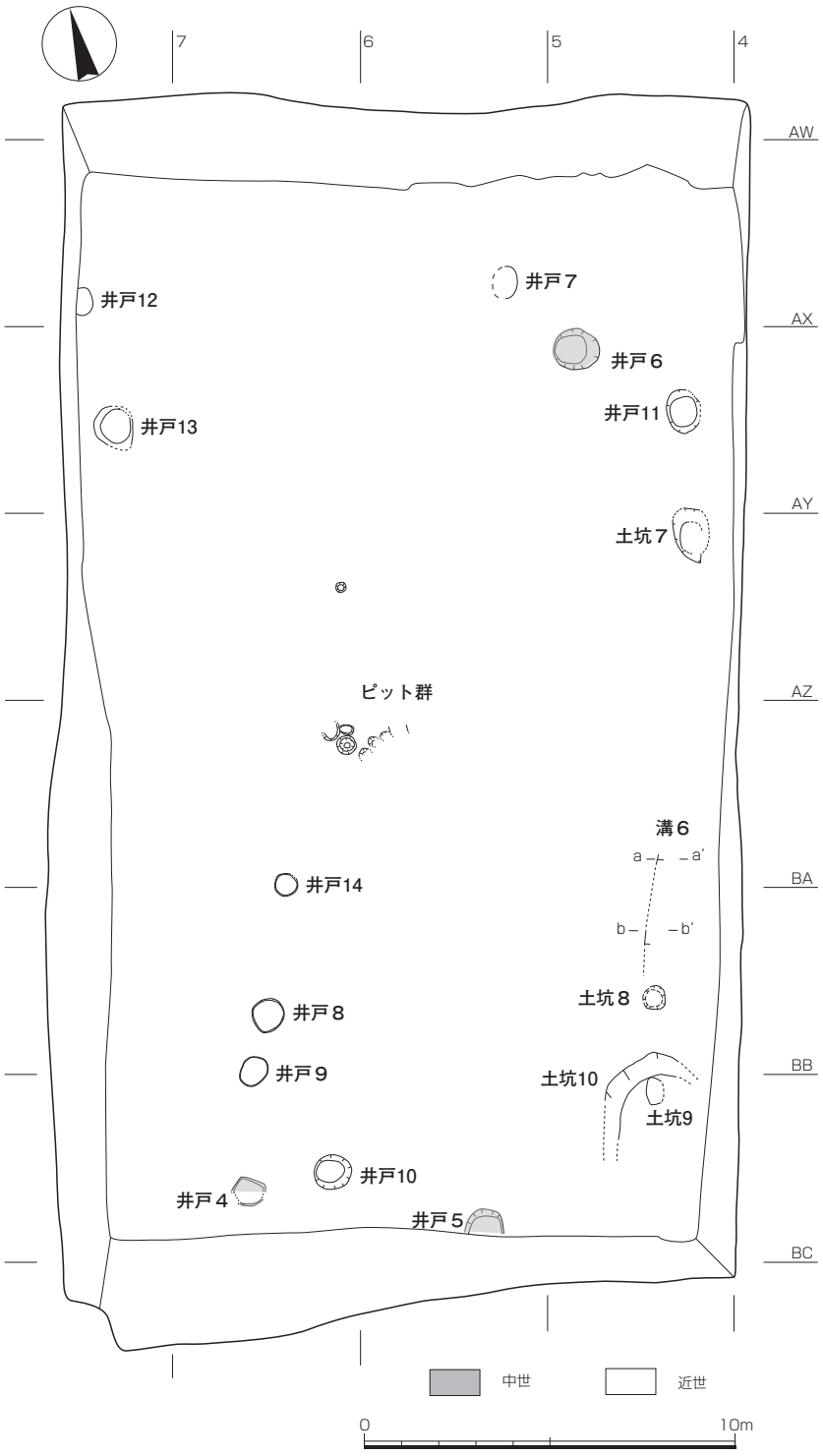


図32　中世・近世の遺構全体図（縮尺1/200）

(1)　中世の遺構・遺物

１．井戸

井戸４（図33・34　図版11）

調査区南端BB06区に位置する。検出面では一辺0.8ｍの近方形を呈し、底面では一辺0.7ｍの近方形を呈する。検出面の標高0.55ｍ、底面の標高－0.75ｍで、検

出面からの深さは1.2mを測る。西側に井戸１が隣接する。また現代のマツ杭が打ち込まれており平面形や土層に影響が認められる。

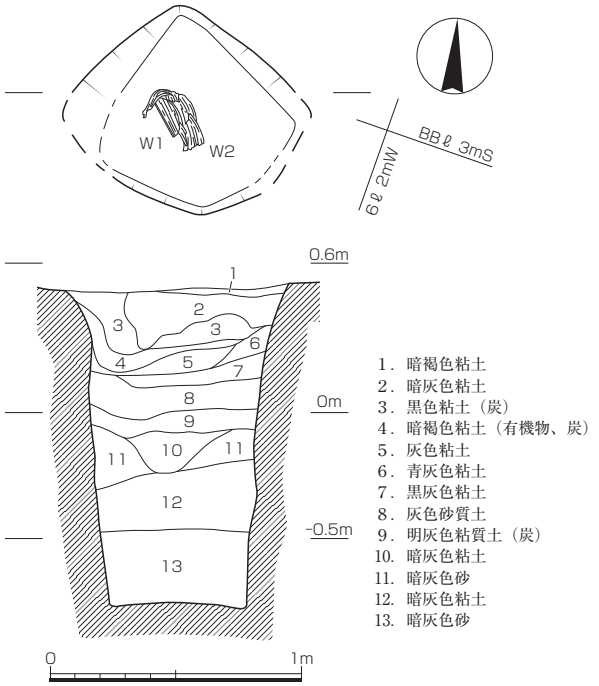
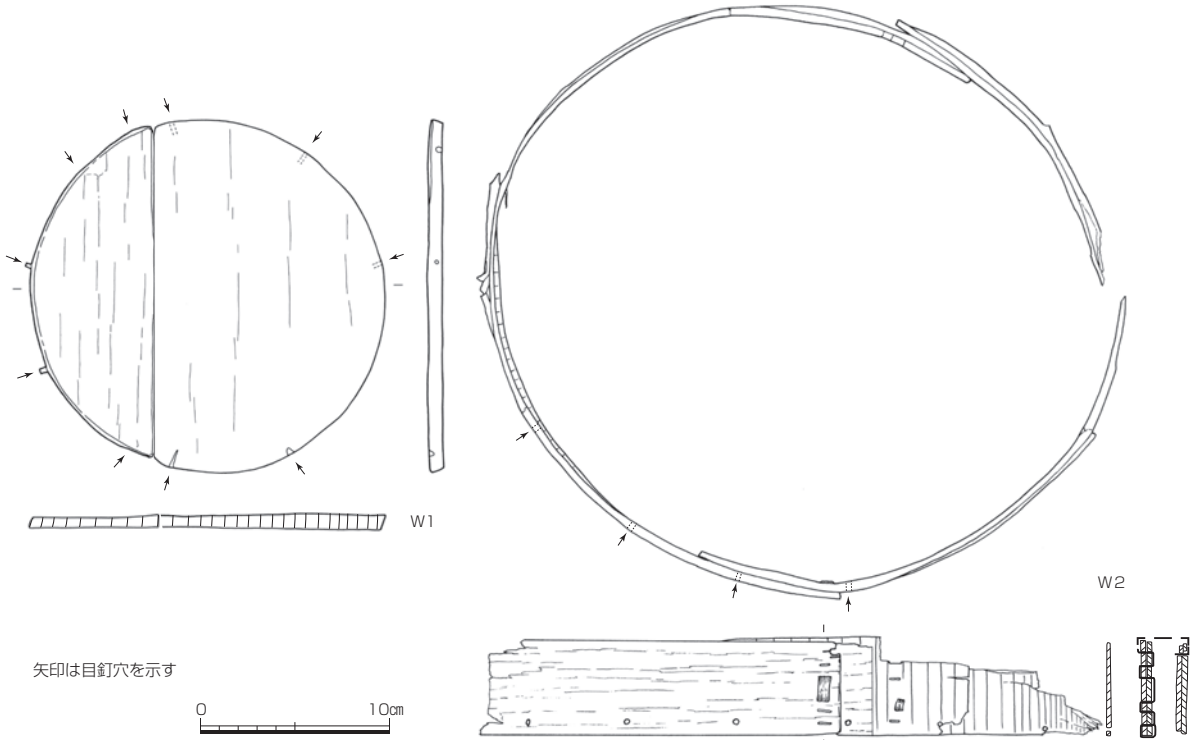


図33　井戸４（縮尺1/30）

埋土は13層に分けた。Ⅰ群（１～４層）、Ⅱ群（５～10層）、Ⅲ群（11～13層）に大別される。Ⅰ群は暗褐色～黒色を呈する粘土層であり、埋め土であろう。このうち４層には藁状の有機物を、３層に炭を多く含む。Ⅱ群は灰色～暗灰色を主体とする粘質土で埋め土である。９層に炭を多く含む。Ⅲ群は暗灰色を呈する砂と粘土が互層となり、使用中の堆積層の可能性がある。

遺物は少なく12号ポリ袋２袋が出土した。そのうち半分は弥生土器の小片であり、そのほかに丹塗り土師器小片、土師質土器小片が僅かに見られた。最下層13層中で、曲物底板（図33－Ｗ１）と側板（同－Ｗ２）が出土した。Ｗ１・２はサイズが異なることから同一個体ではない。そのほか埋土３・４層の土壌より、小型種子20科34種を抽出した（第４章２参照）。



番号	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	樹種	木取り	特徴
W1	曲物底板	18.7	18.5	0.8	ヒノキ	柾目	側面10カ所に目釘孔遺存、一枚づくり、表裏面平滑、破損部に目釘穴が近接して穿たれており補修の可能性を示す
W2	曲物タガ	(31.1)	5.2	0.3	ヒノキ	板目	2枚のタガを2カ所で結合、いずれもＳ接合、樺皮綴じは外4段綴じに復元可能、下部に現状11孔の目釘孔が遺存し本来は14孔程度か、内面に縦方向のケビキ

図34　井戸４出土遺物（縮尺1/4）

本遺構の時期は中世前半と考えているが、丹塗り土師器の存在を重視すると古代の可能性を残す。

井戸５（図35　図版12ａ）

調査区南端、BB05区に位置する。検出面で径1.1mの半円形を呈し、南半は調査区外にあたる。底面では径0.9mの半円形を呈する。検出面の標高0.6m、底面の標高－1.0mで、検出面からの深さ1.4mを測る。断面形は標高－0.2m付近が膨らむいびつな筒形を呈する。

埋土は13層に分けた。Ⅰ群（１－２層）、Ⅱ群（３－７層）、Ⅲ群（８－12層）、Ⅳ群（13層）にまとめられる。Ⅰ～Ⅳ群は埋め土と考えられる。Ⅰ群は青灰色～灰色を主体とする。Ⅱ群は灰色～暗灰色を主体とする粘質土で、粘土ブロックを多く含む。Ⅲ群は暗灰色を呈する粘質土と砂質土が互層状となる。４群は黒褐色粘土層であり、灰色粘土ブロックを多く含む。

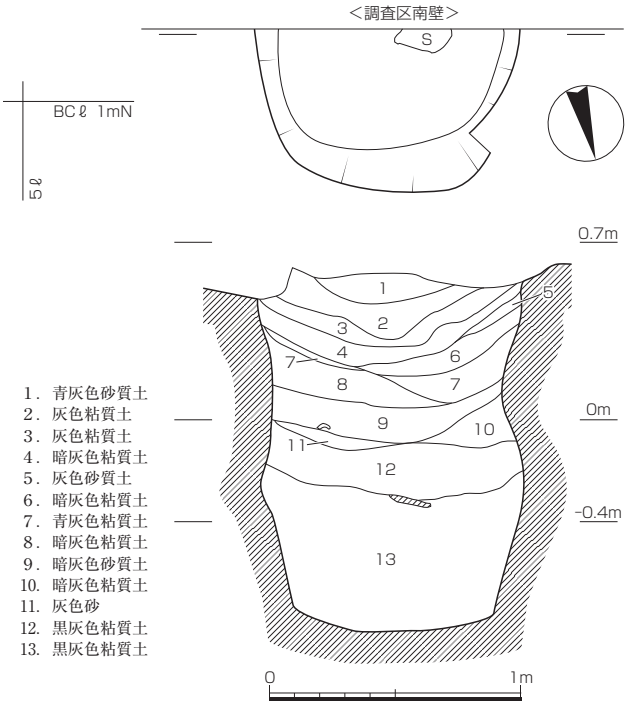
遺物は比較的少なく12号ポリ袋５袋が出土した。土師質土器椀・小皿、鍋の小片が含まれる。

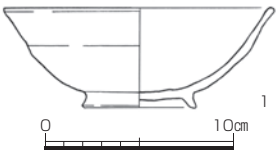
本遺構の時期は13世紀前半と考えられる。

井戸６（図36・37　図版12ｂ・ｃ）

調査区北東部、AX04区に位置する。検出面では南北1.1×東西1.2mの楕円形を呈し、底面では径0.8mの円形を呈する。検出面の標高0.7m、底面の標高－0.8mを測り、検出面からの深さ1.5mである。断面形では－0.3m付近が膨らむ円筒形を呈する。

埋土は13層に分けた。Ⅰ群（１～７層）、Ⅱ群（８・９・12層）、Ⅲ群（10・11層）、Ⅳ群（13層）の４群にまとめられる。Ⅰ群は暗褐色を呈する粘質土を主体とし、各層に粘土ブロックを含む。埋め土である。Ⅱ群は灰色を呈する粘質土が主体で、特に８層に有機質を密に含む。Ⅲ群は暗褐色・暗灰色を呈する粘質土層で、縦位に堆積する特徴から、木枠の痕跡の可能性がある。Ⅳ群は暗褐色粘質土層である。





番号	器種	口径（cm）	高台径(cm)	器高（cm）	残存	特徴	色調	胎土
1	土師器　椀	14.0	6.0	5.2	口：3/4 高台：4/5	内：ナデ、外：押圧・ナデ	黄灰白	1～2㎜砂礫

図35　井戸５・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

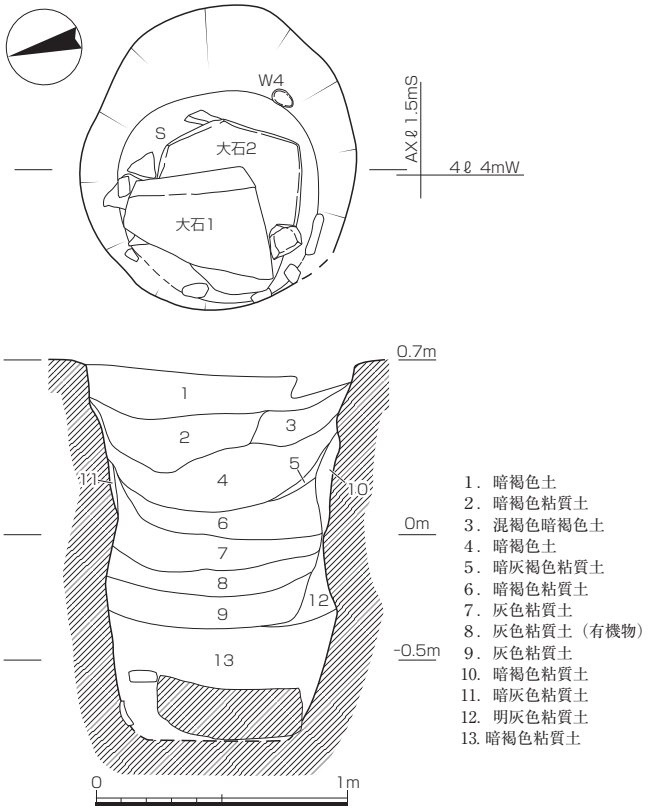
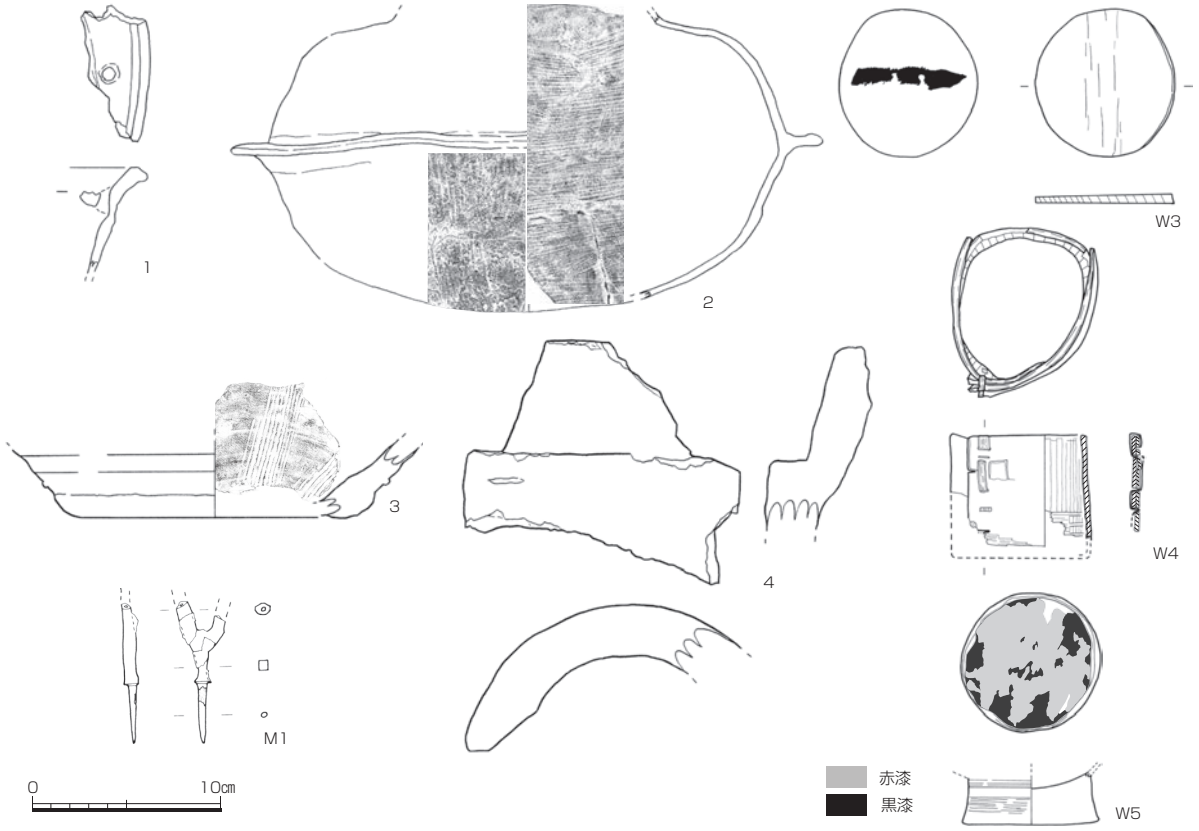


図36　井戸６（縮尺1/30）



番号	器種	口径（cm）	底径（cm）	高さ（cm）	残存	特徴	色調	胎土
1	瓦質土器　鍋	−	−	−	1/4以下	内：ナデ・横位ハケメ、外：回転ナデ・押圧・ハケメ	黒色	1〜2㎜砂礫多
2	瓦質土器　釜	−	−	−	1/2強	内：ナデ・ハケメ、外：ナデ・押圧・ハケメ	黒・暗褐色	緻密
3	備前焼　擂鉢	−	14	−	底部：1/4	内：回転ナデ・擂目、外：回転ナデ	暗赤褐	緻密

番号	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚（cm）	特徴	色調	胎土
4	軒丸瓦	−	−	−	凹面：布目痕、凸面：ナデ	赤褐色	緻密

番号	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚（cm）	樹種	木取り	特徴
W３	柄杓底板	7.7	7.3	0.4	ヒノキ	柾目	側面目釘孔なし、一枚づくり、裏面に柄杓柄と直交方向の一文字の墨書あり、表裏面平滑
W４	柄杓側板	5.9	7.3	0.3	ヒノキ	柾目	一枚の側板で構成、Z接合で樺皮綴じは外3段綴じに復元可能、柄の挿入孔は一辺1.0cmの正方形、内面に縦方向のケビキ
W５	漆塗椀	7.2	7.2	3.3	トチノキ		円盤高台、高台高2.0cm、内外面とも黒漆を塗布し、内面にはその後赤漆を塗布

番号	器種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量（g）	特徴
M１	ヤス	7.4	0.5	0.4	7.1	又内部は中空、茎部に木質付着

図37　井戸６出土遺物（縮尺1/4）

遺物はコンテナ（28ﾘｯﾄﾙ）１／２箱が出土した。土師質土器、備前焼、瓦質土器のほか瓦、弥生土器片が含まれる。備前焼擂鉢（図37－３）・瓦質土器（同－１・２）、丸瓦（同－４）を図化した。２は釜で、口縁が欠失しているがすぼまる形状になると想定され、瓦質土器釜Ｂ類に比定される。Ｗ３・４は柄勺の勺部にあたり同一製品である。Ｗ４の歪みが顕著であり合わせて図化することが難しかった。Ｗ５は漆塗椀の高台部で、トチノキを材とし、内面に赤漆を塗布する。

そのほか底面に大石２点が重なって置かれていた。上部の大石１は50×55cmの台形状で厚さ15cmを測る。下位の大石２は60×65cmの不整形で厚さ20cmを測る。大石２は底面にすっぽりとおさまるように据えられたと考えられる。いずれも最下層の13層中にあたり、大石２の東側に貼りつくように木製品（図37－Ｗ４）が出土した。大石は埋め戻しの過程で遺棄されたものと考えているが、重量的にかなりの労力を要したことが窺える。

埋土のうち13層の土壌サンプルを持ち帰り、小型種子17科31種を描出した（第４章２参照）。そのほかモモ１点も出土した。

本遺構の時期は出土遺物から中世後半、15世紀後半に比定される。

(2) 近世の遺構・遺物

1．井戸

井戸７（図38・39　図版13）

調査区北部、AW05区に位置する。検出面では径0.85mの円形、底面では径0.65mの円形を呈する。検出面の標高0.6m、底面の標高－0.55mを測り、検出面からの深さ1.15mである。断面形は上部が僅かに開く円筒形をなす。本遺構にはマツ杭２本が打ち込まれており、断面にも影響が見られる。

埋土は11層に分けた。Ⅰ群（１～５層）は茶灰色～灰色の砂質土を主体とする１～４層と暗灰色粘質土の５層からなる。炭化物を少量含む。Ⅱ群（６～10層）は灰色～暗灰色の砂質土を主体とする６～９層と暗灰色粘質土の10層からなる。Ⅰ・Ⅱ群の状況からは埋め戻しの段階のまとまりを示すとも考えられる。Ⅲ群（11層）は灰色砂質土で、使用時の堆積の可能性がある。

遺物は12号ポリ袋４袋が出土した。備前焼擂鉢、瓦質土器鍋のほか、瓦の小片が含まれる。最下層11層中からヒノキを材とする桶の部材（図39－Ｗ６・７）が出土した。底板の径17㎝を測り、小型の桶である。

本遺構の時期は、出土遺物から中世後半以降、近世と考えられる。

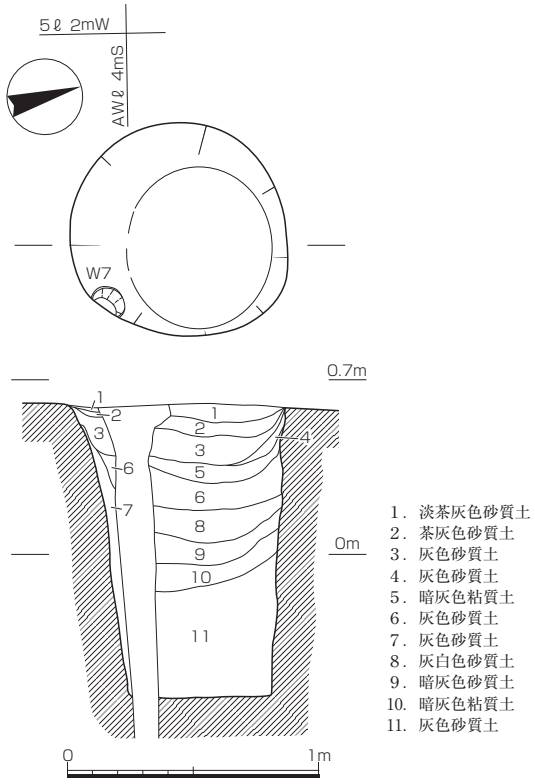
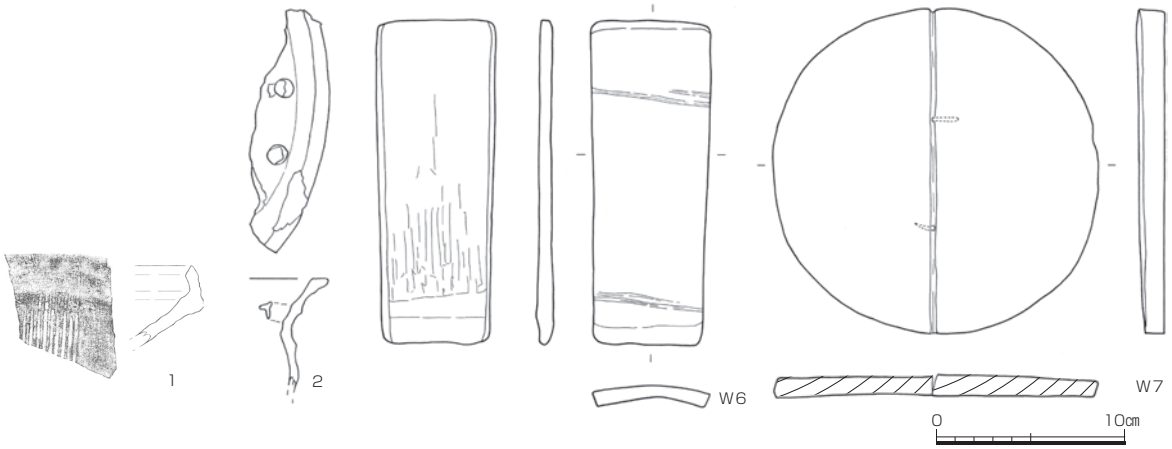


図38　井戸７（縮尺1/30）



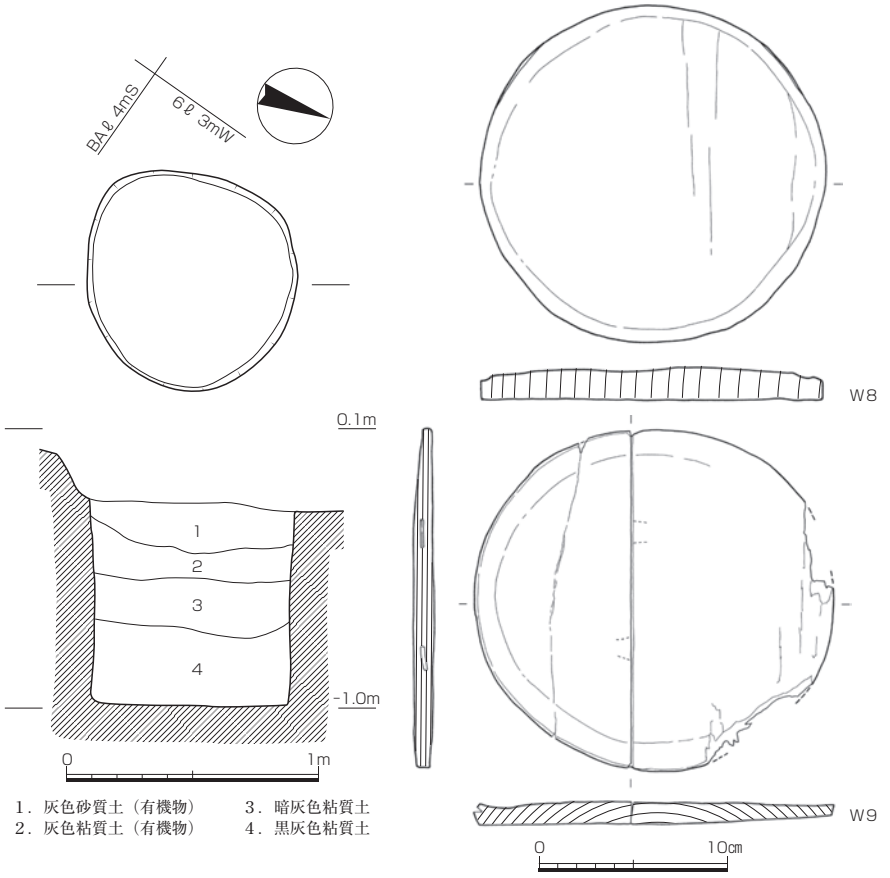
番号	器種	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	残存	特徴	色調（内／外）	胎土
1	備前焼　擂鉢	－	－	－	1/4以下	内：回転ナデ・擂目、外：回転ナデ	暗赤褐／黒	1～5㎜砂礫多
2	瓦質土器　鍋	－	－	－	1/4以下	内：ナデ・横位ハケメ、外：回転ナデ・押圧・ハケメ	黒／黒	緻密

番号	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚（cm）	樹種	木取り	特徴
W6	桶側板	17.0	6.0	0.6	ヒノキ	板目	目釘孔なし、外面上下に側板緊縛時に付されたものと思われる２条の条線あり、内面下部の底板との結合箇所やや窪む
W7	桶底板	17.0	17.0	1.1	ヒノキ	板目	側面目釘孔なし、別材を２カ所のほぞで結合、表裏面平滑、W6と同一個体

図39　井戸７出土遺物（縮尺1/4）

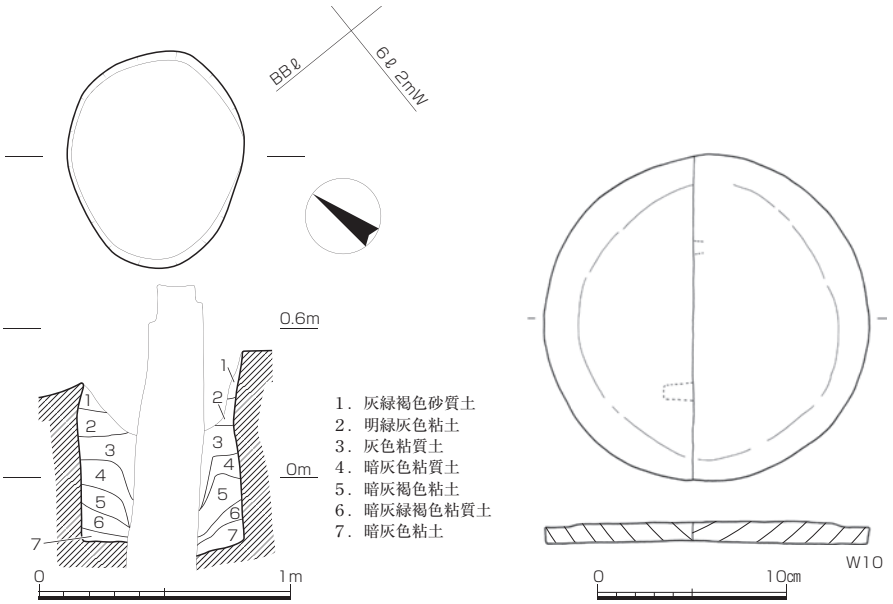
井戸８（図40　図版14）

調査区南部、BA06区に位置する。検出面・底面とも径0.88mの円形を呈し、断面形は円筒形をなす。検出面の



番号	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	樹種	木取り	特徴
W８	曲物底板	18.0	17.5	1.7	アスナロ	板目	側面目釘孔なし、一枚づくり、縁部やや窪む、表裏面平滑
W９	曲物底板	17.9	18.9	1.2	スギ	板目	側面目釘孔なし、一枚の板材を半裁のうえ、2カ所のほぞで結合、縁部やや窪む

図40　井戸８・出土遺物（縮尺1/30・1/4）



番号	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	樹種	木取り	特徴
W10	曲物底板	17.2	17.0	1.1	スギ	柾目	側面目釘孔なし、別材を2カ所のほぞで結合、縁部やや窪む、表裏面平滑

図41　井戸９・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

標高－0.2m、底面の標高は－1.0mを測る。上面を近代の庭園遺構に削平され、検出面からの深さは0.8mを測る。

埋土は４層に分けた。１層は灰色を呈する砂質土層で、２～４層は灰色～黒灰色を呈する粘質土である。３・４層に粘土ブロックを多く含み、いずれも埋め土と考えられる。

遺物は12号ポリ袋２袋が出土した。土師質土器小片、瓦片、弥生土器の小片のほか、木製品２点が出土した。図40－Ｗ８・Ｗ９はいずれも曲げ物の底板である。Ｗ９は２枚の板の合わせ目の側面にそれぞれ２カ所ほぞ穴を施し、木材で繋いだものであるが、繋ぎとなる木材は失われている。２枚は同一個体であり、ほぞつぎは補修の痕跡と考えられる。

本遺構の時期は出土遺物から近世に比定される。

井戸９（図41　図版15）

調査区南部、BB06区に位置する。井戸８の0.8m南に隣接している。検出面では南北0.7m、東西0.8mの楕円形を呈し、底面では南北0.65m、東西0.75mの楕円形状をなす。検出面の標高0.5m、底面の

標高は－0.3mで、検出面からの深さ0.8mを測る。上部を近代遺構により大きく削平され、中央にはマツ杭が打ち込まれており、土層断面にもその影響が顕著である。

埋土は７層に分けた。１層が砂質である以外は、いずれも灰色～暗灰色を呈する粘質土であるが、マツ杭の影響が大きいと考えられる。いずれの土層にも粘土ブロックを多く含み、埋め土であろう。

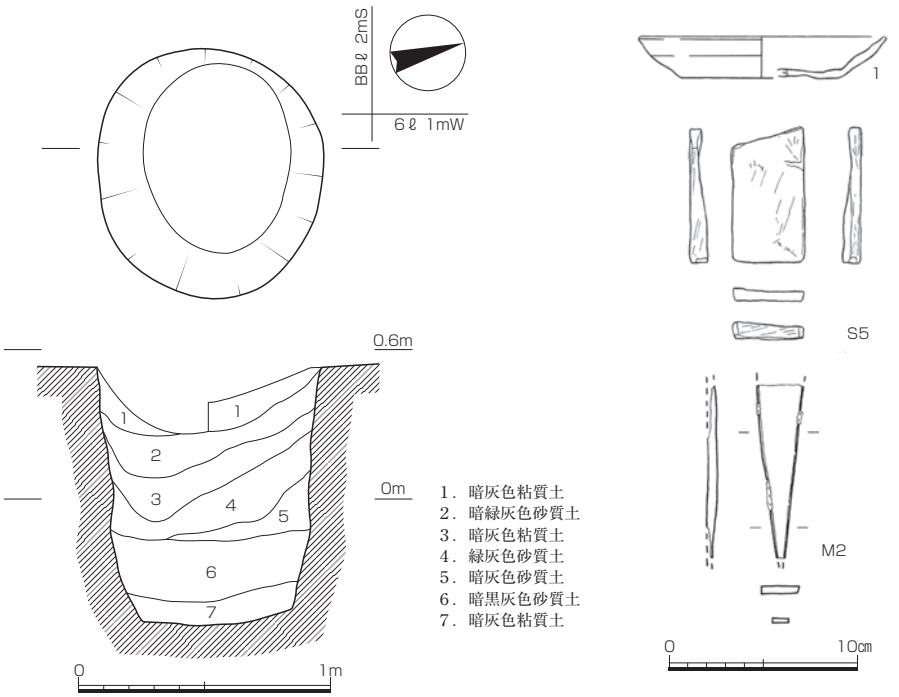
遺物は12号ポリ袋で２袋が出土した。土師質土器、陶磁器、瓦、弥生土器が含まれるがいずれも小片である。図41－W10は曲物底板で、２枚の板を、合わせ目に施した２カ所のほぞ穴で継いでいる。そのほかにモモ１点がある。本遺構の時期は出土遺物から近世に比定される。

井戸10（図42　図版16）

調査区南端、BB06区に位置する。前述の井戸９の南東３ｍの地点である。検出面では南北0.9m、東西1.0mの楕円形、底面では南北0.6m、東西0.7mの楕円形を呈する。検出面の標高0.55m、底面の標高は－0.5mで、検出面からの深さ1.0mが残る。断面形は上部が僅かに開く円筒形である。本遺構にもマツ杭が打ち込まれている。

埋土は７層に分けた。１群（１層）、Ⅱ群（２・３層）、Ⅲ群（４～７層）にまとめられる。１・３・７層と各群の最下層は暗灰色を呈する粘質土で、粘土ブロックを多く含む。その間に緑灰色～暗灰色の砂質土層が堆積する状況が繰り返し見られる。いずれも埋め土であろう。

遺物は僅かに土師質土器Ⅲ（図42－１）のほか、陶磁器、弥生土器のいずれも小片が10数点出土した。陶磁器には中世青磁片、近世染付の小片が含まれる。Ｓ５は粘板岩製の砥石で、側面４面が使い込まれている。Ｍ２は和釘である。



番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	特徴	色調	胎土
1	土師器　Ⅲ	12.8	8.0	2.2	1/4	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：切り離し後、押圧・ナデ	黒褐色／暗褐色	1～2㎜砂礫

番号	器種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量（g）	残存	石材	特徴
S5	砥石	7.1	3.8	0.9	29.0	一部欠損	粘板岩	砥面：4面

番号	器種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量（g）	特徴
M2	釘	9.1	2.3	0.4	28.5	和釘、断面方形、上下端とも欠損

図42　井戸10・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

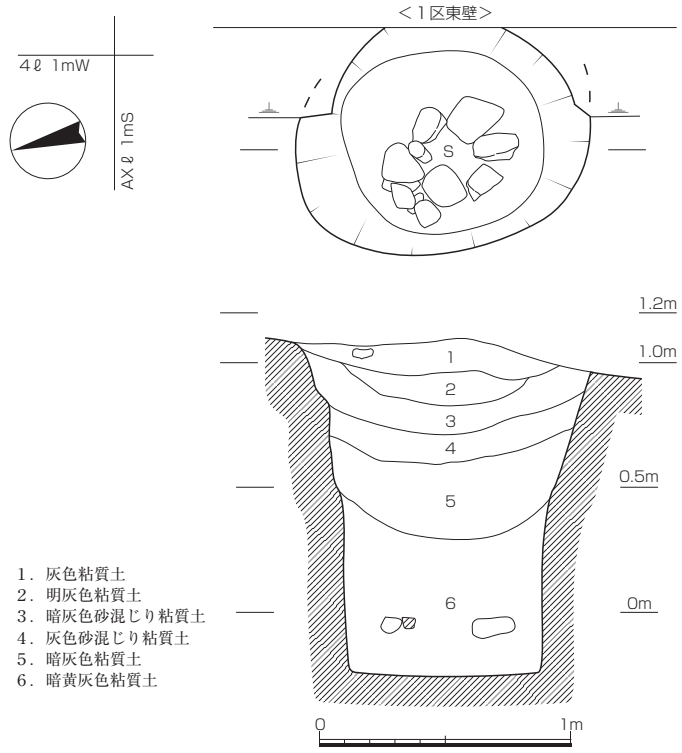


図43　井戸11（縮尺1/30）

本遺構は、出土遺物から近世に比定される。

井戸11（図43　図版17）

調査区北東、AX04区に位置する。検出面では南北1.2m、東西1.0mの南北に長い楕円形、底面では径0.8mの円形を呈する。検出面の標高1.1m、底面の標高－0.25mで、検出面からの深さ1.35mが残る。断面形は底面から標高0.5mまで筒型で、それより上位が広がる形状である。

埋土は６層に分けた。灰色～暗灰色を呈する粘質土が主体である。標高０m付近で５～10㎝大の礫12点が認められ、埋め戻す際に一気に遺棄したと思われる。礫にはいずれも加工痕や被熱は認められない。

遺物はコンテナ（28ﾘｯﾄﾙ）１／２箱が出土した。その大半は瓦片であり、そのほかに備前焼、瓦質土器、土師質土器、弥生土器のいずれも小片を含む。このうち備前焼は壺口縁であり、近世前半であろう。

本遺構の時期は出土遺物から、近世に比定される。

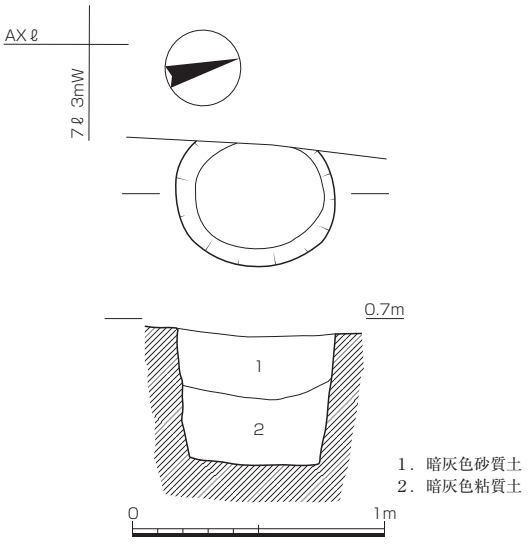


図44　井戸12（縮尺1/30）

井戸12（図44）

調査区北西部、AW07区に位置する。調査区西壁にかかっており、本遺構の西端は調査区外にあたる。検出面では径0.6mの円形、底面で径0.5mの円形を呈する。検出面の標高0.65m、底面の標高0.1mを測り、検出面からの深さは0.5mである。

埋土は暗灰色砂質土層、暗灰色粘質土層の２層であり、出土遺物は見られなかった。

本遺構は小規模で底面レベルが他の井戸に比して高い点から、井戸として機能していたかは疑わしい。水溜等も想定されるが、規模の点では他にも同等の井戸があり、本報告では井戸として掲載する。

本遺構の時期は検出面から近世と比定する。

井戸13（図45　図版19ａ）

調査区北西、AX07区に位置する。検出面では径1.1mの不整円形、底面では径0.8mの円形を呈する。検出面の標高0.85m、底面の標高は－0.9mを測り、検出面からの深さは1.75mである。断面形状は底面から標高０mまで筒形で、それより上位は緩やかに開く。中央付近にマツ杭が打ち込まれており、記録した土層断面にその影響が認められる。

埋土は５層に分けた。いずれも粘質土で、下層に向かうほど粘性が高い。２層には有機質を多く含む。出土遺物は少なく、近世陶磁器、土師質土器、弥生土器のいずれも小片であり、図示できるものはなかった。

本遺構上面は近代以降の遺構によって削平されており、本遺構の時期については層位から近世に比定される。

井戸14（図46　図版18）

調査区中央南寄り、AZ06区に位置する。検出面では径0.6ｍの円形、底面では径0.55ｍの円形を呈し、断面は筒型をなしている。検出面の標高0.3m、底面の標高－0.85ｍで、検出面からの深さ1.15ｍを測る。本遺構の上半は近代庭園遺構によって大きく削平されている。

埋土は12層に分けた。Ⅰ群（１～８層）、Ⅱ群（９～12層）の２つにまとめられる。Ⅰ群は暗灰色を主体とする土層で、Ⅱ群に比して粘度が低い。いずれの層にも粘土ブロックを多く含む。Ⅱ群は暗灰～暗褐色の粘質土層で粘土ブロックを含む。いずれも埋め土であろう。

出土遺物は非常に少なく、肥前磁器小片と丸瓦（図46－１）のみであった。

本遺構の時期は、出土遺物から近世と比定される。

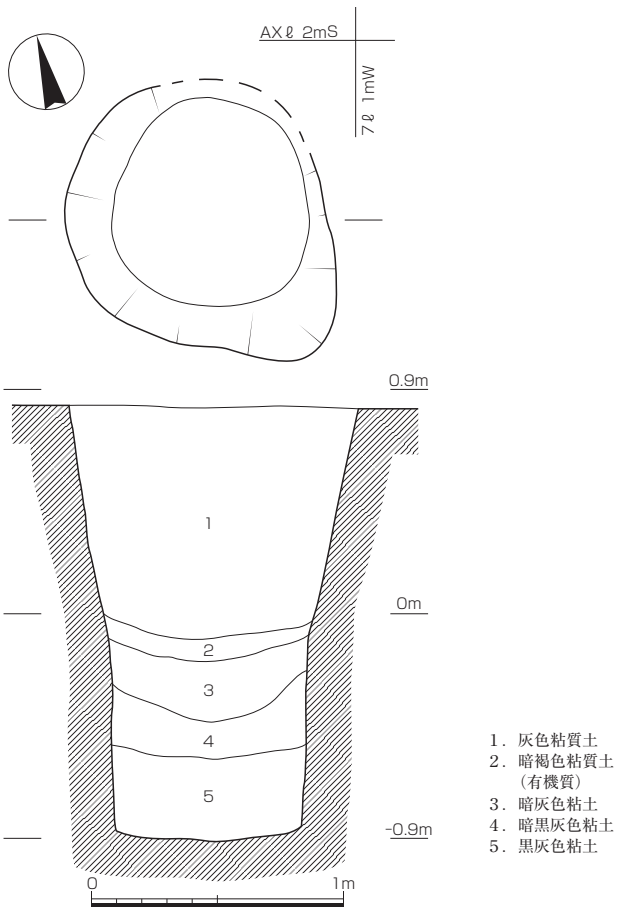


図45　井戸13（縮尺1/30）

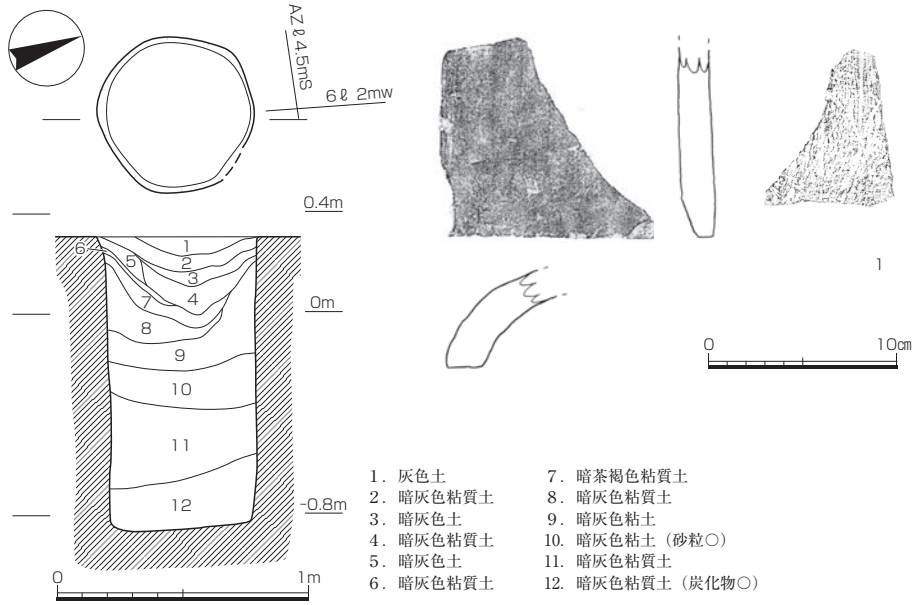
２．土坑

土坑７（図47　図版19ｂ・ｃ）

調査区北東、AY04区に位置する。本遺構の東端は東壁にかかる。

検出面では南北1.5ｍ、東西1.2ｍの楕円形、底面では1.0×0.9ｍの隅丸方形を呈する。

断面形は逆台形をな



番号	器種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	特徴	色調	胎土
1	丸瓦	（10.6）	（9.6）	1.6	凹面：布目痕、凸面：ナデ	灰色	緻密

図46　井戸14・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

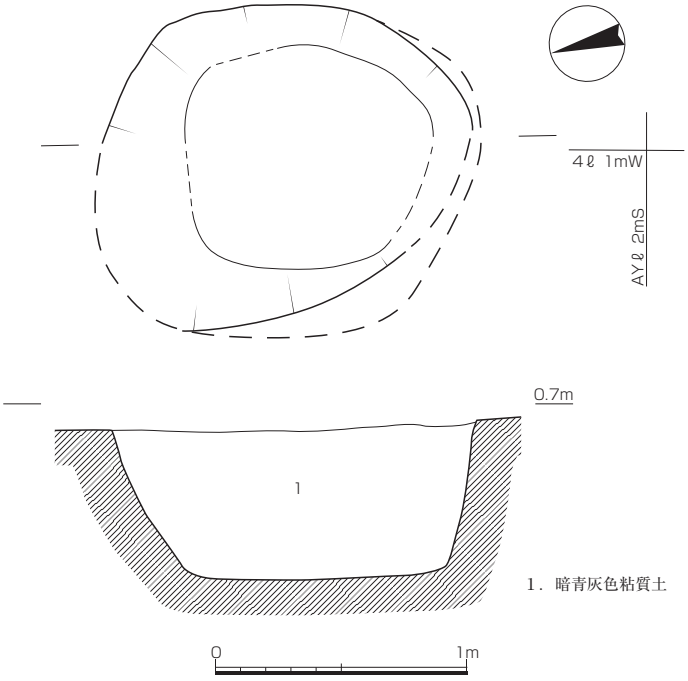


図47　土坑７（縮尺1/30）

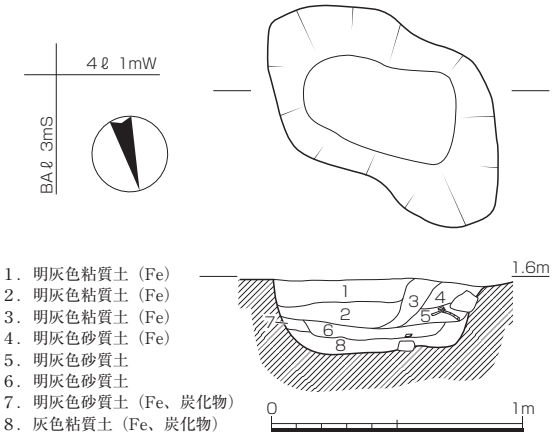


図48　土坑８（縮尺1/30）

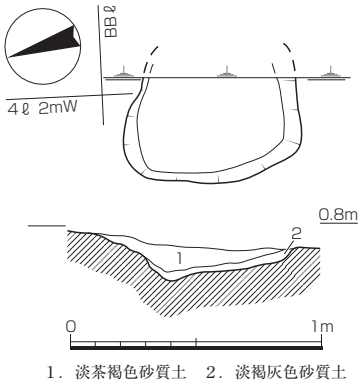


図49　土坑９（縮尺1/30）

す。検出面の標高0.6m、底面の標高０m、検出面からの深さ0.6mを測る。

本遺構は前期調査区１区の東端にかかっており、調査区東側溝により中央部が分断された状況で検出した。１区東壁基礎の下部が調査途中に崩落したため、詳細な分層の記録ができていない。埋土は暗青灰色粘質土で、粘土ブロックを多く含む。また本遺構は前述の土坑１の上部に重複する。

出土遺物は極めて少なく、弥生土器が数点出土した。うち１点は前述の土坑４出土遺物と接合している。

本遺構の機能については限定する材料に欠ける。時期は層位から近世に比定する。

土坑８（図48　図版20ａ）

調査区南東、BA04区に位置する。検出面では長径1.1m、短径0.6mの歪な楕円形、底面では長径0.6m、短径0.3mの隅丸長方形を呈する。検出面の標高1.6m、底面の標高1.3mで、検出面からの深さ0.3mを測る。断面形は逆台形をなす。

埋土は８層に分けた。Ⅰ群（１～３層）、Ⅱ群（４～７層）、Ⅲ群（８層）にまとめられる。Ⅰ群は明灰色粘質土を主体とする。Ⅱ群は明灰褐色砂質土を主体とし、４・５層に土器を多く含む。Ⅲ群は灰色粘質土である。

遺物はコンテナ１／４箱が出土した。弥生土器、古墳時代初頭の土師器の小片が多く、図示できるものはなかった。これらの遺物は下位に重複する土坑４あるいは土坑５に由来する可能性が高い。

本遺構の時期は検出面から近世とする。

土坑９（図49　図版20ｂ）

調査区南東、BB04区に位置する。長径0.7m、短径0.6m程度の楕円形を呈するものと考えられるが、本遺構の東端は前期調査４区の東壁下にあたり確認できていない。検出面の標高0.7m、底面の標高0.55m、深さ0.15mが残る。出土遺物は見られなかった。

本遺構の時期は層位から近世に比定する。

土坑10（図50　図版21）

調査区南東角、BA・BB04区に位置する。上面で南北2.85m、東西2.5mの範囲で検出し、本遺構の東端、南端は調査区外にあたるため、全形・規模は不明である。

検出面の標高は1.0m、底面の標高は－0.1mを測り、検出面からの深さ1.1mである。底面から標高0.1mまでは断面台形状に立ち上がり、標高0.1mより上位へは擂鉢状に広がる。

埋土は7層に分けた。灰色系を呈する粘質土が堆積する。いずれも埋め土と考えられる。

遺物はコンテナ(28ﾘｯﾄﾙ)1／2箱が出土した。弥生時代～近世の土器小片及び瓦片が含まれる。瓦片は最下層7層中に多く、埋め戻しの際に遺棄されたものと考えられる。そのほかモモ2点が出土した。

本遺構の時期は出土遺物から近世に比定する。また本遺構の機能については形状・規模が不明であり、推定が困難である。

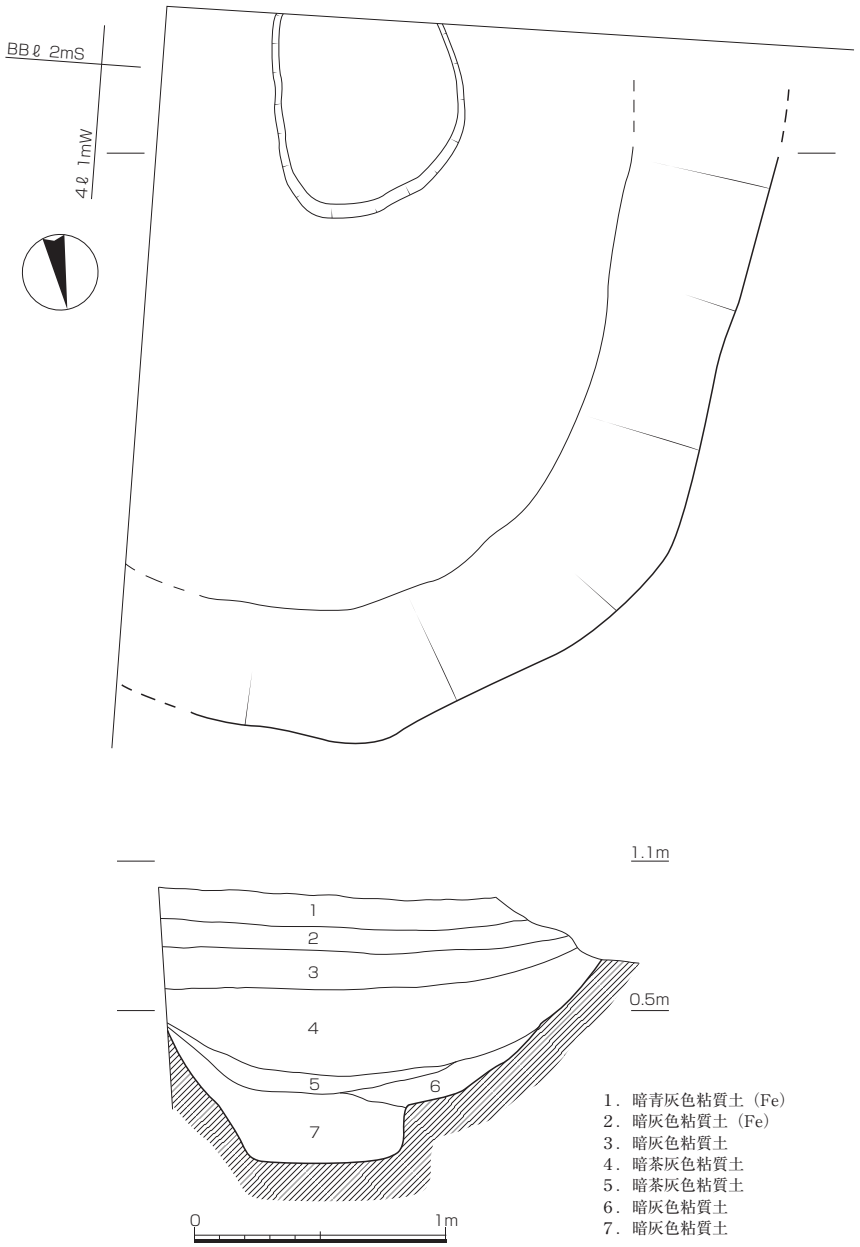


図50　土坑10（縮尺1/30）

3．溝

溝6（図51・52）

調査区南東部を南北方向に走行する溝の一部をBA04区で検出した。BAライン1m北～4m南の間で、長さ2m程を確認した。中ほどを近代の溝により削平されているうえ、溝の東縁は本調査区内では確認できていない。検出した箇所の北端・南端の断面形状は逆台形状の西半分であり、幅1.05～1.1mを確認した。

埋土はⅠ群（a断面1層・b断面1～6層）とⅡ群（a断面2層・b断面7～10層）の2群にまとめられる。Ⅰ群は淡茶灰色～淡灰黄色を呈する砂質土を主体とし、Ⅱ群は灰褐色～暗灰色を主体とする砂質土である。

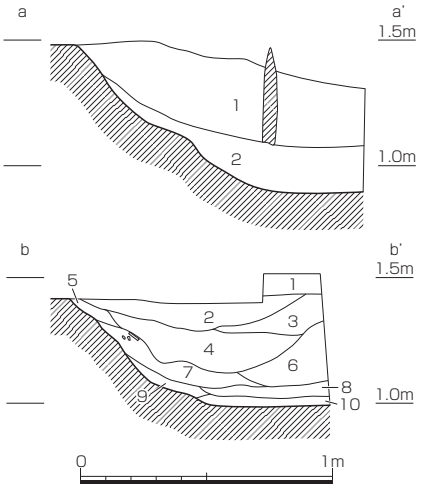
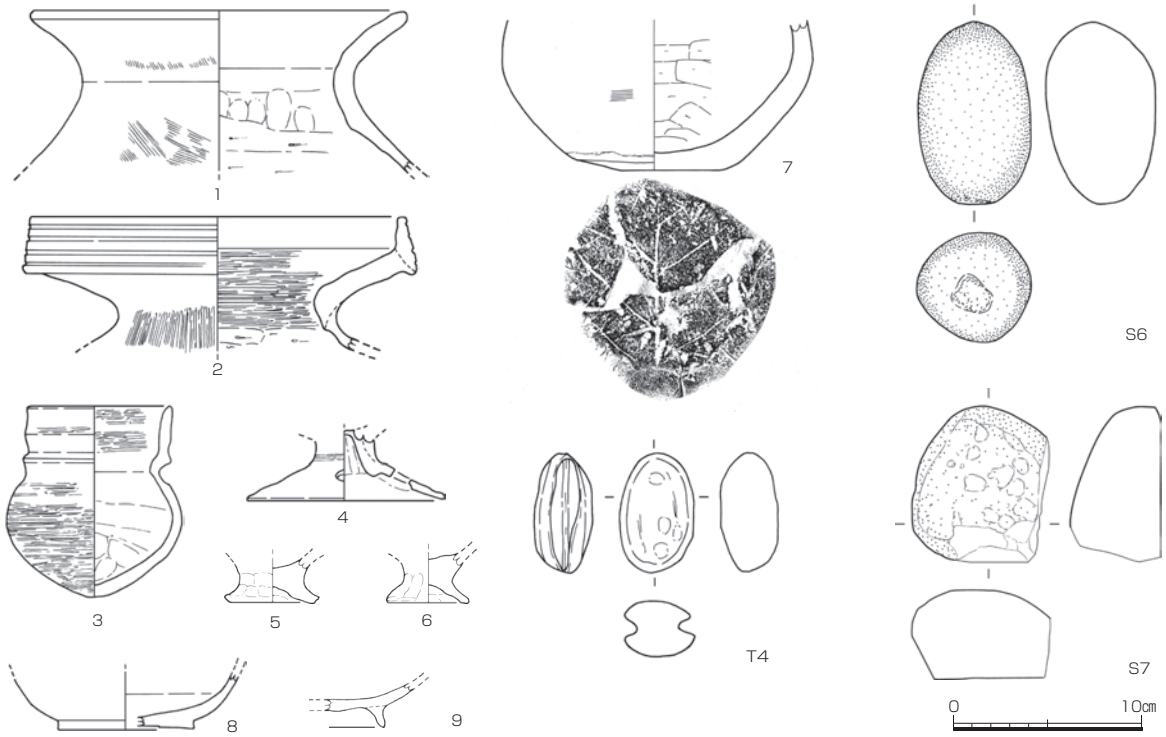


図51　溝６断面

遺物は比較的多くコンテナ（28ﾘｯﾄﾙ）２箱が出土した。その大半は弥生時代後期の土器で、甕・壺・高杯のほか、鉢・製塩土器である。これらは本遺構の下位に重複する土坑２・４・５、溝４等に由来するものと考えられる。次いで近世の瓦片が多く出土した。そのほか、古墳時代初頭の土器片や、緑釉陶器碗（図52－８）・内黒の土師器椀（同－９）等の古代の遺物が含まれる。周辺にこれらの時期の遺構の存在が窺える。

本遺構の時期は、出土遺物から近世に比定される。



番号	器　種	口径：cm	底径：cm	器高：cm	残存	特　徴	色　調	胎　土
1	弥生土器　壺	19.5	－	－	3/4	口縁：ナデ、内：横ナデ・オサエ・篦ケズリ、外：ハケ目・ナデ、圧痕	橙	細砂
2	弥生土器　壺	－	－	－	1/2	口縁：4条の凹線、内：ナデ・ミガキ・篦ケズリ、外：ナデ・ハケメ	淡橙	微砂
3	土師器　小型壺	7.3	1.8	10.0	1/6	口縁：横ミガキ、内：ナデ・オサエ、外：ミガキ後ナデ、ハケメ後一部ミガキ、全体に磨滅、歪み	淡橙	微砂
4	弥生土器　高杯	－	10.2	－	1/2	内外面磨滅、内：絞り痕、外脚：一部ミガキ、円形の透かし孔3カ所残存	橙	微砂
5	弥生土器　製塩土器	－	4.3	－	1/2	内外：オサエ、外面磨滅	内：暗褐　外：褐	微砂
6	弥生土器　製塩土器	－	3.7	－	1/2	内外：オサエ	内：灰褐　外：赤褐	細砂
7	弥生土器　鉢	－	8.6	－	1/1	内：ナデか篦ケズリ、外：ハケ目・ナデ、外底：木葉痕、黒斑	内：淡橙　外：橙	細砂　白色粒
8	緑釉陶器　椀	－	7.0	－	1/2	内外：ナデ、外底：篦ケズリ	胎：灰　釉：オリーブ	精緻
9	土師器　椀	－	－	－	－	脚内：ナデ・オサエ、外：ナデ、貼付高台、内面調整不明	内：黒　外：淡橙・橙	微砂

番号	器種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量（g）	残存	特　徴	色　調	胎　土
T4	有溝土錘	6.2	2.9	3.0	73.2	完	ナデ・オサエ、側縁に溝	淡橙	細砂

番号	器種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量：g	石材	特徴
S6	敲石	9.5	6.0	5.7	445.7	流紋岩質凝灰岩	敲打痕1カ所
S7	礫	（8.2）	（7.2）	4.8	390.5	安山岩	下面平坦、加工痕なし

図52　溝６出土遺物（縮尺1/4）

第４節　近代の遺構・遺物

近代の遺構は、井戸１基、溝１条、庭園遺構２基である（図53）。このうち溝１条は庭園遺構１の前段階の施設である可能性を考えており、庭園遺構１の項に含めて記載する。

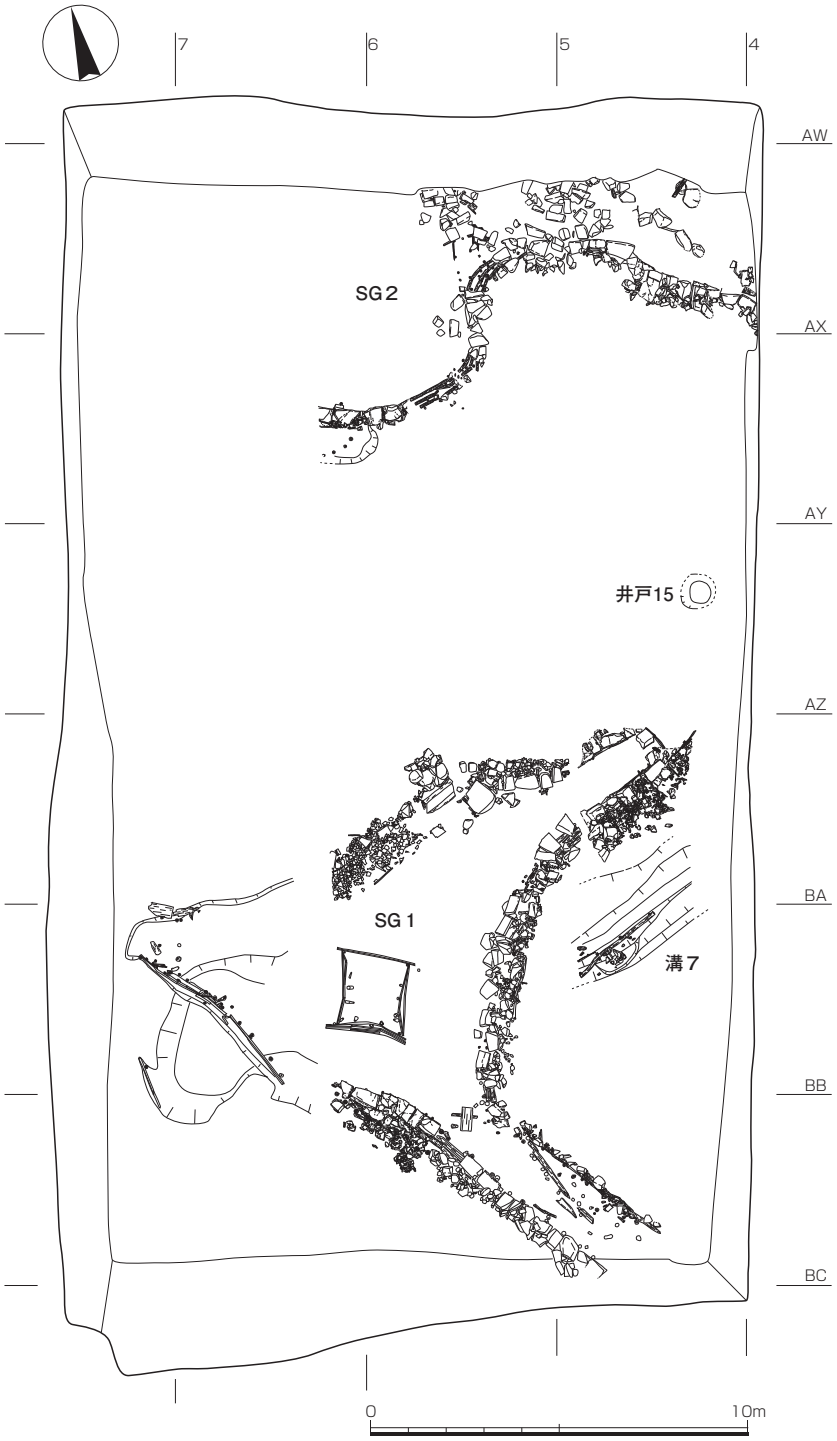


図53　近代遺構全体図（縮尺1/200）

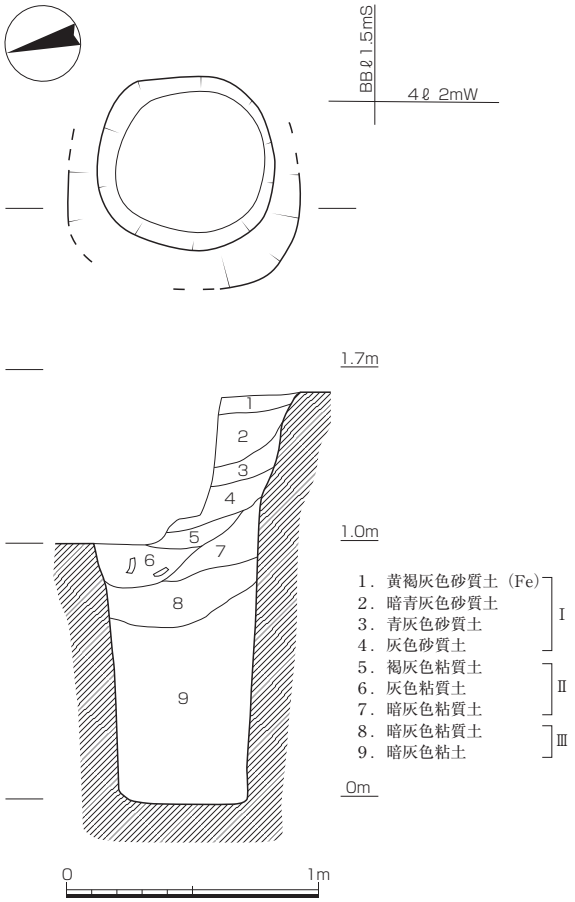


図54　井戸15（縮尺1/30）

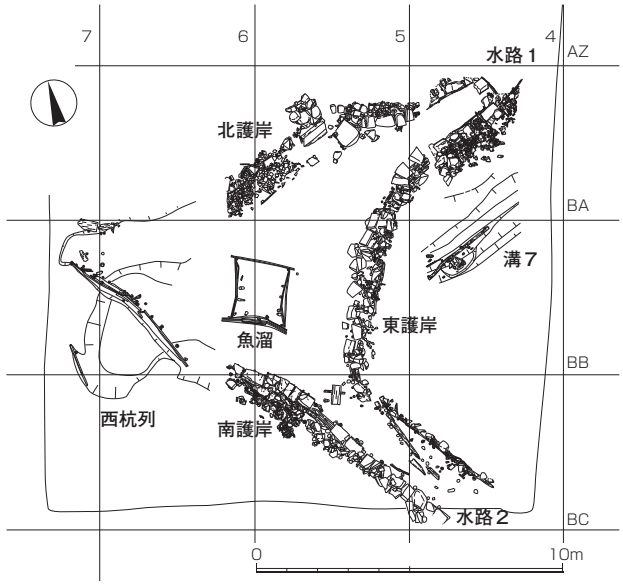


図55　SG1概要（縮尺1/250）

１．井戸

井戸15（図54）

調査区北東、AV04区に位置する。上面では径0.9mの円形、底面では径0.6mの円形を呈する。本遺構の北半分は標高1.0mまで削平されている。検出面の標高1.6m、底面の標高－0.02mで、残りの良い南半部では深さ1.62mを測る。断面の形状は、底面から標高1.0mまで筒形に立ち上がり、それより上位は僅かに開く。

埋土は９層に分層した。Ⅰ群（１～４層）、Ⅱ群（５～７層）、Ⅲ群（８・９層）の３つにまとめて記述する。Ⅰ群は黄灰色～青灰色の砂質土である。炭化物や粘土ブロックを多く含む。Ⅱ群は褐灰色～暗灰色の粘質土である。細砂・粘土ブロックを含む。これらいずれも埋め土であろう。Ⅲ群は黒灰色粘質土の８層と、暗灰色粘土の９層である。いずれもしまりがなく、特に混入物は見られない。

遺物は12号ポリ袋１袋が出土した。弥生土器、須恵器、瓦のいずれも小片のほか、ガラス瓶片が含まれている。

本遺構の時期は出土遺物から近代である。後述する庭園遺構との同時性については判断する材料はなく不明である。

２．庭園遺構

庭園遺構１（SG1）（図55～71　図版22～26）

調査区南半、AZ～BB・04～07区に位置する。北辺19m、東辺17m、南東辺15mの平面三角形を呈する池の北東角と南東角に、取水路（水路１）・排水路（水路２）が取りつく。池の検出面の標高は最も高いところで1.05m、底面の標高は－0.4mを測る。＜２層＞対応であり、本来は標高1.6m近くが上面となるとも考えられる。

既に述べたように調査区の大半がコンクリート基礎に覆われていたことから、前期・後期に分けて調査を実施したため、本遺構は各所で分断した調査・記録採取とならざるを得なかった。以下の記述は、池部分の護岸・杭列と、水路とに分けて行う。

ａ．池部

前述したように平面三角形状を呈し、北側・東

側・南側には石組護岸が、また西側には石組は認められず、杭と板材による設備を確認した。

北護岸（図56　図版22ｂ・ｃ・25ａ）　AZ05・06区で、北東から南西に約10mの範囲で検出した。西端から３ｍは瓦敷き、中央部に石段、石段から東３ｍの幅に護岸石組の３種で構成される。検出面は前期調査箇所では標高0.8m、後期調査箇所（すなわちコンクリート基礎下面）では標高0.5m前後を測る。北護岸部分は両者にかかっており検出面の標高は0.5～0.8m、最底面の標高は－0.1ｍを測る。標高0.1ｍ地点に傾斜変換点があり、西側瓦敷部ではその地点に0.3m～0.9mの不規則な間隔で並ぶ竪杭８本を確認した。瓦敷は竪杭から南に１ｍの範囲に施されている。桟瓦の破片を敷き詰めたものである。竪杭のほかに、横木が数本確認されるが、杭との関連は見いだせなかった。

石段はａ断面にみるように６段が確認される。最上部の標高1.3m、最下段の底面は標高0.1ｍで、傾斜変換点に最下段の石を据え、北に持ち送っている。最下段には幅0.9m、奥行0.5m、厚み0.3mの切り石を、下から２段目には幅0.9m、奥行0.4m、厚み0.18mの切り石を用いている。一方下から３段目より上については、0.3～0.5m大の割石を一段に２つずつ積むものであり、後述する東側の石組護岸との共通性が認められる。また前述の瓦敷に打たれた竪杭の最東端は、石段２段目の位置と合致している。

東側の石組護岸はbb'断面にみるように、南面を揃えるように切石・割石を３段積むものである。最上部の標高は0.8ｍを測り、それより上位は攪乱が及んでいるため本来高さは不明である。石積みの背後にあたる北側には裏込めの小礫が多数確認された。北護岸の東石組では最下段の石下部に胴木は認められない。中央石段の脇にあたる石組の西端部には0.7×0.7ｍの大石を設置する。大石の上面標高は0.45ｍを測り、中央石段最下段の上面レベル

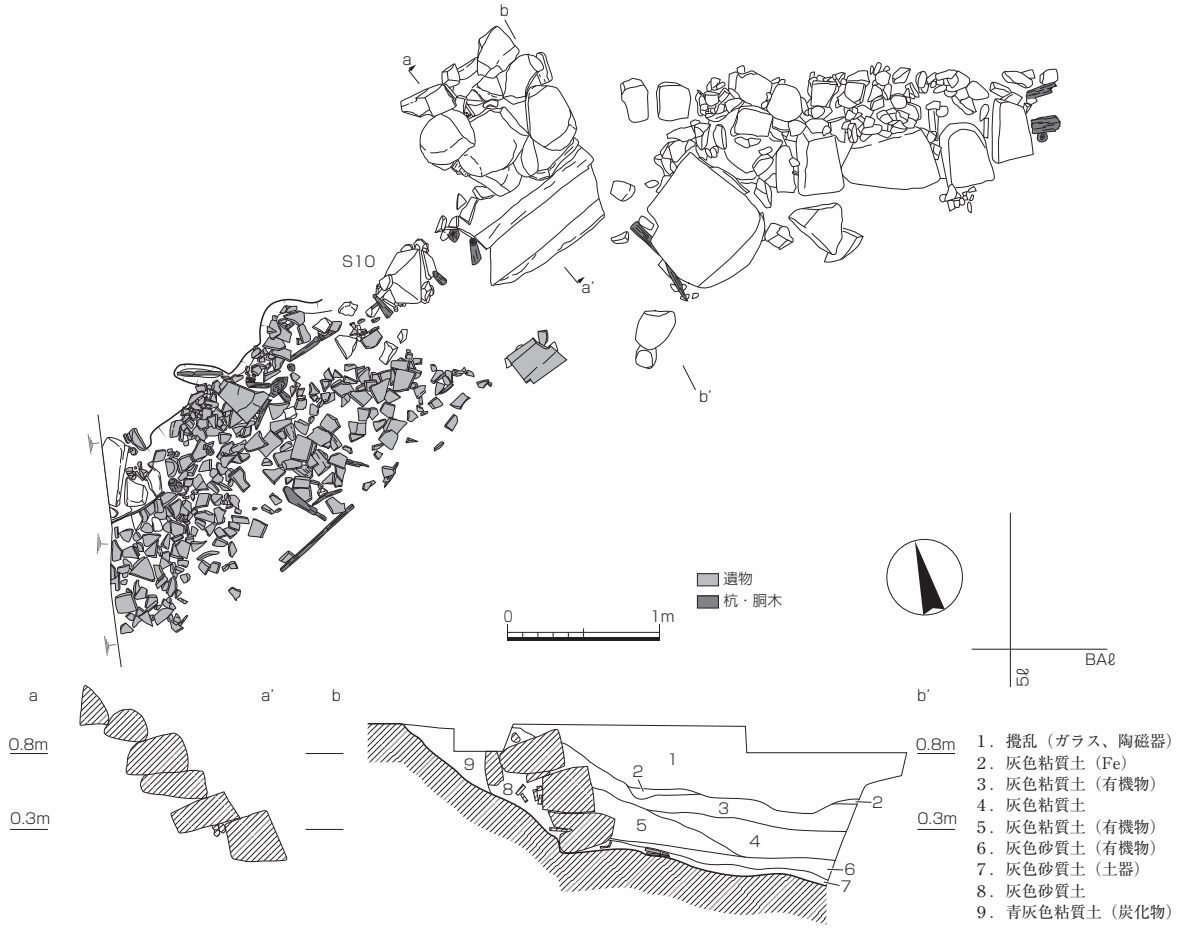


図56　SG1北護岸（縮尺1/50）

と近似しており、ここに踊り場状の空間があったことが想定される。

出土遺物についてはまとめて後述するが、１点、石段の脇で石塔の頂部材が出土していることを特記しておく（図65－S10）。

東護岸（図57　図版22ｄ・24ａ～ｃ）　AZ～BA・04～05区に位置する。SG1北東角の水路１から南東角の水路２間の石組護岸を7.5mの長さで検出した。西側にやや湾曲する形状を呈する。堀方は東端の標高0.5m、石組下の標高0.1mで、ここを傾斜変換点として、西側へ傾斜する。標高0.1m地点に、20～50㎝の間隔で打ち込まれた径10～15㎝の竪杭を合計25本を確認した。これらの竪杭で胴木を固定して石組の基礎としている構造である。東護岸の北端では胴木が４本並んで設置された状況が残り（図版24ｃ）、南端では胴木１本が固定された状況で認められた。胴木は径10～15㎝、長さ1.1m前後のものが用いられている（図57右）。東護岸の石組は検出時に既に崩れた状況であり、現代のマツ杭による破壊の影響も大きいものであったため、原位置を留めているものは極めて少な

図57　SG1東護岸（縮尺1/50）

いと考えられる。その中で北端の胴木上の３石は原位置に近いものと考えている。0.5m大の切石を積んでいたことが想定され、前述の北護岸東側と同様に、池側の面を揃えて組まれていたものであろう。５～15㎝大の礫も多数認められ、石組の背面に込められたものと考えられる。

南護岸（図58　図版25）　BB05区に位置する。SG1南東角から北西方向へ3.5mの長さを検出した。堀方は南端の標高1.0m、底面の標高－0.1mを測り、０m付近が傾斜変換点となる。その０m付近に径５～８㎝の杭10本を10～60㎝間隔で打ち込み、その南側に胴木を設置する。胴木は径12～18㎝、長さ0.8～２mのもの４本を確認した（図58右　図版25ｃ・ｅ）。これらを基礎としてその上部に切石７個を北東側に面を揃えて積む。切石は0.25×0.4m～0.7×0.4mのものが認められ、幅はさまざまであるが奥行を揃えていると考えられる。その背後には径18㎝、長さ1.3mを測る胴木を設置して、上位に0.3m大の小ぶりな割石を並べ、さらに５～15㎝大の礫を充填する。標高0.2mの付近には径10㎝の杭10本を概ね30㎝間隔で打ち込み、胴木を設置していたとみられ、本地点では１本が原位置で確認された。径20㎝、長さ1.2mを測る。原位置を保つ石材は、上述の切石７石であるが、調査中に周囲で規格が近似する石が10点近く出土しており、少なくとも２段以上の石組護岸が設置されていたと考えられる。堀方の規模および＜２層＞のレベルを考慮すると、３～４段以上の可能性も考えられ、堀方の形状は前述の北護岸東

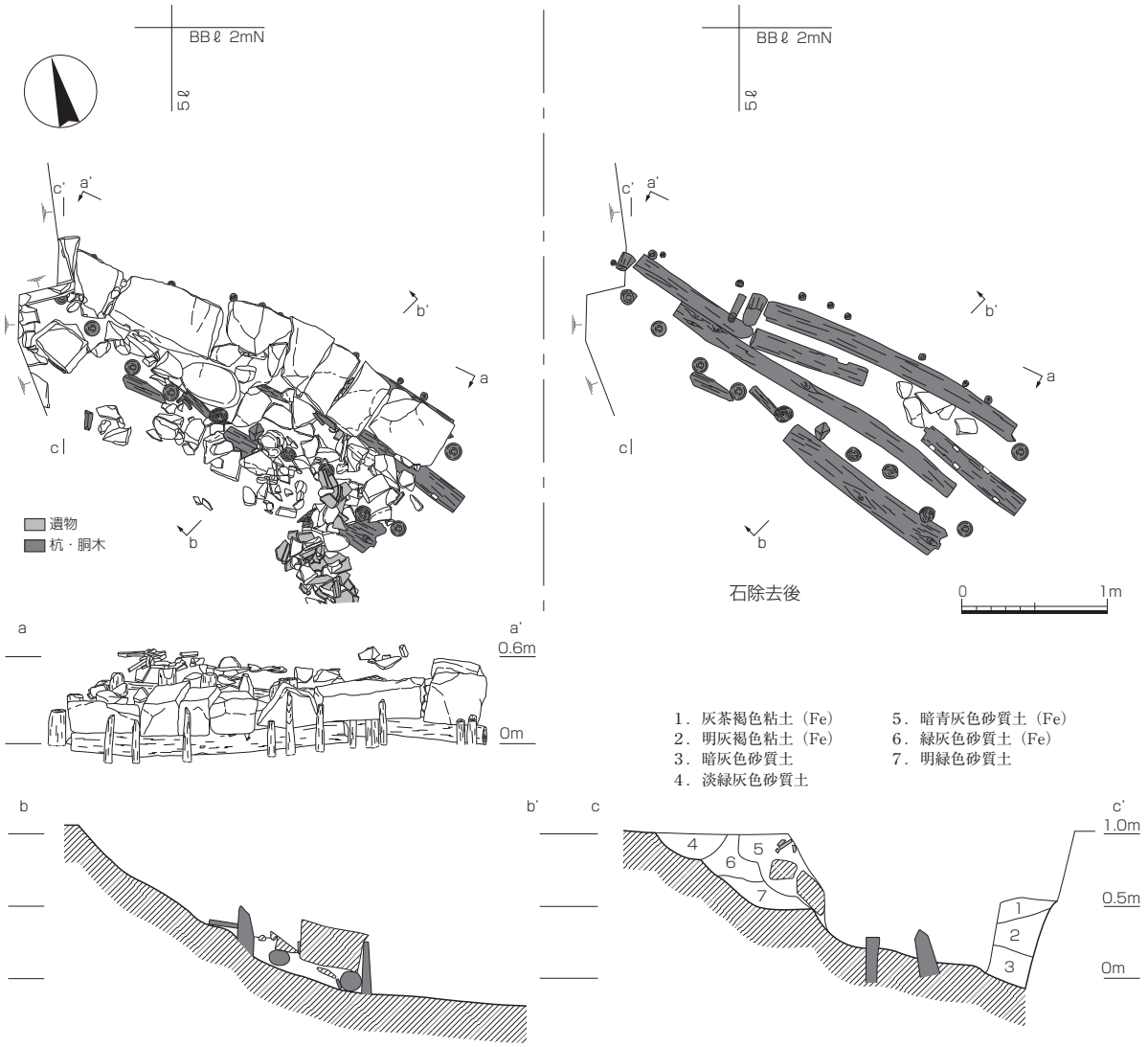


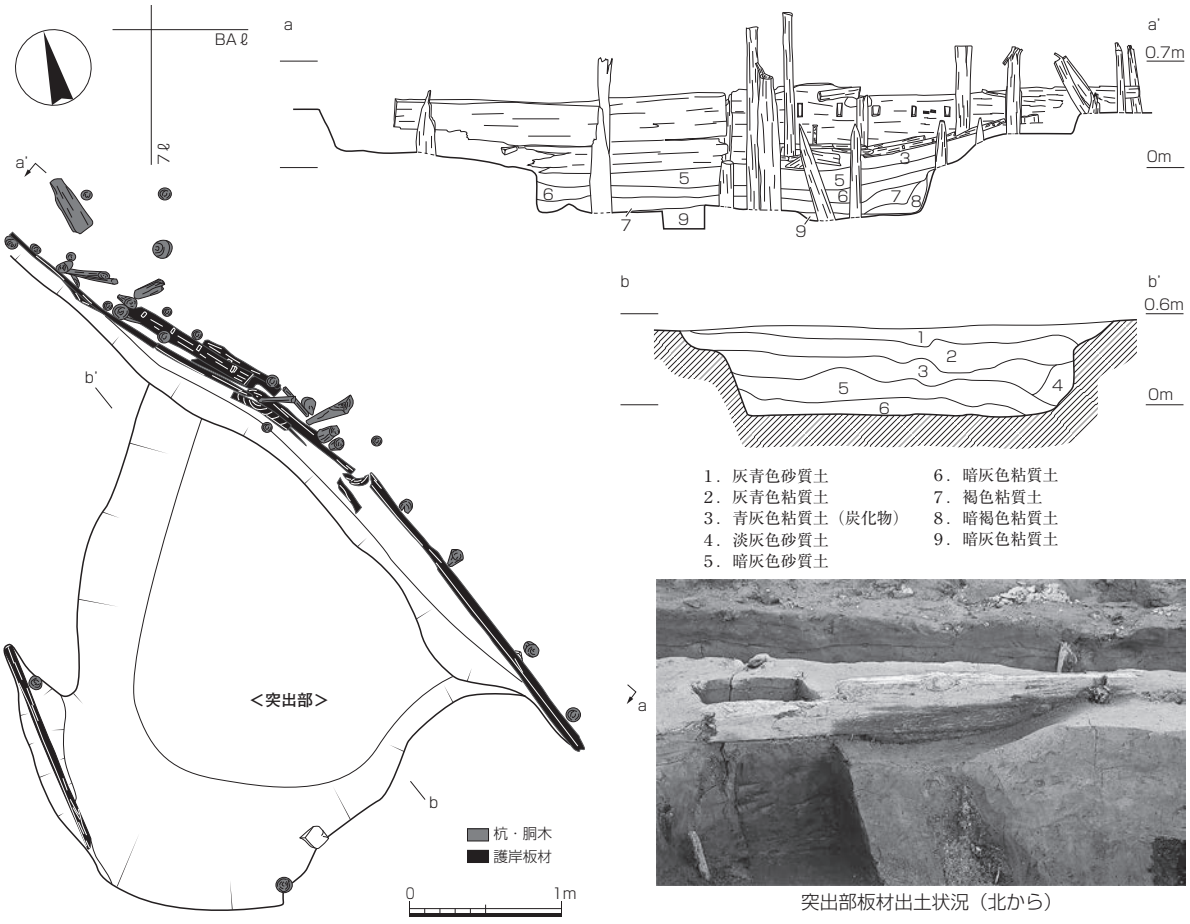
図58　SG1南護岸（縮尺1/50）

側と同様であることを記しておく。

西杭列（図59　図版26）　BA・BB06区に位置する。SG1池部の西角部分と、南西部への突出部からなる。西角部分南辺と突出部南端の２カ所で、竪杭と横板による施設を検出した。これまで述べてきた北・東・南の護岸石組のように本来は石組があったことが想定されるが、本調査地点の西半は、構内座標６ライン西１ｍを境に後世の破壊の程度が大きく、SG1・SG2のいずれも６ライン西１ｍより西の残りが非常に悪い状況である。岡山医科大学敷地として利用する際に石材等はすべて除去したものと考えられる。

突出部と西角部分は切り合い関係にあり、突出部を西角部分が切る。いずれも検出面の標高0.55m、底面最深部の標高は突出部で－0.1m、西角部分で－0.3m、深さは突出部で0.6m、西角部分で0.7mを測る。突出部には南西に張り出す南端と南西端の２カ所に竪杭が設置され、南西端の杭により止めるように横板材が設置される。竪杭は径８～10㎝、板材は幅1.4m、高さ0.4m、厚さ４㎝が残る（図59右下）。一方、西角部分の南辺に沿って竪杭を打ち込み、横板材を設置する。杭は径0.2～0.5mを測り、0.3～0.8mの間隔で打たれた20本余を確認した。うち２本を図示している（図69－W49・50）。横板材は幅1.56m、高さ0.48m、厚み2.8㎝を測る（同－W47）。１枚板ではなく、２枚の板を鎹により繋ぎ併せたものである。

この施設により突出部は遮られ、小規模な池状に滞水したものと考えられる。西角部分南辺の断面形は0.1m地点と－0.3m地点で屈曲する逆凸字形を呈しており、横板材の下位に土層の堆積が認められる。これらの施設は突出部が－0.3mから０ｍまで埋まった後に設けられたと考えられる。横板材の構造が類似する点から後述する魚溜施設と関連するものであろう。なお調査時には切り合い関係を重視して、突出部が埋まった後平面三角形状に改



突出部板材出土状況（北から）

図59　SG1西杭列（縮尺1/50）

修したように考えたが、西杭列により仕切った後も突出部は機能しており、その機能としては部材の共通性からこの後述べる魚溜と共通することが想定される。

魚溜（図60　図版24ｆ・ｇ）　BA05・06区に位置する。SG1池の中央最深部に設置される。一辺２ｍの方形を呈する。魚溜の上面の標高は0.2m、底面の標高は－0.4mで、深さ0.6mを測る。横板材を内側の竪杭で支える構造であり、横板は幅200㎝前後、高さ20～25㎝の板を３枚積む（図60－aa'）。杭は１辺に４本をほぼ等間隔に打つが、東辺・南辺・西辺の横板はいずれも内側に湾曲しており、竪杭を２～３本打つことで補強したものと考えられる。横板材の最上部の１枚はW18・W24等に見るように上端が風化し（同図写真）、水面から出ていたことが窺

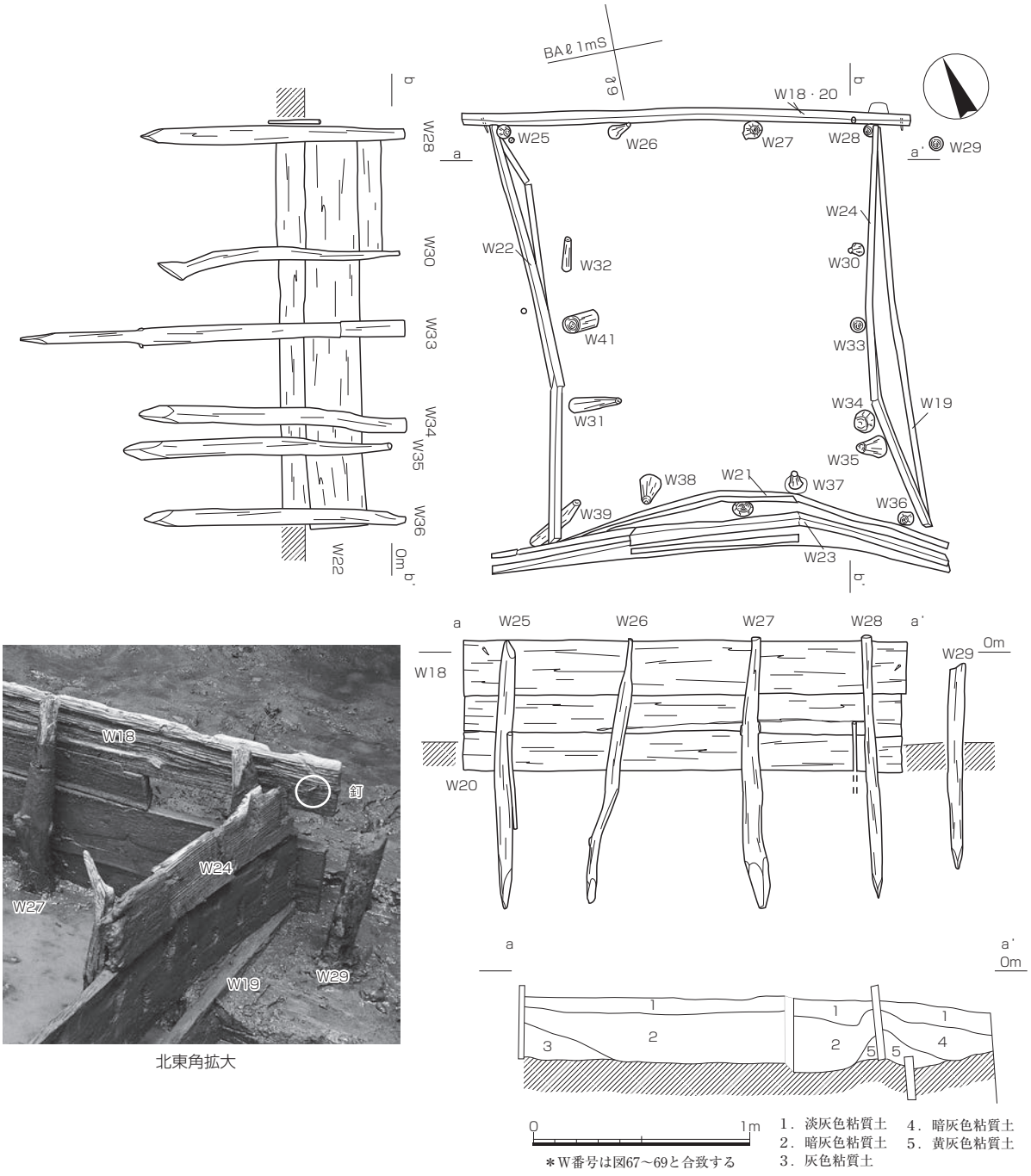


図60　SG1魚溜（縮尺1/30）

え、その水面レベルは０ｍ付近である。清掃時等にSG1池部の取水を止め、排水しても魚溜内は滞水していたと考えられる。魚溜の底面は湧水砂層に達しており、水が枯れることはなかったであろう。魚溜の構造をみると横板材の角には釘が認められ、釘止めであったことがわかる。水圧により内側に湾曲し、検出時には外れた状態であった。横板材の内側は平滑で、外側（図67参照）には、釘穴が多数穿たれている。中央付近から上向き、下向きの釘穴が等間隔に穿たれるもので、北辺上から１段目のW18をみると上列に上向き11個、下列に下向き10個を20㎝間隔で交互に施す。釘穴の多くに釘が残っており、釘の先端が側縁で認められるものあれば、認められないものもある。後者では下の板材を繋いだとは言えず板材の補強のため隠し釘を打ち込んだ可能性も考えられる。こうした釘穴の加工はすべての横板材で確認され、いずれも外面に施されている。釘穴の間隔は狭いものでは10㎝を測る（図67－W21：南辺３段目）。釘穴加工のある横板材は、前述の西杭列南辺でも確認される（図69－W47）。W47は北東面に横に一列、下向きの釘穴加工が24㎝間隔で６個看取される。W48には18～20㎝間隔の５個が認められる。こうした木材の類似した状況を考慮すると、前述の突出部についても魚溜的機能が想定される。

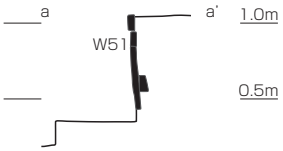
ｂ．水路

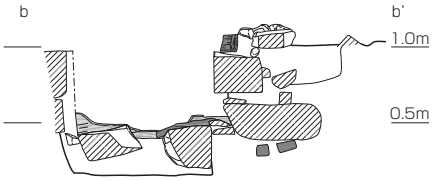
水路１（図61　図版27）　AZ04区に位置する。平面三角形を呈するSG1池部分の北東角から北東へ直線的に延びる水路である。本調査地点の東端は鹿田キャンパス敷地東端から西５ｍ程にあたるが、敷地東端に沿って、枝川が南流する。水路１はこの枝川に取りつく取水路である。本調査地点では樋門を挟んで上流側・下流側の護岸施設を検出した。水路の幅1.0～1.1m、検出面の標高は1.0m、水路底面のレベルは樋門を挟んで南北で異なり、上流側（図61－aa'断面）で0.35m、下流側で0.1ｍを測る。樋門部は幅1.0ｍを測り、標高0.15mの底面に切石二個が20㎝の間隔を開け据えられる。この並列する切石の北面に据えた樋門板材を検出した。樋門板材は幅0.8m、厚み３㎝を測り、上縁はＵ字状にくぼむ（同－bb'断面）。上端の標高は0.5m、切石よりもやや高い。また北東から南西に水圧により傾いていることが認められる。

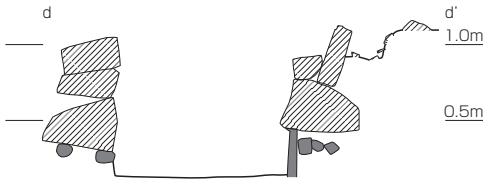
水路の護岸も樋門の南北で構造が異なる。樋門から上流側は南側護岸のみ検出しており、横板材と杭による板柵護岸である（図版27ｂ）。幅0.7～0.8m、高さ0.2ｍの横板を４段積み、竪杭で支えとする。下流側は石組護岸であり、基礎には胴木・竪杭が設置される。胴木は径あるいは幅が10㎝程度の丸木あるいは割材を使用する。長さは0.6～1.4m、ほぞや角穴などの加工や釘穴が認められ、転用材と考えられる（図69－W52～58）。竪杭の径は５～８㎝を測り、北側で３本、南側で８本検出した。南側石組では５本の胴木を隙間なく敷き並べ、二段の石を築く（図61－ee'断面）。石組は少なくとも三段以上であった（同dd'断面）と考えられる。幅20～70㎝、奥行30㎝、高さ30㎝大の切石を用い、内側に面を揃えて積む。北側では原位置を留め（図版27ｄ）、南側は乱れが看取される（図61写真）。切石積みの背面には５～20㎝大の礫・瓦を裏込めに用いている。

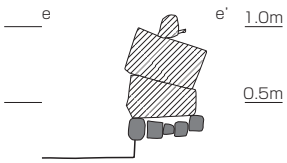
cc'断面にみるように水路の埋土は13層に分けた（図版27ｃ）。14～16層は裏込めである。水路埋土は上層（１～７層）と下層（８～13層）とに二分され、上層群が砂質土を主体とするのに対し、下層群は黒褐色粘質土を主体とする。下層群のうち８・９層には土器・瓦等の含有物が特に多い。

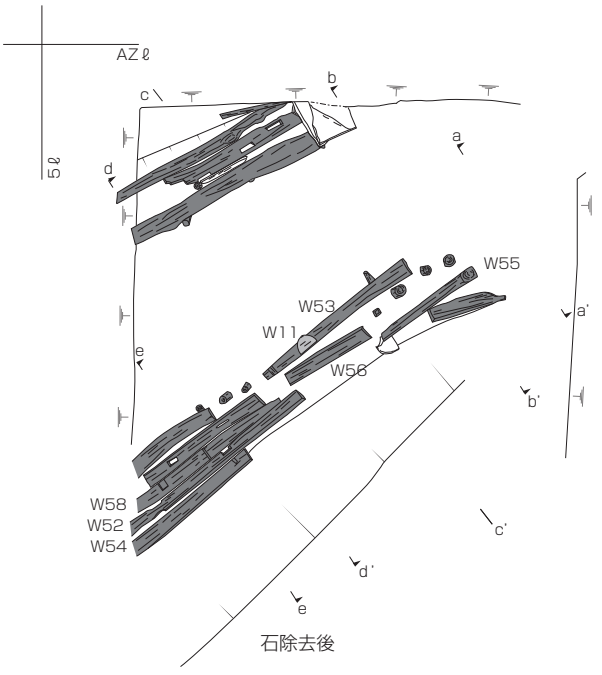
水路２（図62　図版24）　BB04・05区に位置する。平面三角形を呈するSG1池部の南東角から南東へ直線的に延びる水路である。前述の水路１と同様、キャンパスの敷地東端を南流する枝川に取りつく排水路である。前述の東護岸南端と南護岸東端から連続的に構築された石組護岸を持つ。水路の幅1.5m、検出面の標高は0.45m、水路底面の標高は北西端で－0.06m、南東端で－0.2ｍを測る。水路の南護岸は石組によるもので比較的残りが良く、竪杭で固定した胴木の上に切石を積み背面に裏込めをする構造で、石組は１段を検出した。北護岸は残りが悪く、南護岸と同様の胴木と石組の大半は残っていない。竪杭18本余の列と0.3～1.5ｍの長さの胴木５本が散在して検出された。切石は北西端で３石を確認した。杭列の北側0.2～0.7ｍの位置に竪杭と横板材による板柵護岸が長さ4.7ｍに渡り確認された。このように北側護岸は板柵と石組の両方の護岸が確認されるが、南護岸では一部で横板材を倒した後石組が施されたことが看取される。板柵護岸と石組護岸が前後関係と考えると、板柵護岸による水路



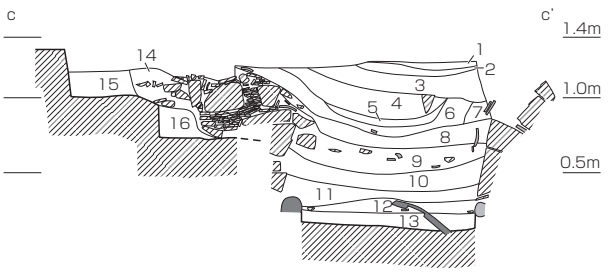








南側護岸石組（北東から）



1．灰色砂質土（炭化材、Fe）
2．灰色砂質土（Fe）
3．青灰色砂質土（炭化物、木片）
4．青灰色砂質土（炭化材）
5．青灰色砂質土（炭化材）
6．青灰色砂質土（土器、炭化材）
7．青灰色砂質土
8．茶褐色粘質土（炭化物）
9．茶褐色粘質土（瓦、土器、陶磁器）
10．黒褐色粘質土（礫）
11．黒褐色粘質土
12．黒褐色粘質土（礫）
13．黒褐色粘質土（木器）
14．灰色砂質土（瓦、土器、陶器）
15．灰色砂質土
16．青灰色砂質土（炭化材）

図61　SG1水路１（縮尺1/50）

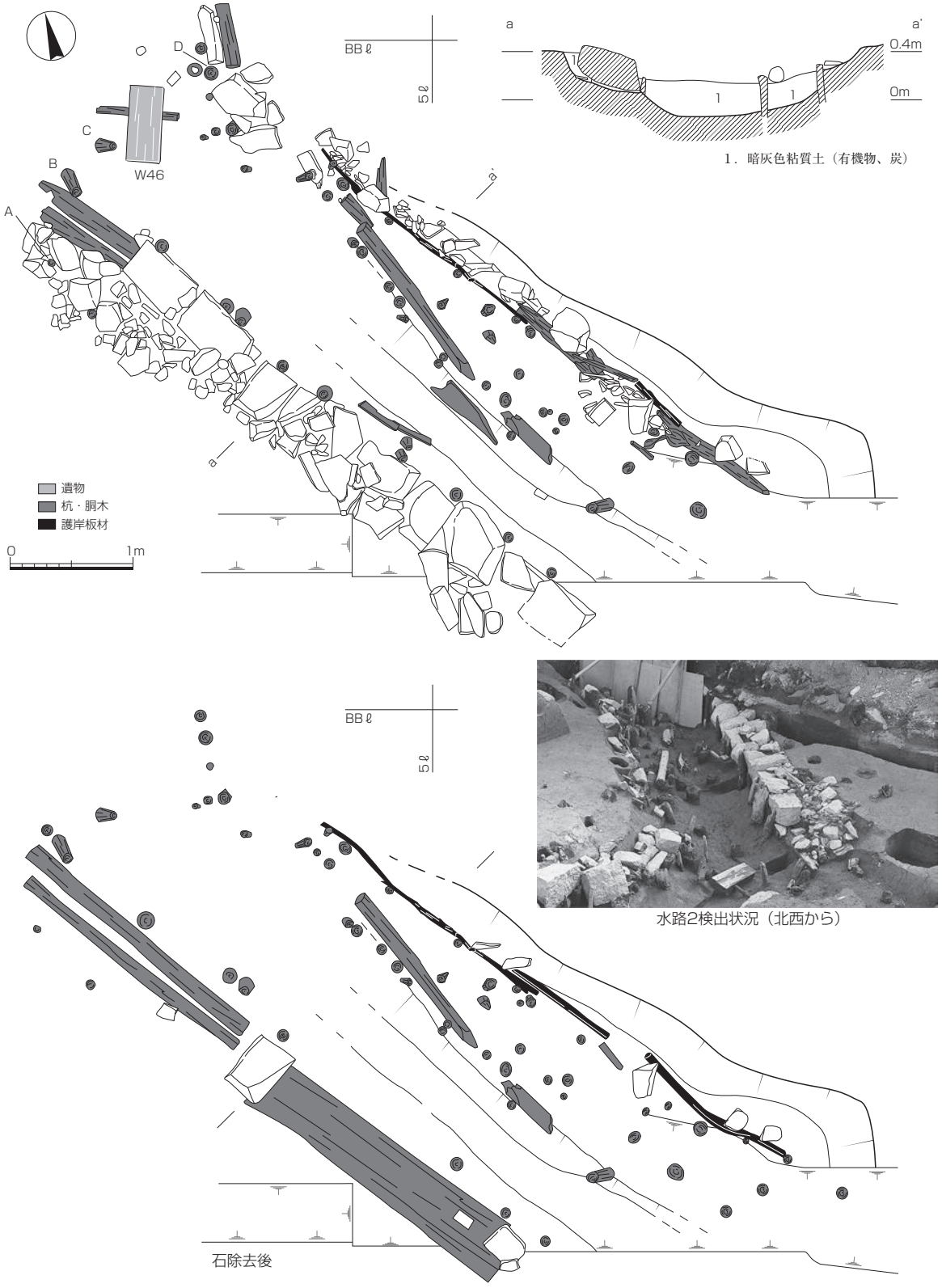
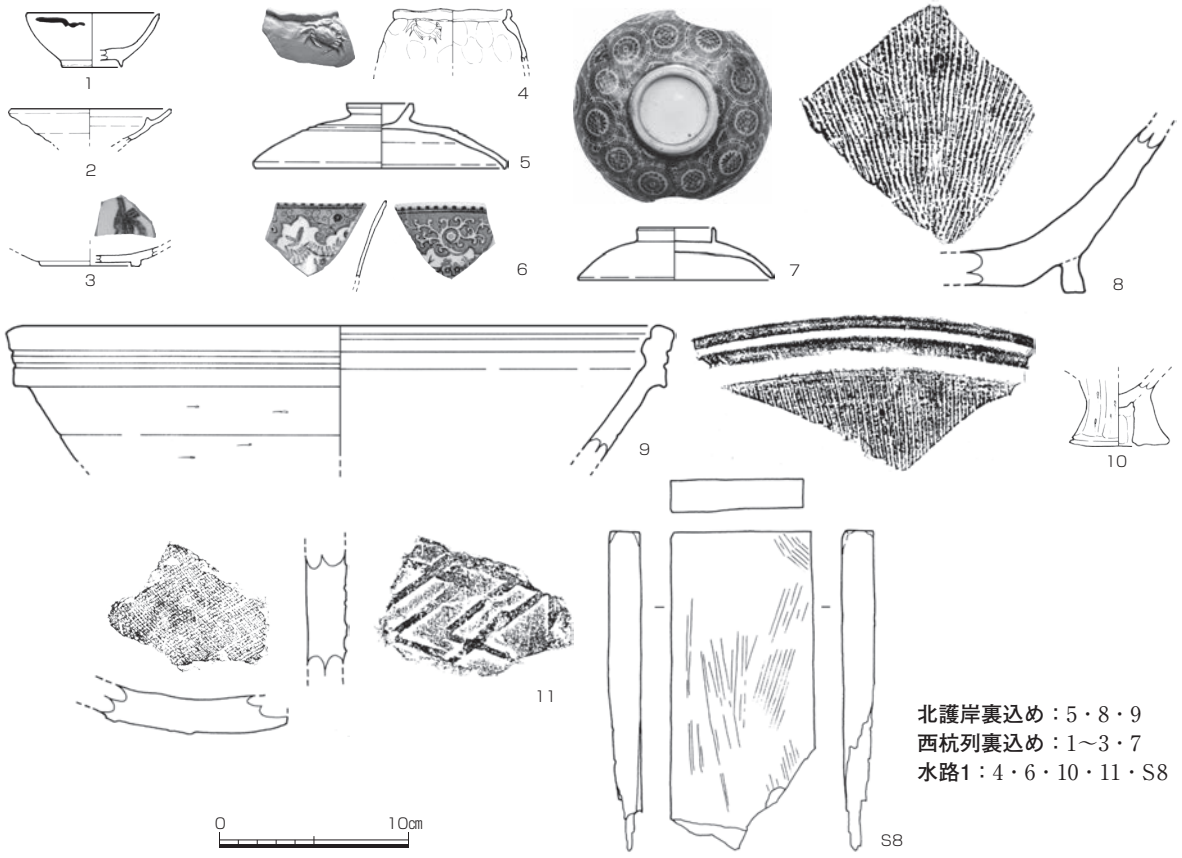


図62　SG1水路２（縮尺1/50）

の幅は1.3m程度、石組護岸時の水路幅は1.0m程度である。後者は水路１の構造・規模と合致するものであることを指摘しておきたい。また池部と水路との取りつき地点では水路に直交して竪杭４本が確認された（図62－Ａ～Ｄ）。この位置に樋門等を設置し、排水時には除去したことが想定される。検出時、樋門にあたるものは残っていなかったが、板材（図69－W47）１点が出土しており、その可能性がある。

SG1からはコンテナ（28ﾘｯﾄﾙ）換算で40箱分の土器・陶磁器・瓦・土製品・金属製品ほかと20箱分の木材・木製品が出土した。これらには護岸石組の石材は含まれない。前者40箱の出土地点の内訳は、池部から９箱、護岸（裏込めも含む）から７箱、水路１から23箱、水路２から１箱であった。水路１では樋門より外側と、石組を覆う埋土からの出土量が顕著であり、取水元となる水路から土砂とともに多くの遺物が流れ込み、樋門周辺に集中したことが想定される。一方、排水側の水路２や、池部からは比較的遺物量は少なく、池を浚えながら利用していたことが窺われる。

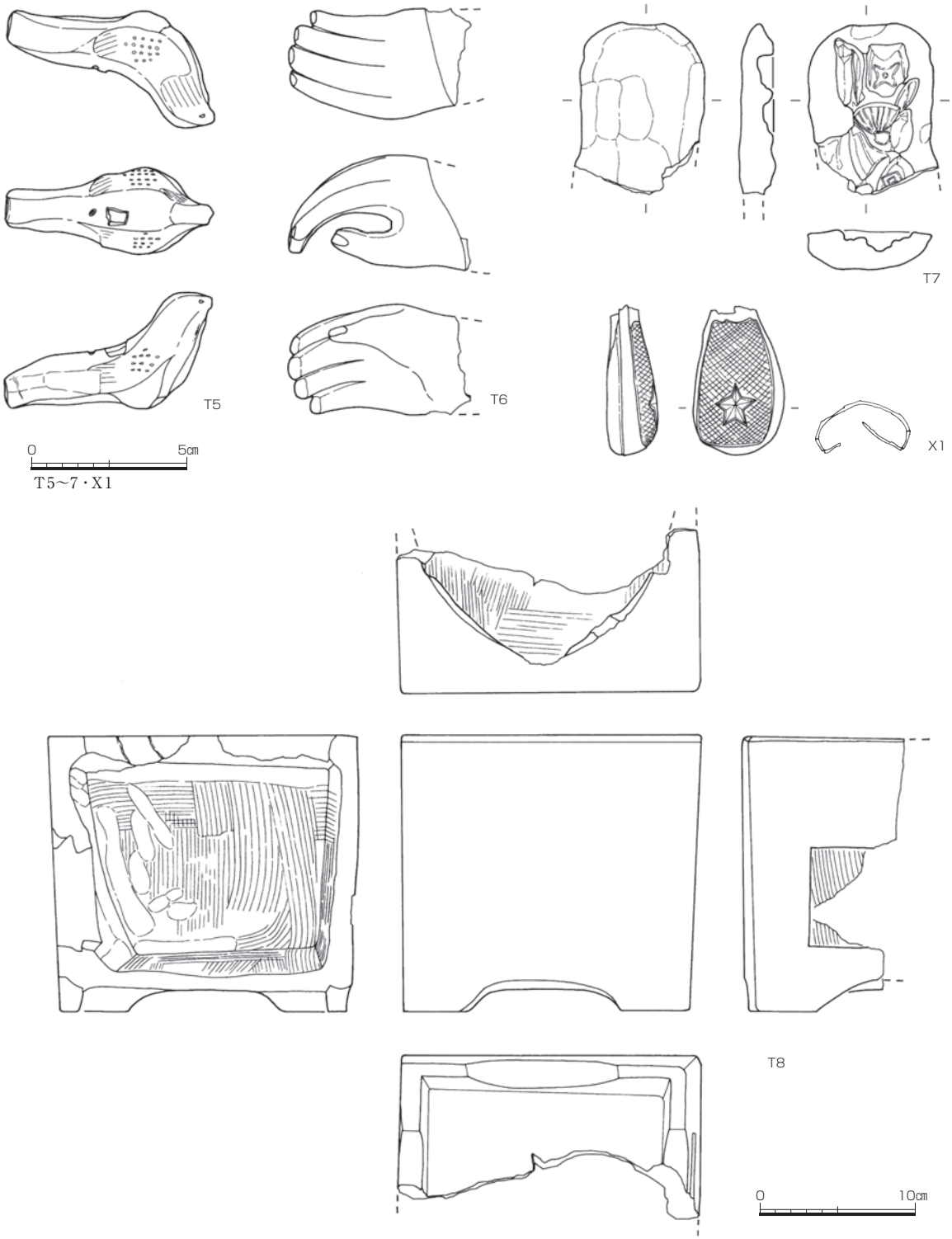


番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	特徴	色調	胎土
1	肥前磁器　紅猪口	6.8	3	2.8	底4/9	内外面とも施釉、畳付は露胎、藍色で文様描く	胎：灰白　釉：灰	緻密
2	鉄釉陶器　灯明皿	8.4	－	－	口1/6	内外面ともナデ	胎：灰　釉：極暗赤褐	緻密
3	灰釉陶器　皿	－	5	－	底1/2	削り出し高台、高台部は露胎。内底に飴釉で文様。	文様：にぶい褐	緻密
4	土師器　急須	6	－	－	口1/4	外面に蟹の意匠を貼付､口縁は受口状。煎茶用急須。	橙	きめ細かい
5	灰釉陶器　蓋	13	－	3.4	口1/1	外面に２条の凹線、内面頂部のみ露胎。	胎：灰白　釉：灰	密
6	磁器染付　椀	－	－	－	－	内外面染付（型紙刷、合成コバルト）	胎：灰白	緻密
7	磁器染付　蓋	10	3.9	2.7	底1/1、口2/3	内外面染付（型紙刷、合成コバルト）	胎：白　釉：透明	緻密
8	備前焼　擂鉢	－	－	－	－	スリ目密、外面ナデ、高台あり	暗赤褐	径 0.5 ～ 1㎜の 長石・石英を２％
9	関西系　擂鉢	34	－	－	口1/6	スリ目密、外面ケズリ、ロクロ時計回り、明石産か	にぶい赤	径1㎜の長石・石英を２％
10	弥生土器　製塩土器	－	5	－	底1/2	内：ナデ、外：篦ケズリ、脚内：オサエ	暗褐／黒褐	細砂

番号	器種	残存長：cm	残存幅：cm	残存厚：cm	特徴	色調	胎土
11	平瓦	7.5	10.3	2.1	凹：布目痕、凸：格子目タタキ	凹：灰　凸：灰	微砂

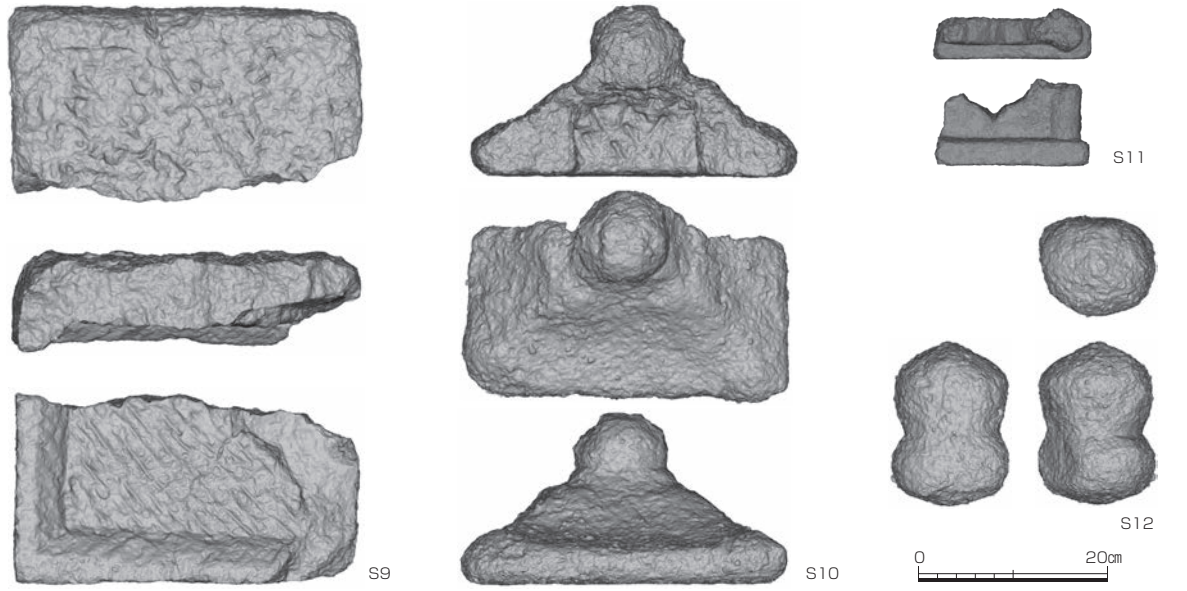
番号	器種	残存長：cm	残存幅：cm	残存厚：cm	重量：g	石材	特徴
S8	砥石	16.7	7.5	1.7	359.7	粘板岩	下端欠損、砥面は1面

図63　SG1出土遺物１－土器・陶磁器・瓦・石器－（縮尺1/4）



番号	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量 (g)	特徴	色調	胎土
T5	鳩笛	6.6	2.8	3.7	24.3	土製、羽毛表現あり、顔料なし、尾の先端と背中に孔。完形	浅黄橙	きめ細かい
T6	仏像？	(5.8)	(3.6)	3.5	54.7	陶製、右手	極暗褐	緻密
T7	鋳型	5.4	3.9	1.2	22.3	土製、被熱痕なし、扇を持って踊る動物の意匠(猿か)	灰黄	きめ細かい
T8	焜炉	10.2	19.2	17.6	1849.5	土製角型焜炉。1/2残。上面は五徳等の渡しの剥離痕あり。上縁に煤。燃焼部は二重構造になったものか。	橙	きめ細かい
X1	柄頭	4.8	2.8	0.1	6.5	ゴム製、背面にも同様の意匠		

図64　SG1出土遺物２　－土製品ほか－（縮尺1/2・1/4）



番号	器種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量（g）		石材	特徴
S9	灯籠	（18.6）	（36.2）	9.3	6880	—	豊島石	基部か、上面に剥離痕あり、内側刳り貫き、縁に斜交して平行する浅い溝を作出
S10	灯籠	18.7	34.1	21.7	5840	完残	豊島石	頂部、内部刳り貫き、二つに分割
S11	灯籠	（8.6）	（15.9）	2.2	488	—	豊島石	中央部にスカシ孔
S12	五輪塔	10	11.8	16.6	2110	完残	豊島石	背面はほぼ未加工、塔頂部

図65　SG1出土遺物３－石製品オルソ図－（縮尺1/8）

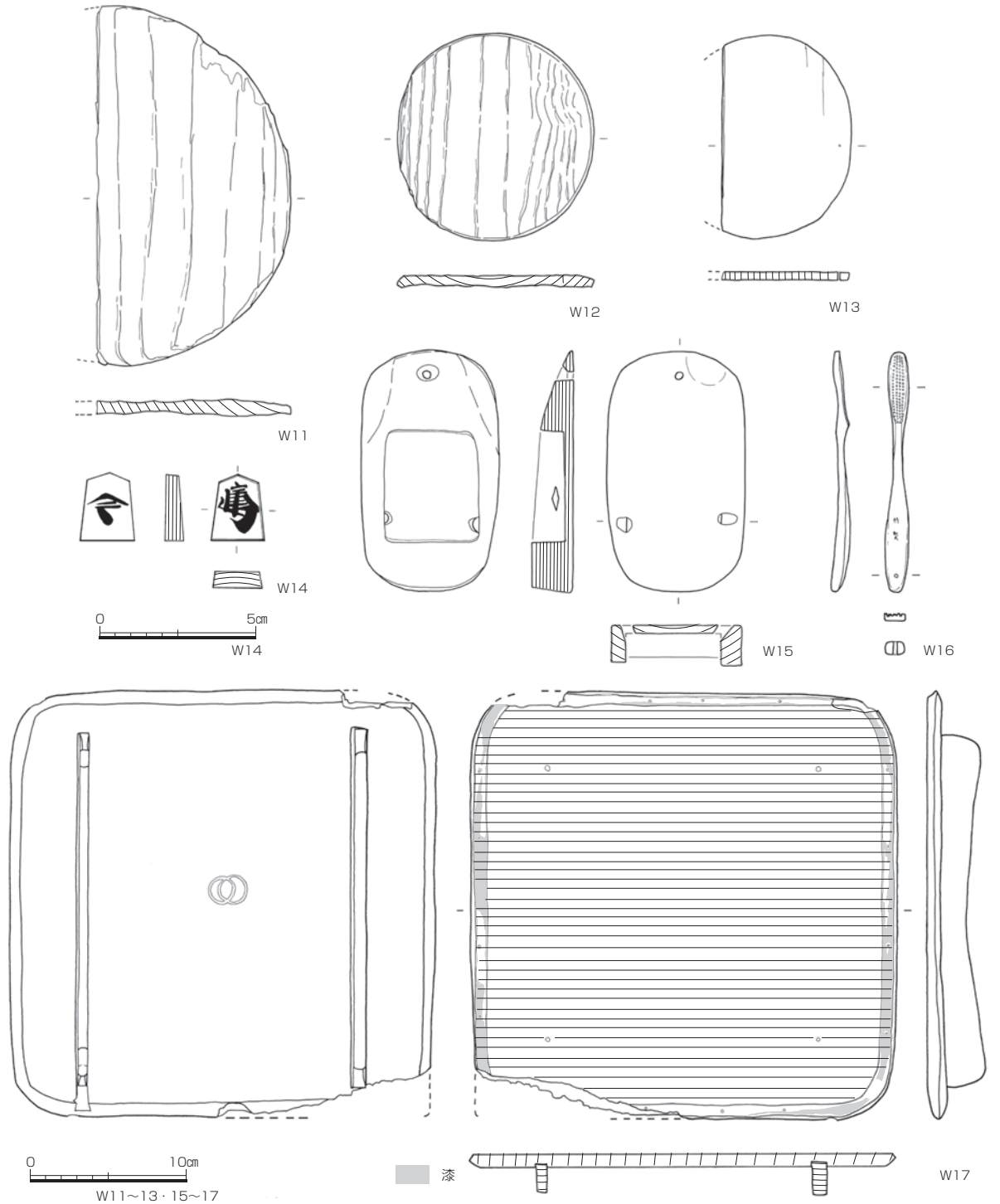
土器・陶磁器（図63）　肥前磁器・陶器・土師器・備前焼等のほか、瓦、弥生土器が含まれる。図63に示した遺物の時期は弥生時代後期～近代まで時期幅がある。弥生時代後期の製塩土器（同－10）、中世の平瓦（同－11）を除くと、江戸時代後期（同－１・５・８・９）あるいは江戸後期～近代（同－２～４、６・７）のものである。なかには肥前磁器紅猪口（同－１）や蟹の意匠のある急須（同－４）など、通常の民家ではみられない化粧道具や茶器が出土している。これらの遺物は造園時期～廃絶時期の幅を示すものであろう。

土製品・その他（図64）　Ｔ５は土製の鳩笛である。鳩の背中に１孔、尾の先に１孔が穿たれ、顔や羽毛が細かく表現される。江戸後期頃か[1)]。Ｔ６は陶製で仏像等の右手部である。Ｔ７は土製鋳型で扁平な隅丸方形状を呈する。扇を手にした和装の猿が刻まれており､「三番叟」の意匠と考えられる。Ｔ８は土師質の角形焜炉と考えられる。出土した破片の上面の一部に煤が認められる以外は被熱痕跡がなく、漏斗式の二重構造であるものと思われる。江戸後期以降近代に比定される[2)]。Ｘ１はゴム製の柄頭である。大正期以降と考えられる。

石器・石製品（図63・65）　図63－Ｓ８は粘板岩製の砥石で、砥面は一面確認された。東護岸石組の裏込めで検出した。Ｓ９～12はいずれも豊島石を材とする。S10は北護岸の石段の脇で、Ｓ11は瓦敷き中で検出された。Ｓ９と同じく石灯籠の存在を示す。S12は五輪塔の空風輪と考えられる。

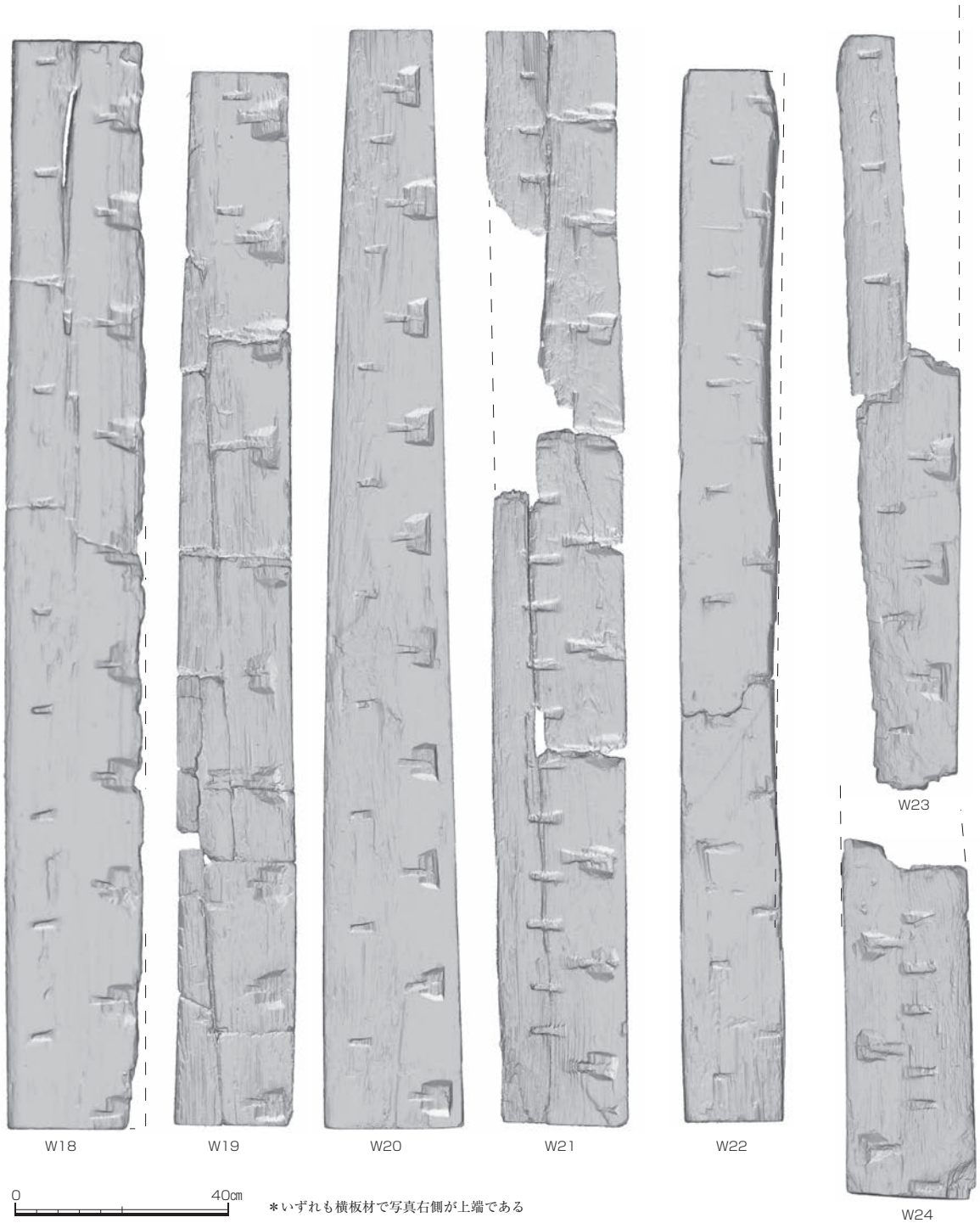
木製品（図66～69）　図66に木製品、図67～69に護岸に用いられた板材・杭・胴木の類を掲載した。曲物は池部でヒノキ製の底板（W12）、水路１でスギ製の底板（W11）・蓋（W13）が出土した。池部からは、将棋の駒（W14）・下駄（W15）・脚付盆（W17）が検出された。W14は「書き駒」で草書体で桂馬を描く。W15は無歯で透かし孔が施される。一部に朱彩が認められる。W17は方形を呈し、表面に朱、裏面及び別つくりの脚部には黒漆が施される。表面の縁部が欠失しているが、懐石膳と考えられる。W16は北護岸の検出中に出土した竹製の歯ブラシである。

図67－W18～24および図68－W25～41はいずれも魚溜を構成する木材である（図60参照）。W18～18は横板材で、前述したように図示している表面が魚溜の外側にあたり、右側が上端である。すべてアカマツを用い、図の裏面、つまり魚溜の内側には影響がないように、釘穴を上下２列に多数穿つ。W19・20のように下端側が狭まる形状の材があり、転用材を用いた可能性も考えられる。W25～41は丸木の先端を加工した杭である。W29・33・



番号	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	樹種	木取り	特徴
W11	曲物底板	22.8	12.2	0.8	スギ	板目	側面目釘孔なし、表裏面凹凸著しい
W12	曲物底板	13.1	12.3	0.7	ヒノキ	板目	側面目釘孔なし、側面上下は面取りにより先端がとがる、一枚づくり、表裏面凹凸著しい
W13	曲物蓋	12.9	8	0.5	スギ	柾目	側面目釘孔なし、径0.1cmの紐通し孔あり、一枚づくり、表裏面平滑
W14	将棋駒	2.1	1.7	0.6	エゴノキ属	割材	表面「桂馬」、裏面「金」、いずれも草書体、木地の表面に直接漆で駒字を描いた「書き駒」
W15	下駄	15.2	8.7	2.6	スギ	板目	無歯、両側面にはそれぞれ菱形の透孔が穿たれる、透孔部分に朱彩残存、鼻緒孔のうち前壺は中軸やや右に位置することから左足用と判断
W16	歯ブラシ	15.2	1.5	0.9	タケ		竹製、ブラシ部は欠損、柄に「特製」の刻書
W17	盆	27.1	26.9	0.8	ヒノキ	柾目	表面には縁部が接合されていたとみられるが欠損、縁部は各辺4カ所の木製目釘で固定、表面は縁部接合以前に浅いケビキ状の溝を施した後全面朱彩を施し、縁部接合後に裏面もあわせて黒漆を塗布、脚部は別づくりで、それぞれ2カ所の鉄目釘で盆に固定、釘周囲にアタリ痕、裏面中央には輪違い紋の刻印
	脚部				ヒノキ	板目	

図66　SG1出土遺物４ －木製品－（縮尺1/2・1/4）



番号	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	樹種	木取り	特徴
W18	板材	203.3	25.6	2.4	アカマツ	板目	完形。上下方向に釘、
W19	板材	197.3	21.2	3.3	アカマツ	板目	完形。上下方向に釘、他個体からの貫入なし。先端に向かって片側がすぼまる形態(転用か)、16点接合
W20	板材	205.4	23	4.1	アカマツ	板目	完形。上下方向に釘、他個体からの貫入なし。先端に向かって片側がすぼまる形態(転用か)
W21	板材	203	24.2	2.2	アカマツ	柾目	木枠南辺上から1枚目の西端の破片、略完形。上下方向に釘、他個体からの貫入なし
W22	板材	196.6	17.8	3	アカマツ	板目	上下方向に釘、他個体からの貫入なし。片側のみ他個体に直接打ち付けか
W23	板材	141.3	19.2	2.8	アカマツ	板目	上下方向に釘、他個体からの貫入なし
W24	板材	70.3	23.2	2.6	アカマツ	板目	上下方向に釘、他個体からの貫入なし

図67　SG1出土遺物５－木製品オルソ図－（縮尺1/8）

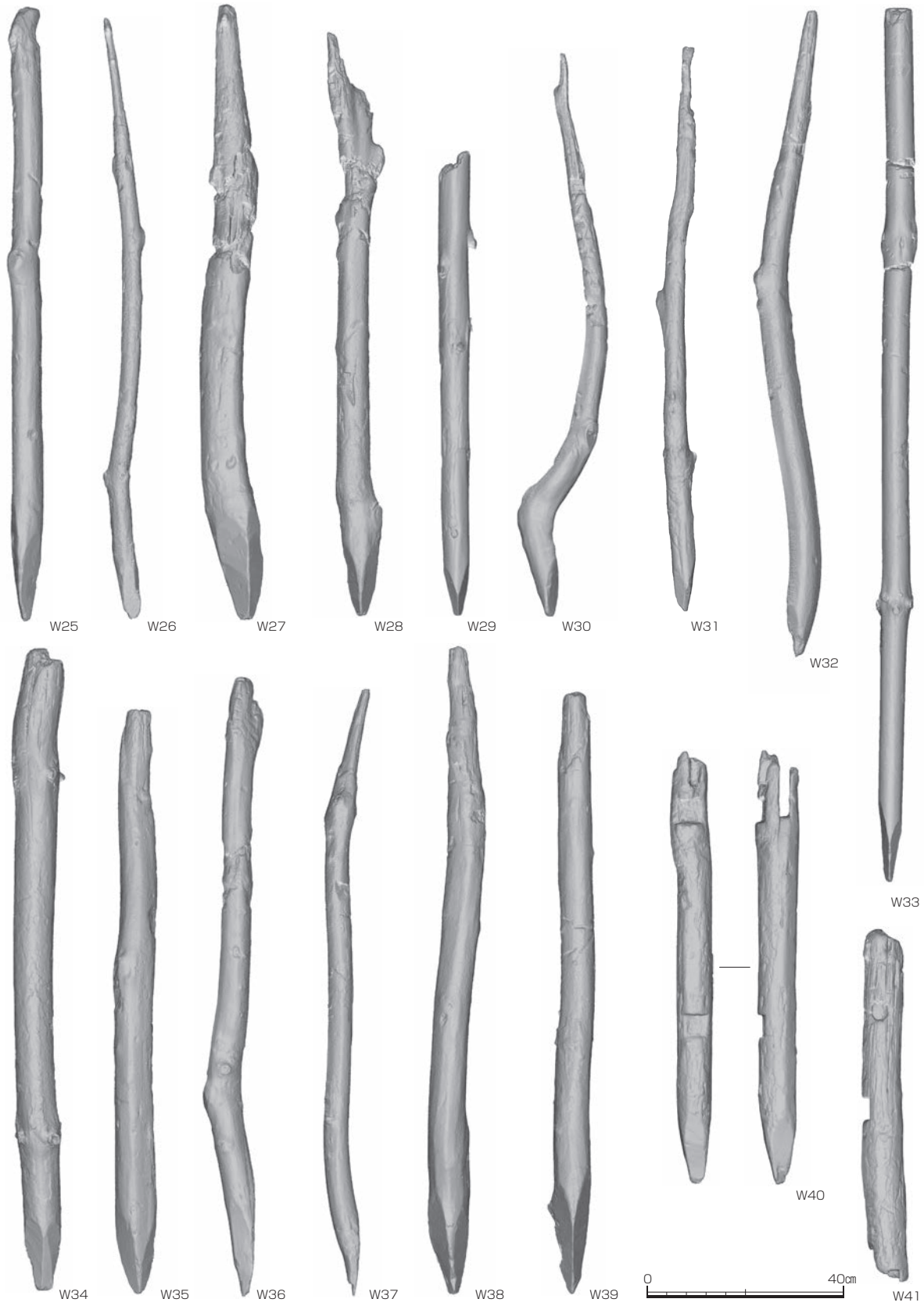


図68　SG1出土遺物６－木製品オルソ図－（縮尺1/8）

W42～45：南護岸　W46：水路2　W47～50：西杭列　W51～58：水路1

図69　SG1出土遺物７－木製品オルソ図－（縮尺1/8）

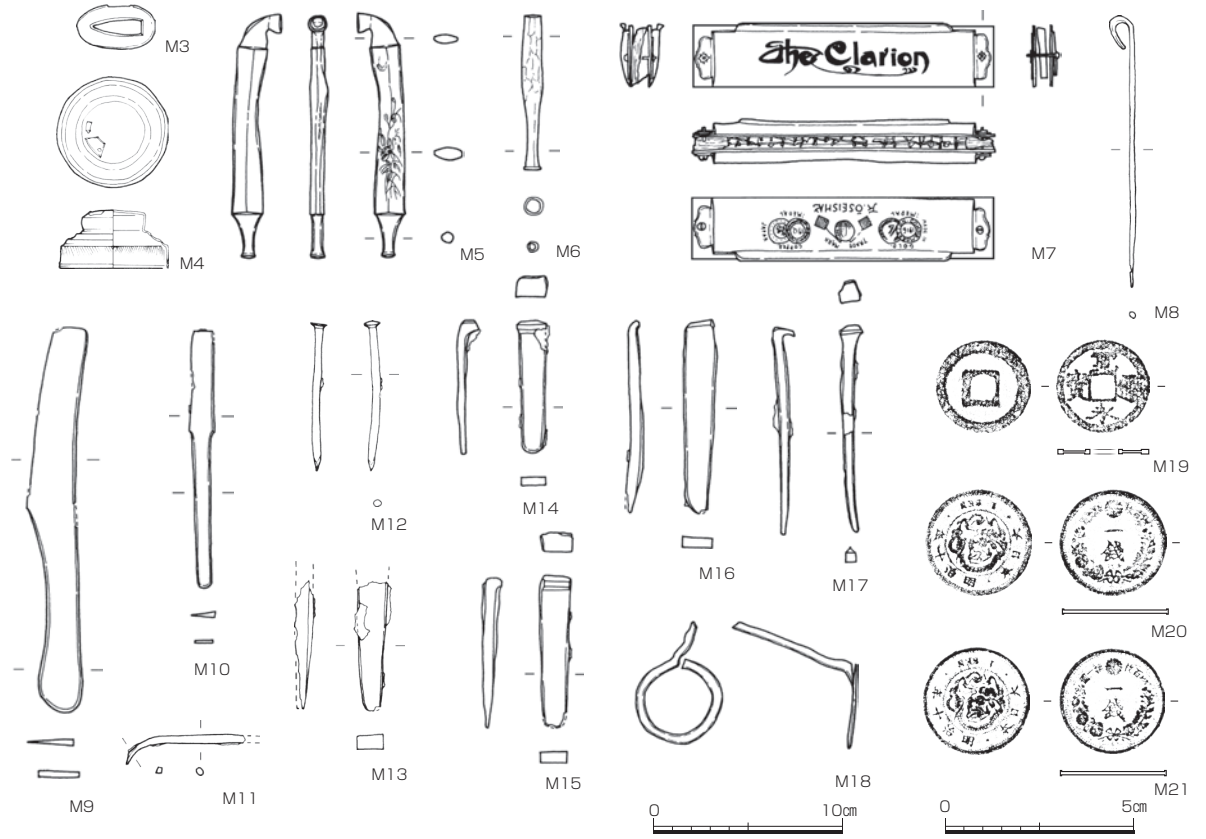
図68・69観察表

番号	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	樹種	木取り	特徴
W25	杭	123.0	6.0	5.3	クリ	丸木	先端3面
W26	杭	122.0	3.8	4.4	クリ	丸木	先端3面ケズリで1面残し。計4面
W27	杭	124.9	8.7	8.2	クリ	丸木	先端3面。ただし1面ケズリ残しで4面
W28	杭	118.6	6.2	6.6	クリ	丸木	先端3面
W29	杭	94.3	6.0	5.5	アカマツ	丸木	先端4面。節残る
W30	杭	114.1	4.6	4.4	クリ	丸木	先端1面。ただし1面ケズリ残しで2面
W31	杭	114.7	4.6	4.1	クリ	丸木	先端2面
W32	杭	131.0	6.6	5.4	クリ	丸木	先端3面
W33	杭	177.4	5.6	5.8	アカマツ	丸木	先端3面
W34	杭	130.2	7.7	7.3	アカマツ	丸木	先端4面。専用杭。節残る
W35	杭	118.7	7.9	6.5	クリ	丸木	先端3面
W36	杭	125.5	5.8	5.6	クリ	丸木	先端3面
W37	杭	123.2	4.8	4.8	クリ	丸木	先端3面
W38	杭	131.5	7.5	7.7	クリ	丸木	先端3面
W39	杭	122.0	6.5	7.2	クリ	丸木	先端3面
W40	杭	87.7	6.9	7.8	クリ	丸木	先端3面。転用
W41	杭	71.5	7.5	6.9	クリ	丸木	形態的に胴木の可能性高い。杭だとすれば胴木の転用か
W42	胴木	94.0	11.5	9.7	アカマツ	丸木	上下とも欠損。浅いほぞ状の加工あり
W43	胴木	88.8	11.3	11.4	アカマツ	丸木	上下とも欠損。ほぞ状の加工あり
W44	胴木	58.6	10.2	7.0	アカマツ	丸木	転用、ほぞ加工あり
W45	杭	33.2	4.6	4.8	アカマツ	丸木	先端3面
W46	板材	59.9	22.2	0.93	スギ	板目	板材。両面とも平滑
W47	板材	155.6	47.9	2.8	スギ	追柾目	一方向から釘をうち、鎹により2枚の板(別材)を連結。釘打ち箇所には一文字の木製被せ。反対側に釘貫入なし
W48	板材	88.9	21.1	2.1	アカマツ	板目	1方向にのみ釘、上下端か。他個体からの貫入なし
W49	杭	62.7	6.0	4.9	クリ	丸木	先端丸く成形
W50	杭	173.8	5.5	4.8	クリ	丸木	先端3面
W51	板材	123.1	35.3	3.5	スギ	板目	樋門東側南側板の一部。一方向から釘、鎹遺存。鎹は両面に存在。釘打ち箇所には一文字の木製被せ。反対側に釘貫入なし
W52	胴木	118.1	7.2	8.6	クリ	丸木	転用
W53	胴木	111.1	10.2	8.4	クリ	丸木	転用か。1カ所切り欠き
W54	胴木	94.0	9.0	6.0	クリ	丸木	転用
W55	胴木	70.9	6.8	5.9	コナラ属アカガシ亜属	丸木	形状は杭。杭を転用か
W56	胴木	64.5	8.8	4.4	アカマツ	割材	襖の敷居部を転用
W57	胴木	51.0	9.4	10.0	アカマツ	割材	転用。各所に釘孔あり
W58	胴木	43.4	8.3	7.5	スギ	半割材	転用

34がアカマツである以外はクリを用いている。杭は魚溜の一辺に対し原則４本を打って留めたもので、W33・34は東辺に変則的に打たれた杭と考えられる。構築時はクリ杭を使用していたが、補強等のため、加えて打った杭はアカマツであったとみられる。同様に西辺中央のW41も変則的な位置にあり、こちらは他の多くの杭と同じくクリを用いてはいるが、ほぞ穴加工が認められるなど明らかに転用材であり、これも補強のために後から加えられた杭と考えられる。

図69には魚溜以外の地点の材を掲載した。W42～44は南護岸の石組基礎の胴木、W45は杭である。いずれもアカマツを材とする。W47～50は西杭列を構成する横板材（W47・48）とそれらを留める杭（W49・50）である。W47・48に見られる釘穴を上下２列に穿つ点、図の裏面は平滑で釘の痕跡が認められない特徴は、前述の魚溜横板材と同様である。ただW47はスギの板を２枚、鎹で連結して繋いだもので、W48および魚溜の横板材がいずれもアカマツである点で異なる。W47は水路２で検出した。池部と水路２との連結地点で出土し、樋門材の可能性が考えられる。W51～58は水路１で検出した横板材（W51）と杭（W52～58）である。W51は水路１樋門より上流側の護岸横板材で、スギを材とし片面に釘穴を施す点、鎹を用いる点は上述のW47と類似する。W52～58は水路１南側護岸基礎の胴木である。丸木・割材・半割材が見られ、樹種もクリ・アカマツ・スギ等が混在する。胴木の形状も様々であり、転用材と考えられる。

金属製品（図70）　用途不明も含め19点を掲載した。池部より刀鍔（Ｍ３）・煙管（Ｍ５）・釘（M13・17）・銅銭（M19～21）が出土した。Ｍ５は刀豆型延煙管で完形である。胴部に草花文様が施される。銅銭は２種あり、寛永通宝（M19）と竜一銭銅貨（M20・21）である。前者は1656（明暦２）年鋳造、後者は「明治10年」銘が認められ、1877（明治10）年鋳造である。石組護岸から煙管（Ｍ６）・小刀（Ｍ９）・鎹（M11）・釘（M12）・不明金具（Ｍ４）が出土した。Ｍ６は石州煙管の吸い口である。水路１からハーモニカ（Ｍ７）・小刀（M10）・釘（M14～16）・不明製品（Ｍ８）が出土した。Ｍ７は鶯声社製ハーモニカで、裏面に社名と1912・1916の銘、表面の「The clarion」は製品名であろう。鶯声社によるハーモニカ製造は1910（明治43）年以降1917（大正６）年である。M



番号	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量（g）	特徴
M3	刀鍔	2.2	4	0.05	2.2	青銅製、側面刻み目あり
M4	金具	2.8	3	0.1	17	青銅製、用途不明、頂部に型持孔あり
M5	煙管	12.8	1.5	1.4	26.3	延煙管、胴部片面に草木文様・浮文は銀製か
M6	煙管	8.2	1.1	0.1	12.2	石州煙管、青銅製の吸口部、羅宇遺存せず、鍛打痕顕著、板綴じ目あり
M7	ハーモニカ	3.3	15.8	2.3	137.1	銅製複音ハーモニカ、鷲声社製、1912(大正元)年～1916(大正5)年の製作か
M8	不明	14.2	0.3	0.3	2.9	先端折り曲げ
M9	小刀	20.3	2.5	0.3	64.2	柄部に木質なし、片刃
M10	小刀	13.5	1.3	0.2	14.5	両関、柄部に木質なし
M11	鎹	6.2	0.4	0.4	3.9	木質みられず、先端長方形
M12	釘	7.8	0.5	0.5	4.6	洋釘、わずかに反る
M13	釘	6.7	1.4	0.8	16.6	和釘、上部欠損
M14	釘	6.9	1.3	0.4	19.2	和釘、端面方形
M15	釘	8	1.4	0.5	28.3	和釘、端面方形、折り曲げ弱い
M16	釘	10.1	1.6	0.5	24.9	和釘、折り曲げほぼなし
M17	釘	10.8	0.7	0.5	16.7	和釘、わずかに鍛打痕あり
M18	不明	4.6	4.6	0.2	10	青銅製、用途不明、一本作り
M19	銅銭	2.4	2.4	0.1	1.7	古寛永「鳥越銭」、明暦2(1656)年鋳造、裏面無文、紐孔一辺0.65cm
M20	銅銭	2.8	2.8	0.1	5.8	明治十年銘、竜一銭銅貨、竜の胴部は角ウロコ
M21	銅銭	2.8	2.8	0.1	5.8	明治十年銘、竜一銭銅貨、竜の胴部は角ウロコ

図70　SG1出土遺物８－金属製品－（縮尺1/4・1/2）

６は銘より1912（大正元）年～1916（大正５）年頃製造と考えられる。

以上、本遺構の出土遺物について記した。時期が判明する遺物では江戸後期～近代（大正５年）の幅が示される。池部と護岸には確実に江戸後期のものがある一方、水路１では1916年を下限とする状況である。本遺構の下限については写真資料の存在から1925（大正14）年に岡山医科大学へ土地が移管され、その後、1929（昭和４）年には消滅したことが明らかである。上限、つまり庭園の造園時期については江戸後期以降であり詳細については出土遺物からは判然としない。本遺構の時期に関しては第５章でも検討する。

註

1）岡山県教育委員会2005『久田堀ノ内遺跡』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告192)、墓83から２点の出土がある。18～19世紀の幼児埋葬墓の副葬品とされる。

2）小林謙一　2003「近世瓦質土師質火鉢・焜炉類の生産と使用－東日本を中心に－」『四国と周辺の土器Ⅱ－火鉢・焜炉類にみる流通と生活形態－』四国城下町研究会、㈶京都市埋蔵文化財研究所2007『長岡京跡・淀城跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006－23）

溝７（図71～74　図版27）

調査区南半、AZ・BA04区に位置する。北東から南西に走行する溝で、幅2.0～2.4m、長さ４ｍを検出した。前述した庭園遺構SG1の水路１の南５ｍを並走する。本遺構の東端は調査区外、西端は庭園遺構SG1に切られる。検出面の標高は1.35m、底面の標高は東端で0.5m、西端で0.45mで、検出面からの深さは0.85mを測る。断面形は、下部が幅0.4mの平底から0.2mほど立ち上がる逆台形状をなし、それより上位は緩やかに広がる椀型となる２段掘りである。西端では下部のみ確認している。

西端部には南側に板柵護岸が設置される。ちょうど断面下部の壁の護岸となる（図71－bb'断面）。幅0.5m、高さ0.05～0.1mの横板材４枚を２本の竪杭で留める構造である。板の厚みは１㎝、杭は径４㎝を測る。最上部の１枚は破損する。この板柵護岸の背後には径10㎝、長さ2.6mの丸木を４本の杭で留める胴木構造が認められた。胴木の設置レベルは標高0.75～0.9mを測る。竪杭４本は0.7～1.0m間隔で胴木を留める。胴木周辺では５～20㎝大の礫が散在していたが、庭園遺構の護岸の状況から本来石組があった可能性が考えられる。しかし竪杭は検出した４本以外になく、抜き取り痕も認められなかったことから、板柵護岸、石組護岸とも部分的に採用されていたのかもしれない。

埋土はaa'断面で17層、bb'断面で７層に分層した。aa'断面では１～９層が黒灰色～灰色砂質土、10層暗灰色粘質土、11～17層が暗灰色砂質土でいずれも埋め土であろう。bb'断面では１～４層が茶灰色粘質土で埋め土であり、５～７層は板柵護岸の裏込め土にあたる。

溝７からはコンテナ（28ﾘｯﾄﾙ）17箱の遺物が出土した。その大半は弥生時代後期の土器類であり、図示したように接合するものが多い特徴を有する。本遺構を埋め戻す際に混入したと考えられ、前述の土坑４や土坑５あるいは未知の遺構に由来する可能性がある。本来の溝の時期を示す遺物としては下駄（図73－W59）１点がある。左足用途考えられる差歯下駄である。近世以降に比定される。

本遺構の西端はSG1に切られ不明である。底面レベルがSG1より高いことから西の行方は定かでない。ただ方向や、護岸の方法など水路１との類似点を重視するならば、SG1の前身の池等への取水機能が想定される。本遺構の時期については近世以降とし、詳細は不明である。

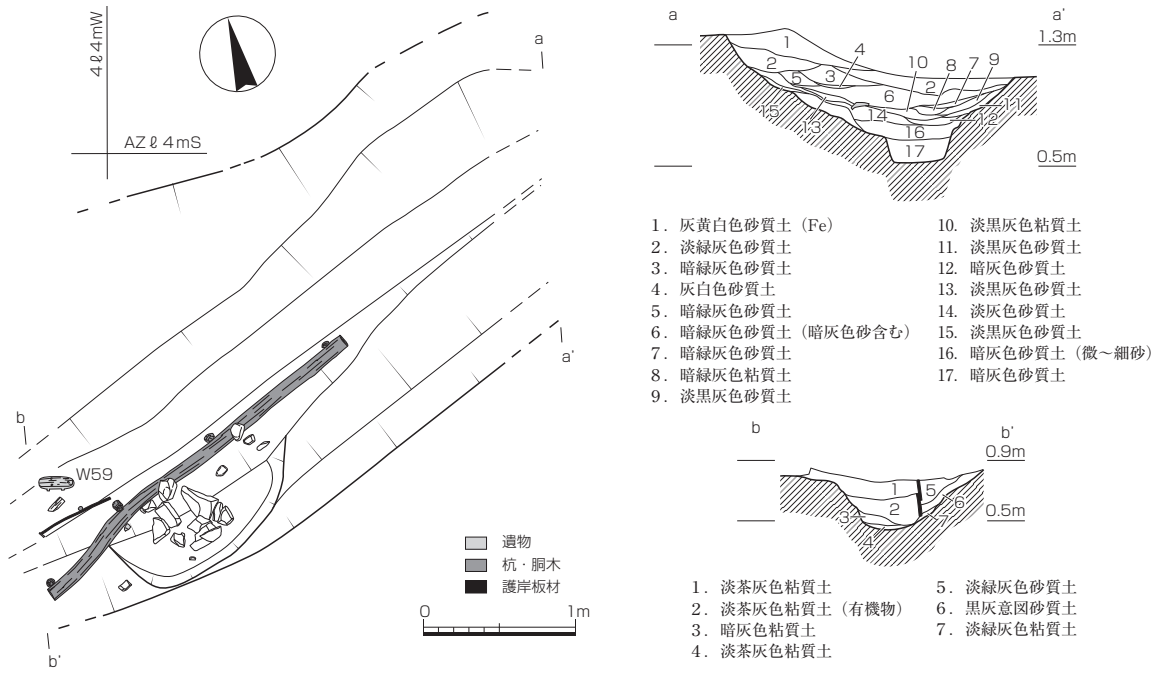
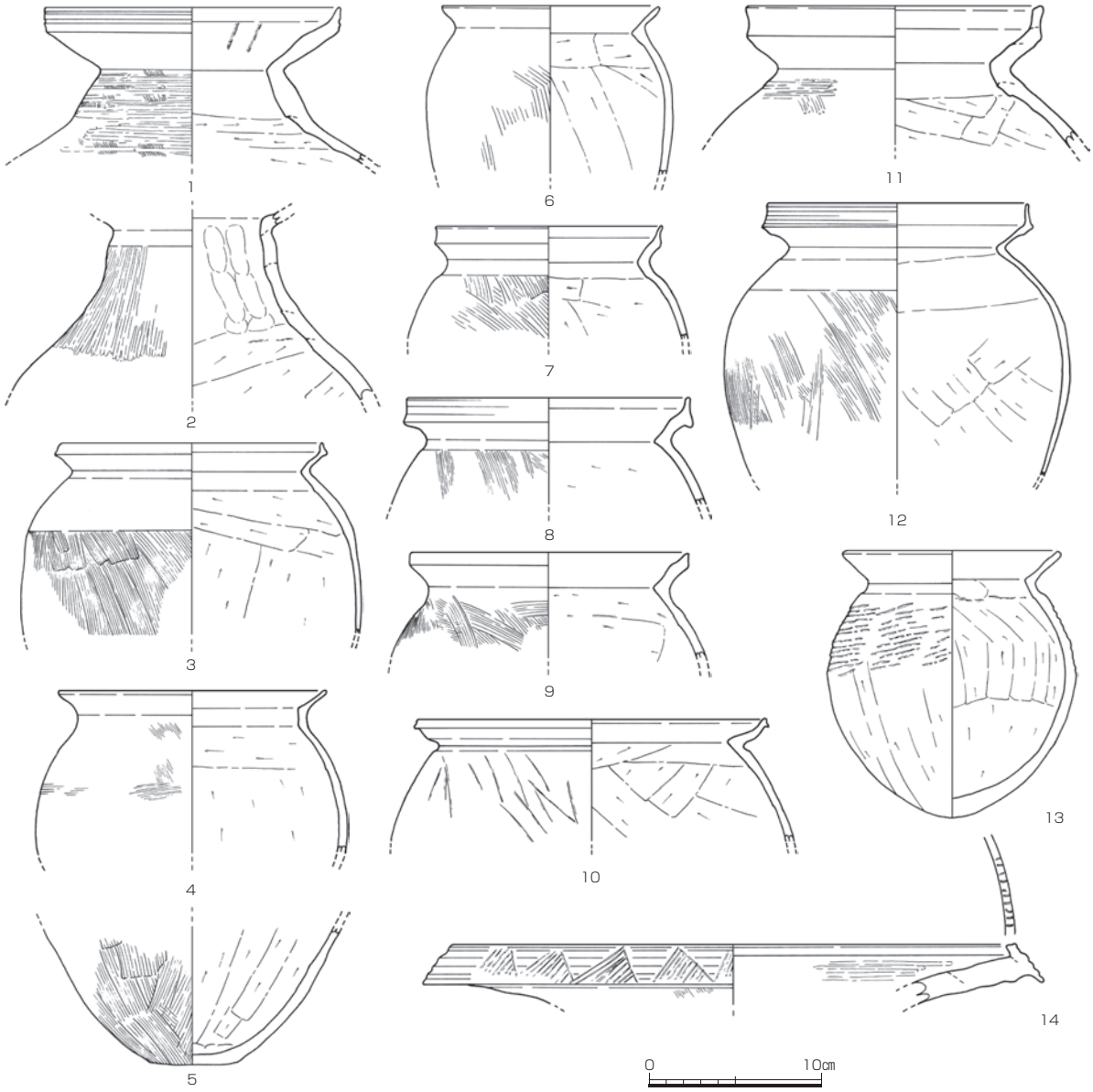
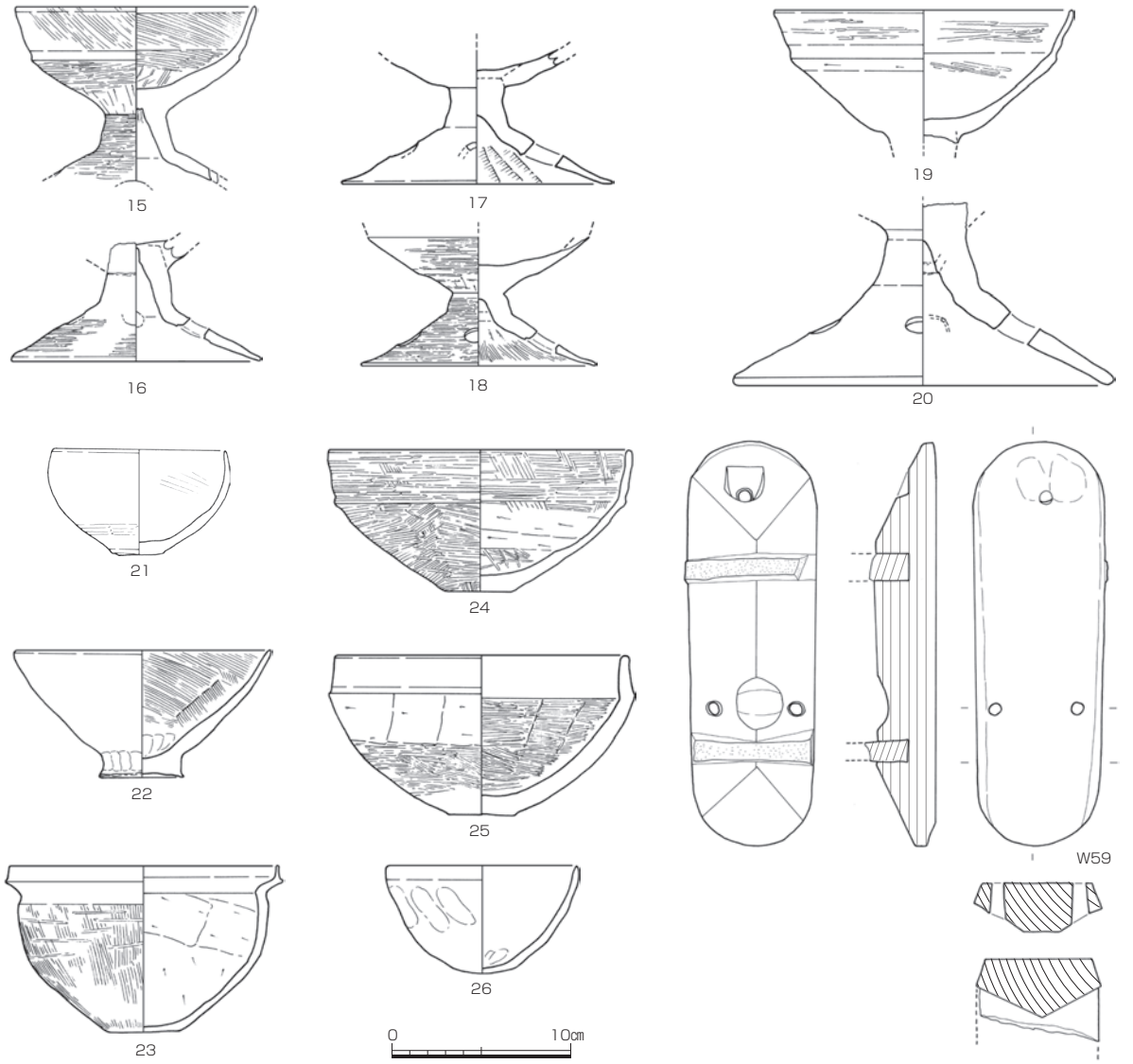


図71　溝７（縮尺1/50）



番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	特徴	色調	胎土
1	弥生土器　壺	17.0	−	−	口2/3	外：ハケのちミガキ(横位)、内：ケズリ、最上の一周のみ右方向のケズリ、口縁部沈線(2条)	灰白	角閃石をごくわずかに含む
2	弥生土器　壺	−	−	−	−	外：ミガキ(縦位)、内：体部ケズリ、頸部ナデ、頸部外傾接合か、体部破面は乾燥単位に対応	にぶい橙	長石・石英・シャモットをわずかに含む
3	弥生土器　甕	15.0	−	−	口2/5	外：ハケ、内：ケズリ、頸部付近は左上がりのケズリ、口縁部上方へつまみ上げ、外面に煤付着	にぶい黄橙	1㎜ほどの長石・石英を2%
4	弥生土器　甕	15.4	−	−	口1/1	外：ハケ(タテハケのち肩部付近ヨコハケ)、摩滅顕著、内：ケズリ、口：煤付着	浅黄	1㎜ほどの長石・石英を3%
5	弥生土器　甕	−	5	−	底1/2	外：ハケ、内：ケズリ、底：ハケ、平底、外面・底部とも煤付着、黒斑付着	褐灰	1㎜ほどの長石を1%
6	弥生土器　甕	12.7	−	−	口1/4	外：ハケ、摩滅顕著、内：ケズリ	橙	0.5㎜ほどの長石・石英をわずかに含む
7	弥生土器　甕	13.0	−	−	口2/5	外：ハケ、内：ケズリ、頸部付近は左方向へのケズリ、口縁部・外面に煤付着	にぶい橙	角閃石をごくわずかに含む
8	弥生土器　甕	16.2	−	−	口5/6	外：ハケ、内：ケズリ、頸部付近は左方向へのケズリ、口縁部下方へも垂下	灰白	1㎜ほどの砂礫、シャモットを3%
9	弥生土器　甕	16.0	−	−	口1/2	外：ハケ、内：ケズリ、左上がりのケズリ、外面のハケはアトランダム	黄灰	0.5〜1㎜ほどの長石・石英を2%
10	弥生土器　甕	20.0	−	−	−	外：板ナデ、内：ケズリ、頸部付近は右上がりのケズリ	灰白	0.5〜1㎜ほどの長石・石英を2%
11	弥生土器　甕	17.0	−	−	口2/5	外：ミガキ(縦位のち横位)、内：体部ケズリ(左上がり)、口：文様なし、垂下なし	灰黄	長石・石英を2%
12	土師器　甕	15.0	−	−	口1/4	外：ハケのちミガキ(まばら)、内：ケズリ、頸部付近は右方向へ、口縁部沈線、体部黒斑付着	黄灰	角閃石をわずかに含む
13	弥生土器　甕	12.6	−	15.2	−	外：下半ケズリ(下→上)、上半タタキ(右上がり)、内：ケズリ、底部に煤付着、体部に黒斑付着	黄灰	0.5㎜ほどの長石・石英を2%
14	弥生土器　器台	32.2	−	−	−	外：ハケのちナデ、内：ミガキ(横位)、端部に凹線文ののち鋸歯文、端部上面に半裁竹管文	にぶい黄橙	角閃石をわずかに含む

図72　溝７出土遺物１（縮尺1/4）



番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	特徴	色調	胎土
15	弥生土器　高杯	13.2	−	−	口1/2	外：脚部ミガキ、杯部ミガキ・ケズリ、口縁部ハケ、内：杯部ミガキ・ケズリ、口縁部ハケ	橙	角閃石をごくわずかに含む
16	弥生土器　高杯	−	13.8	−	底8/9	外：ミガキ(横位)、内：ナデ、円形スカシ孔4方向、脚部広い範囲に黒斑付着	にぶい黄	角閃石をごくわずかに含む
17	弥生土器　高杯	−	15	−	−	外：摩滅、内：端部付近ハケ、柱部ナデ、円形スカシ孔4方向	橙	精良、顕著な鉱物含まず
18	弥生土器　高杯	−	13	−	底1/2	外：ミガキ(横位)、杯部下面のみケズリ、内：脚部ハケ、杯部摩滅、円形スカシ孔4方向	橙	シャモット
19	弥生土器　高杯	16.6	−	−	口1/5	外：ミガキ(横位)、内：ミガキ(横位)、内外面とも摩滅著しい	橙	シャモット
20	弥生土器　高杯	−	11	−	底1/2	外：摩滅、内：ナデ、円形スカシ孔が4方向、脚部上面のうち杯部接合箇所に刻み目あり、黒斑付着	にぶい橙	シャモットをごくわずかに含む
21	弥生土器　鉢	−	2.8	5.7	底1/1	外：ミガキ(横位)、内：ハケのちナデ、底：ケズリ、平底	橙	シャモットわずかに含む
22	弥生土器　鉢	14.0	4.8	7	口1/3	外：ナデ、内：ハケ、体部黒斑付着、台付	にぶい黄橙	精良、顕著な鉱物含まず
23	弥生土器　鉢	14.8	4	9.3	口2/3	外：ハケのちミガキ(まばら)、内：ケズリ、平底、口縁端部摩滅、体部黒斑付着	橙	シャモットをごくわずかに含む
24	弥生土器　鉢	16.5	3.6	7.9	口1/2	外：ハケのちミガキ(底面も含めてミガキを充足)、内：ハケのちミガキ、中位のみケズリ	橙	シャモットをごくわずかに含む
25	弥生土器　鉢	16.4	3.6	8.8	口3/4	外：下半ミガキ(横位)、上半ケズリ、内：ミガキ(横位)、先行して板状工具で調整、底部黒斑付着	橙	角閃石をわずかに含む
26	土師器　鉢	10.5	−	5.9	口2/3	外：オサエ(指の圧痕顕著)、内：ナデ、底部付近指オサエ痕顕著、粗製、底部丸底、体部黒斑付着	にぶい褐	1㎜ほどの長石・石英を2%、角閃石

番号	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	樹種	木取り	特徴
W59	下駄（本体）	22.4	7.2	3.3	スギ	割材	差歯下駄、裏面は横断面三角形を呈し、後歯手前には円形の刳り込みを有する、鼻緒孔のうち前壺は中軸やや右に位置することから左足用と判断、前壺周辺はやや摩滅
	下駄（歯）				ハンノキ属ハンノキ節	柾目	

図73　溝７出土遺物２（縮尺1/4）

庭園遺構２（SG2）（図74～79　図版28・29）

調査区北端、AW04・05～AX05・06区に位置する。調査区東端から直線的に西へ延びる水路と、水路取りつき部から南側に向かい弧を描く平面形を呈する池部からなる。水路の北岸及び池部の北側は調査区外にあたり、また６ライン西２ｍより以西についても破壊され残っておらず、SG2の全形は不明である。水路及び池部には石組護岸が採用されており、水路とくびれ部までの東半と、弧状の池部である西半とに分けて、以下に記載する。

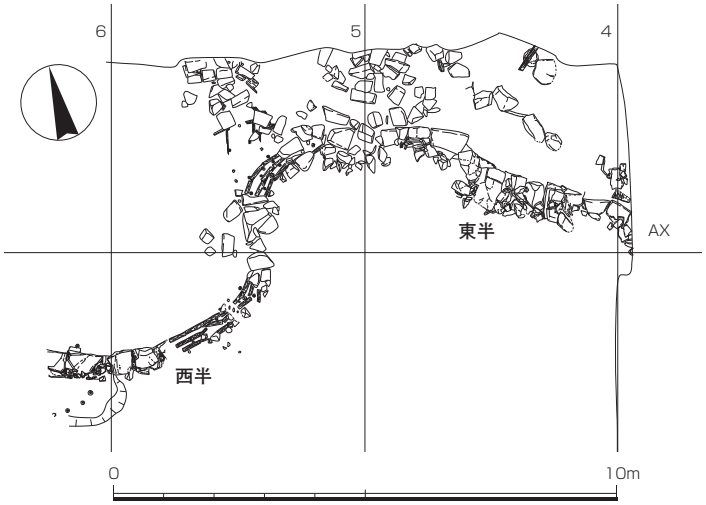
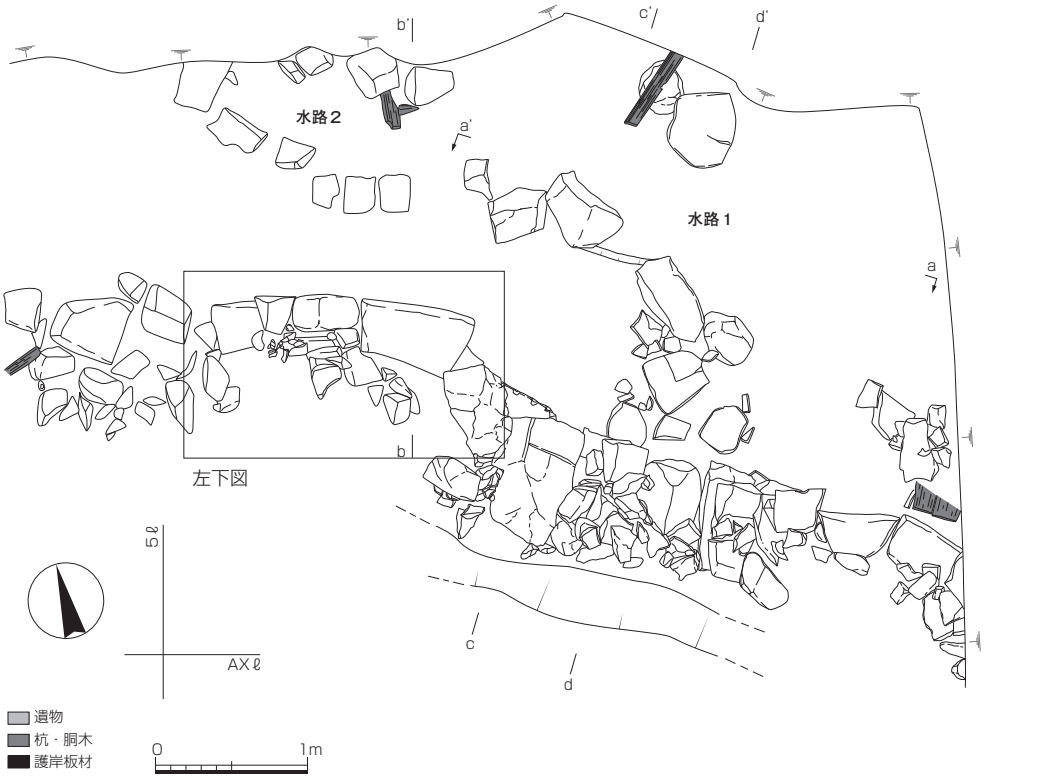
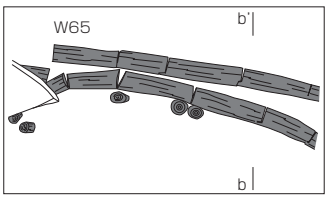


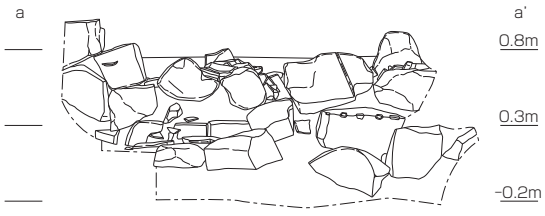
図74　SG2概要（縮尺1/150）

東半（図75・76）　調査区東端から５ライン１ｍ西までを東半として記す。水路は南





胴木平面（断面は図76）



石組護岸立面図

図75　SG2東半（縮尺1/50）

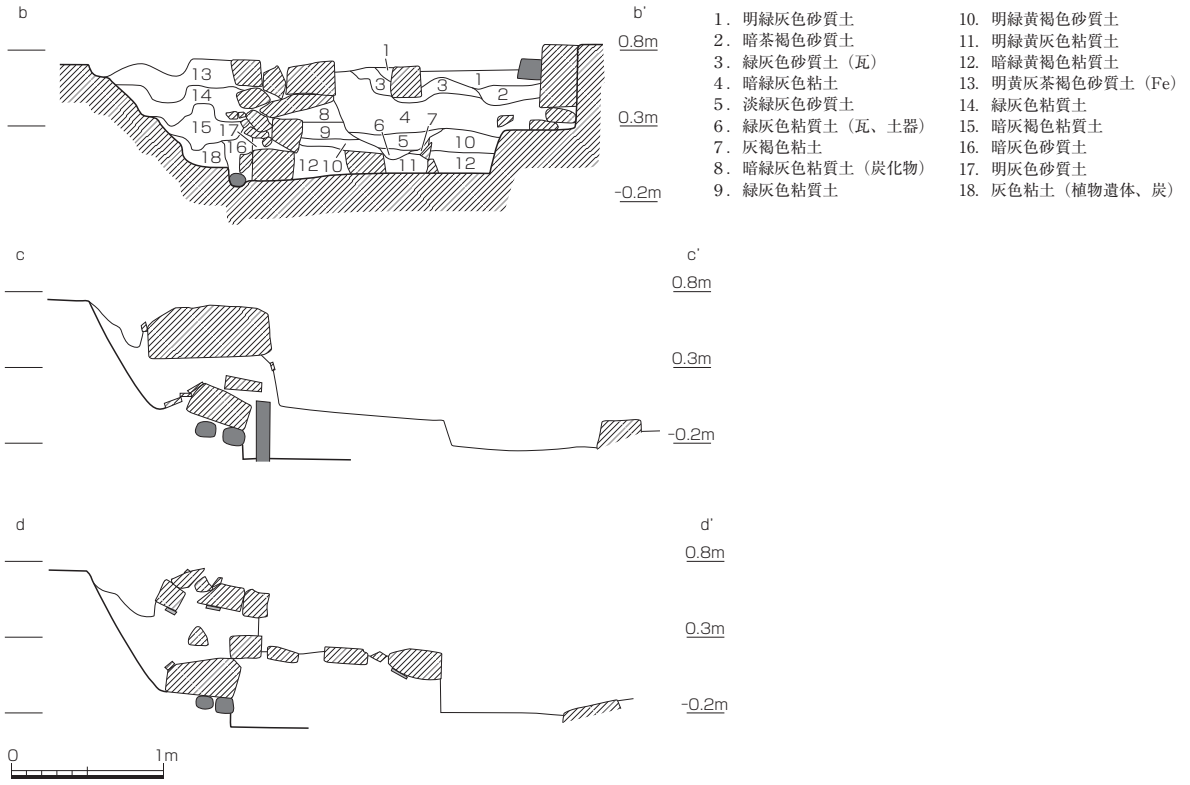


図76　SG2東半断面（縮尺1/50）

側の護岸の状況がよく残り、北岸についてはbb'断面で示されるわずかな情報を手掛かりにその構造について記述する。

水路の検出面の標高は0.8m、流水部の底面標高はbb'断面で－0.1m、dd'断面で－0.2mと東へ傾斜する。石組護岸の内法幅で1.2mを測る。bb'断面は池部と水路の取りつき部にあたり、ここで観察される埋土は、１～３層、４～７層および８～11層が水路内埋土で、新旧に分けられる。まず古段階の状況は、12～18層が石組護岸に伴う埋土および裏込め土である。堀方は北側が不明であるが、底面で幅2.1m、上面で3.2m以上、深さ0.8m以上を測る。古段階の水路（水路１）の形状は堀方底面から２段石組を設置し、その際の裏込め土が15～18層である。石組から0.3m北側に１石を設置し、その間を12層で充填する。南側護岸は上記のように復元され、石組の北側にテラスを設ける形状である。cc'断面・dd'断面はこの最古段階の水路を示したもので、テラス面の上面標高は０～0.2mを測る。

次にbb'断面で観察されるのが新段階の水路（水路２）である。新段階の水路２は石組護岸をさらに上位へ２段積み、その位置はやや北側へせり出している。その際の裏込め土が13・14層、水路埋土は４～７層である。ここではさらに新段階の改修が認められ、最新段階の水路は幅0.7m、深さ0.25mの小規模な形状となる。その埋土は１～３層である。

石組護岸の構造は胴木を設置し杭で留めたうえに石を積むもので、東半については胴木は径10㎝、長さ1.6～1.8mの丸木を２本用いている。このうち、取りつき部の胴木は、0.4m間隔で切れ目をいれ、カーブを創出する形状である（図75左下）。石組を構成する石は幅0.4～0.6m、高さ0.2～0.3m、奥行0.2～0.3mの切石が主体で、立面図にみるように矢穴が認められるものもある。

西半（図77・78）　５ライン西１m地点から南へ弧状に張りだす池部を西半として記す。検出面の標高は1.1m、底面の標高は0.6mで、検出面からの深さ0.5mを測る。S字状にカーブし、６ライン西２m地点までの石組護岸を検出した。以西は不明である。石組護岸の堀方は幅0.9m、深さ0.1mの溝状を呈するもので、底面の標高は0.5m

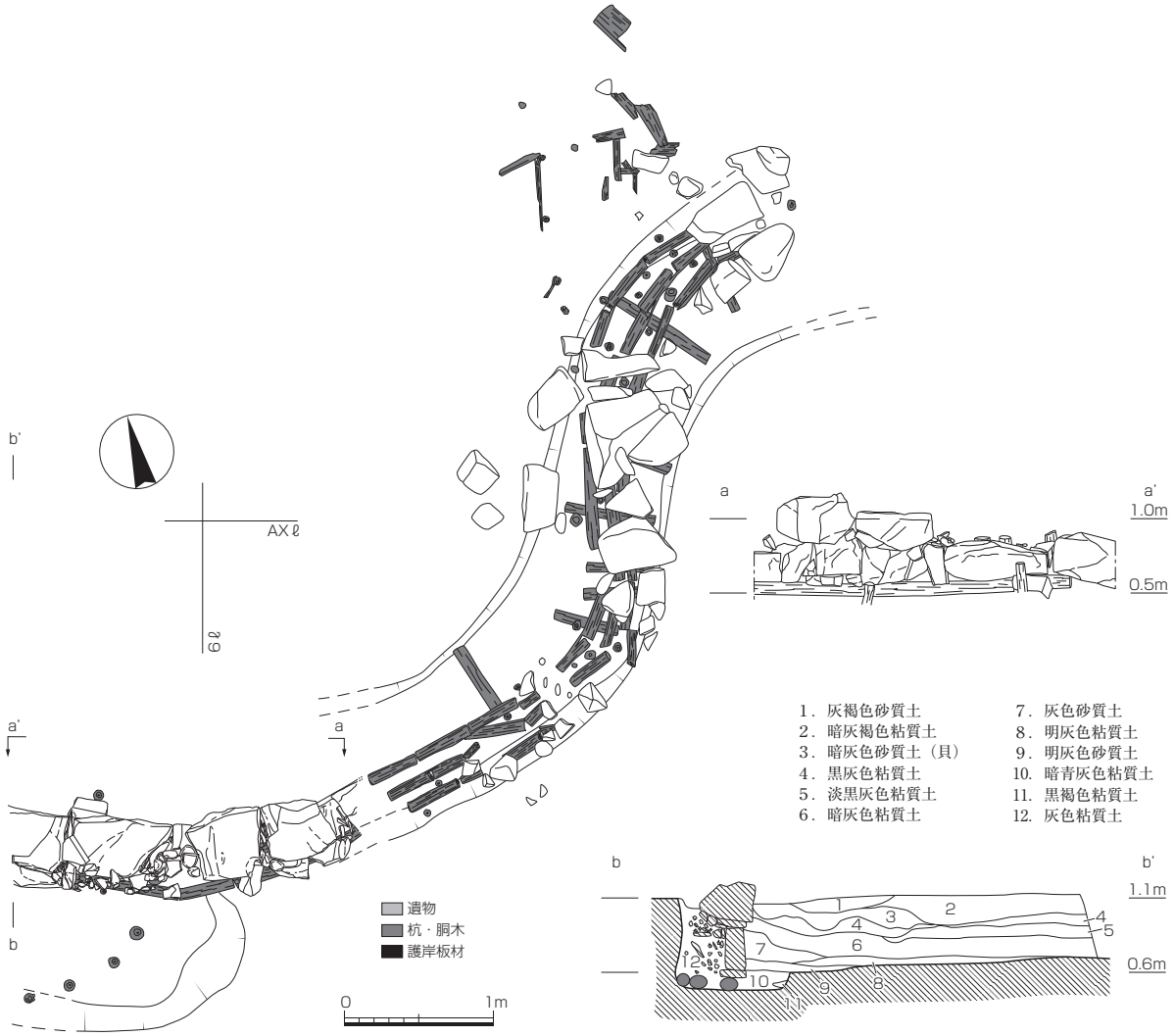


図77　SG2西半（縮尺1/50）

を測る。S字状をなす箇所は、長さ0.4～0.9mの枕木を0.2～0.8mの間隔で設置し、その上部に胴木３本並べるものである。枕木は径８～10㎝の丸木である（図78　図版29ｄ）。胴木は径10㎝の丸木に0.4m間隔で切れ目をいれ、カーブにあわせて弧状に設置するものである（図78　図版29ｃ）。枕木と胴木の間を縫うように、30本以上の杭が確認される。こうした木材による基礎構造は、石組の重量で沈下することを防ぐものと考えられる。西端では直線状に近い形状をなすためか、枕木は検出されていない。胴木については、同様に切れ目の入るものを３本並べる構造である。

石組についてはS字状部では攪乱され、原位置を留めるものは極めて少なかった。西端の状況から、北面あるいは北西側に面を揃えて、幅0.3～0.55m、高さ0.25～0.3m、奥行0.35～0.4mの切石を２段積む（図77－aa'見通し図版28ｅ）。隙間に0.1～0.2m大の石を充填する箇所もあり、不揃いである。背後に裏込めである５～10㎝大の礫が散在する。東北端では護岸堀方に直交する方向で２列の杭列が確認された。東側の列は径８㎝程の杭を25㎝間隔で打たれた３本からなる。西側の列は径８㎝の杭４本から構成され、その間隔は20～40㎝で不揃いである。どちらの列も北側に継続するか不明であり、断定は難しいが、杭列の方向と位置を考慮すると、樋門を構成する可能性が考えられる。

SG2の構造を総合すると、石組護岸を有する池とそれに取りつく水路から構成される。水路は東へ傾斜が見ら

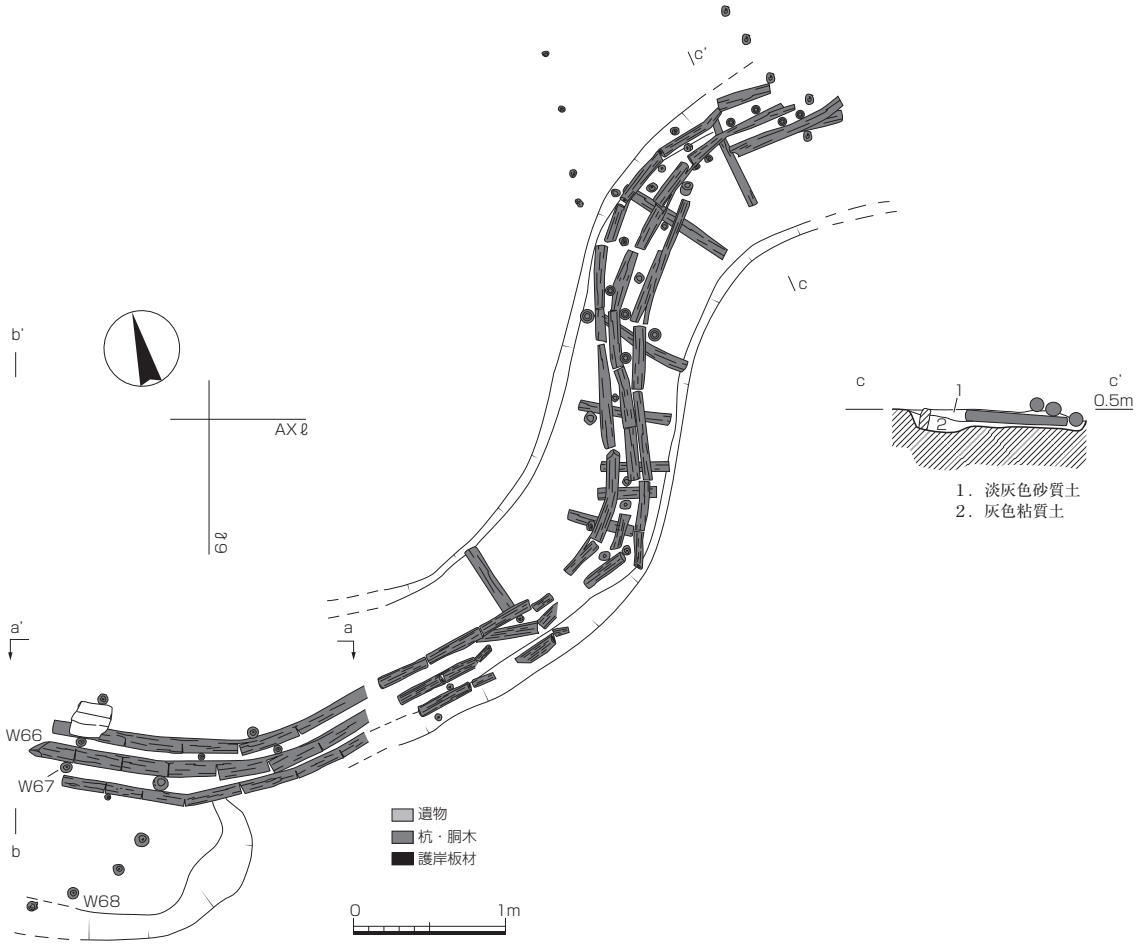
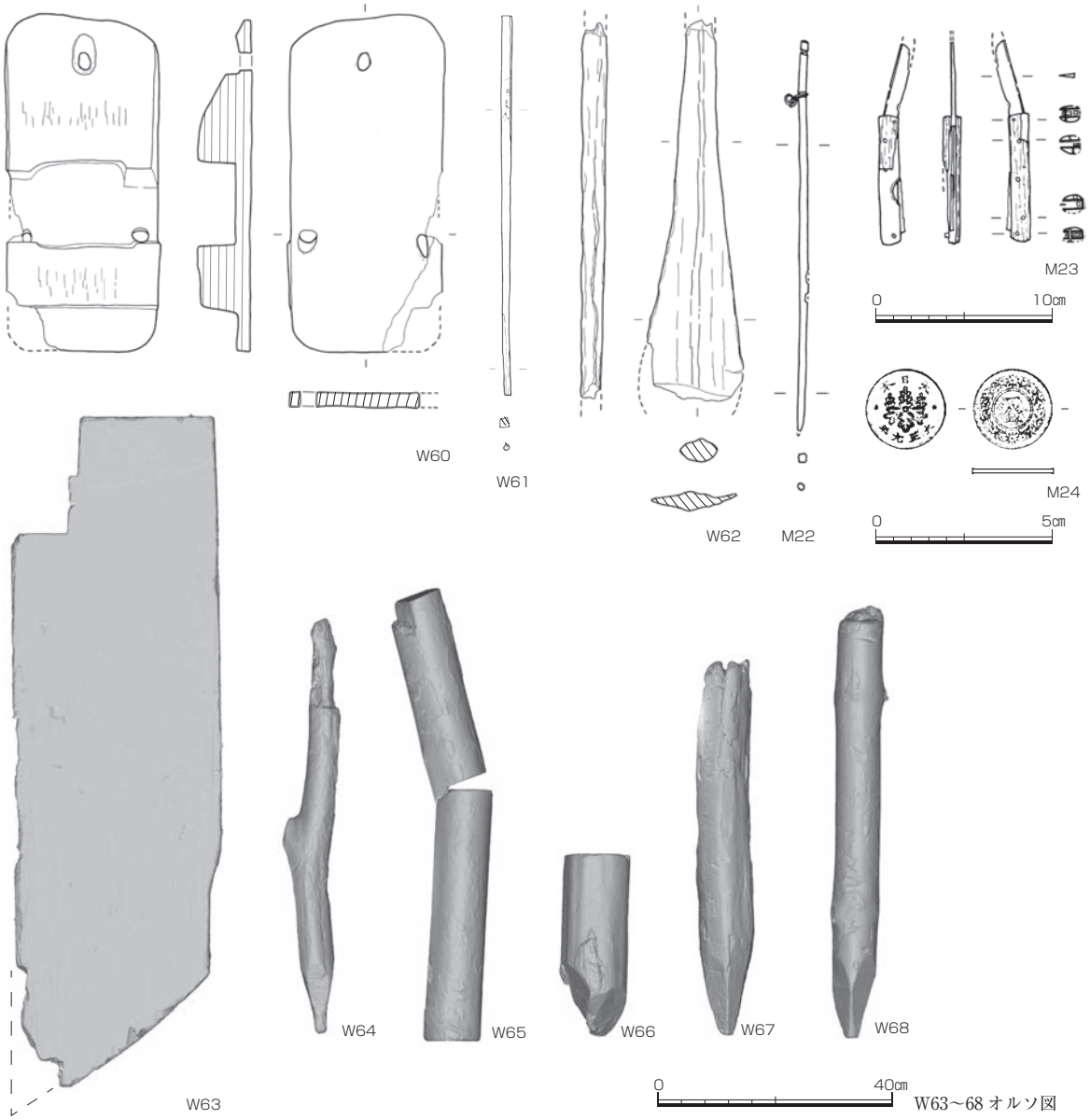


図78　SG2西半（石除去後）（縮尺1/50）

れ、排水路の可能性が高い。

SG2からはコンテナ（28ﾘｯﾄﾙ）７箱の遺物が出土した。これには石組石材は含まない。陶磁器、瓦、木製品のほか金属製品が含まれ、うち12点を掲載した（図79）。陶磁器・瓦は近世以降のものであり、図化可能なものはみられない。木製品のうちW51はケヤキ製の下駄である。池部から出土した。W61はスギの箸で東端水路から、W62はヒノキ製のしゃもじで石組護岸の西端の胴木付近で確認した。W63～65は東半水路で、W66～68は西半西端の石組護岸で出土した。W65は胴木の一部であり、切れ目の部分で図の上下とも欠損する。胴木はいずれもアカマツを用いる。W64・67・68は胴木を留める杭である。アカマツ・クリが認められる。下端の加工は４面施される。金属製品３点のうちM22は火箸、M23はナイフである。M23は折りたたみ式で柄部は青銅製の芯に木製鞘を貼り合わせる。図の裏面では木製部分が一部欠損する。刃部も先端が欠損し、一部刃こぼれも認められる。また柄部下方（dd'断面）に欠損した刃部が挟まったままで残る。東端の古段階水路埋土から出土した。M24は桐一銭銅貨で「大正九年」銘を有する。東端の水路１から出土した。このほか水路２からは「岡山大学病院」銘のある陶器が確認されている。

本遺構の時期は近代とし、造園年代は確定できないが水路１は一銭銅貨を、水路２は病院銘のある遺物を手掛かりに埋没時期を押さえることができよう。本遺構の位置する敷地は1928（昭和３）年に岡山医科大学の所有となっており、その年が一つの下限となる。水路部分は改修を経つつ大正年間にわたり機能しており、昭和の早い段階に廃棄されたものと考えられる。



W63～68 オルソ図

番号	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚（cm）	樹種	木取り	特徴
W60	下駄	28.8	8.5	0.8	ケヤキ	割材	連歯下駄、鼻緒孔のうち前壺は中軸上に穿たれる、左側先端のみ摩滅著しい
W61	箸	21.3	0.5	0.5	スギ	割材	柄の断面形状は四角形、先端断面形状は七角形、柄上部に刻書あり、判読不可
W62	しゃもじ	21.4	5.2	1.2	ヒノキ	柾目	表裏面凹凸著しい、両端欠損
W63	板材	113.9	34.7	2	アカマツ	板目	表面平滑、片側小口に方形の刳り込み（釘1点あり）、反対側小口は斜めにカット。転用か
W64	杭	70.4	5.4	4.9	クリ	丸木	先端4面。節残る、杭最終段
W65	胴木	76.8	9.3	8.4	アカマツ	丸木	専用。もう一方の面はさらに伸びる
W66	胴木	30.9	10.7	9.3	アカマツ	丸木	転用か
W67	杭	63.5	8.8	9	クリ	丸木	先端4面
W68	杭	73.2	7.3	7	アカマツ	丸木	先端4面

番号	器種	長	幅	厚	重量（g）	特徴
M22	火箸	22.1	0.4	0.4	23.4	2箇所で2本を連結。連結金具は銅製
M23	折り畳み式ナイフ	11.3	1.3	1	13.8	鉄製刃部、断面「コ」字形の青銅製装具の両面に木製装具を目釘で固定
M24	青銅銭	2.3	2.3	0.1	3.3	大正九年銘、桐一銭青銅貨

図79　SG2出土遺物（縮尺1/2・1/4・1/8）

第５節　包含層ほかの出土遺物

遺構に伴わない遺物あるいは包含層から出土した遺物はコンテナ（28ﾘｯﾄﾙ）37箱を数える。その中で注目される

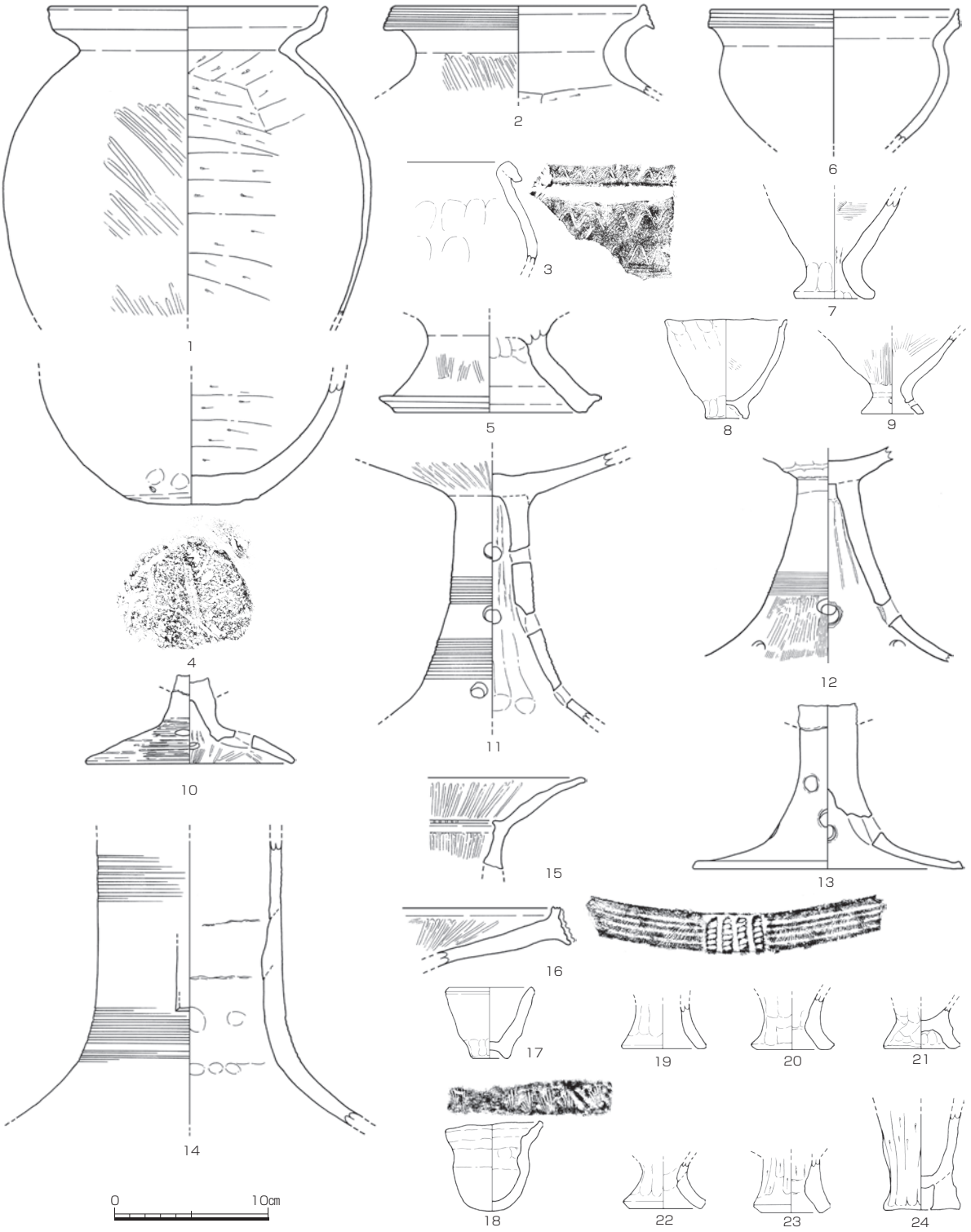
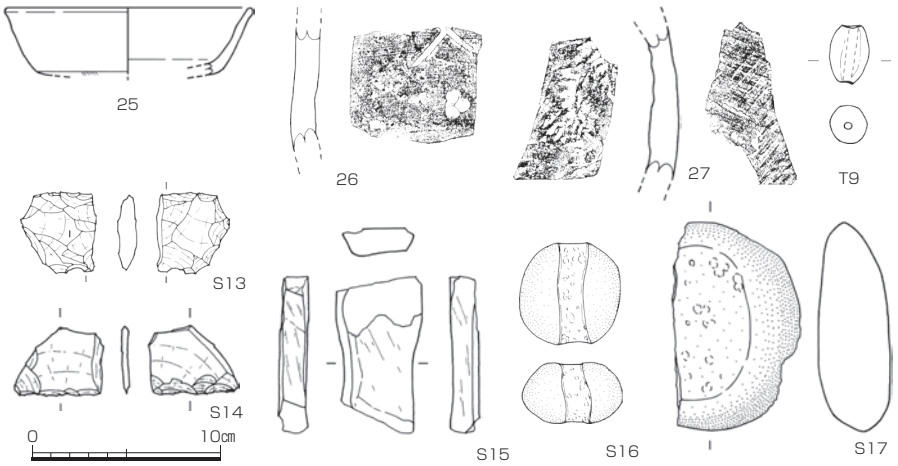


図80　包含層ほか出土遺物１（縮尺1/4）



番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存(1/6以下は－)	特徴	色調	胎土
1	弥生土器　甕	17.8	－	－	1/3	内：ナデ・オサエ・篦ケズリ、外：ナデ・ミガキ、内面に植物痕	灰白	細砂　2～5㎜大の礫
2	弥生土器　甕	16×16.3	－	－	1/1	内：篦ケズリ・横ナデ、外：篦ミガキ・横ナデ、口縁部に5条の沈線を施文	内：浅黄橙 外：浅黄橙・明橙	細砂　白色粒
3	弥生土器　甕	－	－	－	－	内：ナデ・オサエ、外：ナデ・ミガキ、口縁部・体部に3段の波状文を配す	灰黄	細砂・白色粒・赤色粒
4	弥生土器　壺	－	8.8	－	1/3	内：篦ケズリ、外：ナデ・オサエ、外底：ナデ、種子圧痕	淡橙	細砂　白色粒
5	弥生土器　台付壺	－	12.2	－	1/1	内：ナデ・オサエ、外：ハケ目、内外面磨滅、脚部1条の沈線、端部2条の沈線	灰白	細砂　白色粒
6	弥生土器　鉢	15.9	－	－	1/3	内：ミガキ、外：ナデ・オサエ・篦ケズリ、口縁部4条の沈線、内外面磨滅、煤	明橙	微砂　白色粒
7	弥生土器　台付鉢	－	4.8	－	1/3	台内：ナデ・オサエ、体内：ハケ目・絞り痕、外：ナデ、内面に剥離痕あり、磨滅	内：浅黄橙・淡橙 外：浅黄橙	微砂・白色粒
8	弥生土器　台付鉢	－	3×3.1	6.1	1/1	内：横ハケメ一部残存、外：オサエ・ナデ、内面磨滅、内外面煤	にぶい橙	微砂　2～4㎜大の礫を含む
9	弥生土器　台付鉢	－	3.9	－	1/3	内：ミガキ、内底：ナデ、外：ハケ目、底部欠損剥離、脚部円孔1カ所残存(径4㎜)	内：にぶい黄橙、 外：浅黄橙	微砂・白色粒・黒色粒
10	弥生土器　高杯	－	13.2	－	1/1	内：ナデ・ミガキ・絞り痕、外：ミガキ、円形透かし孔(径1.2cm) 対角線上に4カ所、内外面磨滅、煤	内：にぶい橙 外：橙	微砂　水濾粘土
11	弥生土器　高杯	－	－	－		杯外：ミガキ、脚内：絞り痕・オサエ、脚外：ナデ、1段目透かし孔は4方向円孔に穿つ(対角線上) 3カ所貫通、2段目4方向円孔に穿つ(対角線上) 4カ所貫通、3段目は1カ所のみ残存(円孔貫通)、残り3カ所は上部のみ残存、透かし孔間に2段の沈線があり、1段目は6条、2段目は10条	内：淡橙 外：橙～淡橙	微砂　白色粒
12	弥生土器　高杯	－	－	－		杯外：オサエ、脚内：絞り痕、脚外：ハケ目・ミガキ、脚部中央に8条の沈線、沈線の下に円形の透かし穴(上段2カ所残存・下段円孔2カ所残存)、内外面磨滅	内：淡橙 外：明橙	微砂　2～4㎜大の礫
13	弥生土器　高杯	－	－	－		1段目円孔3カ所(貫通1カ所、未貫通2カ所)、2段目円孔4カ所(貫通4カ所)、内外面磨滅	淡橙	細砂
14	弥生土器　器台	－	－	－		内：オサエ、外面に2段の沈線、長方形透かし1カ所残存(幅1.8cm、残存高4.6cm)	明橙	微砂　2㎜大の白色礫
15	弥生土器　器台					内：ミガキ・ナデ、外：ナデ・ミガキ・オサエ、内面に1条の突帯があり6カ所の刻み目が残存、内外面磨滅	内：にぶい黄橙 外：浅黄橙	細砂　白色粒
16	弥生土器　器台	－	－	－		内外：ナデ・ミガキ、口縁部鋸歯文4カ所、棒状浮文4カ所、口縁端部2条の沈線	黄橙	細砂　白色粒
17	弥生土器　ミニチュア土器	－	2.4×2.7	－	1/1	内外：ナデ・オサエ、内底：オサエ、内外面剥離	淡橙	微砂・白色粒・白色礫
18	弥生土器　ミニチュア土器	5.9×6	1.9	5.5	1/1	内外：ナデ・オサエ、頸部に5条1組の単位の文様、内外面磨滅	橙	微砂
19	弥生土器　製塩土器	－	5.1×5.4	－	1/1	外：オサエ、内外面被熱、ヒビ	暗褐	細砂・白色粒・2㎜大の白色礫
20	弥生土器　製塩土器	－	4.5	－	1/3	内：オサエ、外：オサエ・ナデ、剥離、被熱	内：暗褐 外：にぶい橙・橙	細砂・白色粒・2㎜大の白色礫
21	弥生土器　製塩土器	－	4.8×4.6	－	1/1	内：ナデ・オサエ、外：オサエ、外面煤付着	内：淡黄　外：橙	細砂　白色粒　黒色粒
22	弥生土器　製塩土器	－	4.4	－	1/1	外：ナデ、内外面被熱、剥落	暗褐	細砂・白色粒・2㎜大の白色礫
23	弥生土器　製塩土器	3.6	－	－	1/1	内：ナデ、外：オサエ、被熱による劣化	暗褐	細砂　2㎜大の白色礫　白色粒
24	弥生土器　製塩土器	－	4.7	－	1/2	内：ナデ、外：ナデ・オサエ・篦ケズリ	内：黒褐、 外：褐灰	細砂　白色粒　赤色粒
25	土師器　杯	12.7	－	－	1/6	内外：ナデ、外底一部ハケ目残存、内外面磨滅、丹塗りの可能性、種子圧痕	淡橙	細砂　白色粒
26	備前焼　甕	－	－	－		内外：ナデ、外面に文字(「入」の可能性)	内：暗赤 外：暗赤褐	細砂　白色粒
27	備前焼　甕	－	－	－		内：ナデ・当て具痕、外：格子目	暗褐	微砂

番号	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	特徴	色調	胎土
T9	土錘	2.9	2.1	1.9	10.6	ナデ、径0.4×0.3cmの穿孔	灰～暗灰	微砂

番号	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	残存	石材	特徴
S13	石包丁	3.8	4.2	1.0	19.1	一部	サヌカイト	連続剥離による調整
S14	石包丁	2.5	4.6	0.4	9.5	一部	サヌカイト	端部を連続剥離による調整
S15	砥石	8.1	4.5	1.5	69.8	一部	流紋岩	砥面4面
S16	石錘	5.2	5.1	3.1	115.5	完形	安山岩	中心に擦痕
S17	円礫	10.9	6.6	3.8	310.0	一部	細粒花崗閃緑岩	上下面平滑、一部敲打痕の可能性

図81　包含層ほか出土遺物2（縮尺1/4）

遺物を掲載した（図80・81）。土器27点、土製品１点、石器５点である。

図80－２・３・５・９・16・17・19・20・22・23および図81－S14・15・17は＜10層＞出土、図80－８・10・12・18は＜９層＞・＜10層＞出土、そのほかはいずれも＜１層＞および攪乱出土である。大半が弥生時代後期の土器であり、造成土や攪乱からも比較的大き目の破片、あるいは接合する資料が多いことが特徴的である。４の壺外底部には２個の種子圧痕が認められた。図81－25は丹塗りの可能性がある土師質土器椀である。同－26・27は備前焼甕の胴部で、26には外面に「入」の文字が刻まれる。S13・14は石包丁の可能性が考えられる。いずれもサヌカイト製。S15は流紋岩製の砥石で４面がよく使われている。S16は安山岩製の石錘、S17は敲石の可能性のある円礫である。